デザートセンター特集

UFO contactee

GAP JAPAN NEWSLETTER

UFO・超能力・宇宙哲学

SUMMER
1989

105

デザートセンター円盤着陸事件

アダムスキーに会った唯一の日本人

過去生透視法とその実例(2)

長野県に巨大UFO出現!(美しい金色の物体)

月面上空を飛んだUFO(NASA職員が暴露)

〈連載第8回〉

UFO-宇宙からの完全な証拠

CONTENTS

〈巻頭言〉大変動は発生しない 1
デザートセンター円盤着陸事件 久保田八郎/篠芳史/坂本貢一・茂子 2
アダムスキーに会った唯一の日本人 向井 裕 16
過去生透視法とその実例(2) 遠藤昭則 22
「知らせる運動」参加の意義 川上富喜 28
強固な意志で生きることを教えられた私 大久保千秋 28
金星を目指して進む 内田洋子 29
輝く星々の彼方へ 斉藤庄一 30
長野県に巨大UFO出現! 博田文喜 32
月面上空を飛んだUFO 久保田八郎 34
科学—SCIENCE 36
GAP短信 37
UFO-宇宙からの完全な証拠〈連載第8回〉 ダニエル・ロス 38
〈投稿欄〉ユーコン広場 46
本誌バックナンバー掲載記事目録 48
〈予告〉山形 仙台合同支部大会／大阪支部大会 49
〈広告〉アダムスキー全集／英文版ユーコン／編集後記 50
日本GAP全国月例研究会案内 51

◀金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

表紙写真
ホロマン空軍基地上空のUFO
アメリカのマスカレロ・インディアン保護区のインディアン局に勤務する看護婦エラ・ルイス・フォーチュンは、1951年10月16日、ニューメキシコ州ホロマン空軍基地付近でこのUFOを撮影し、一躍UFO研究界で脚光をあびた。

〈巻頭言〉

大変動は発生しない

今年は西暦で一九八九年。二十一世紀まであと十一年。今世紀最後のこの期間がどのように推移するかは興味深い問題だ。

ところが地球規模の大変動発生予言なるものが早くから流れていた。恐ろしい予言類を書きたてた書物が巷間に氾濫したが、的中したためしがない。しかし危機感を煽りたて、恐怖心を植えつけるこうした雑誌記事や本は、心霊問題を扱ったものと同様に売れ行きがよいと、ある編集者から聞いたことがある。怖いもの見たさの心理が働くのだろう。

かつて富士山大爆発予言の本が出たことがある。しかし秀峰は微動だにしない。観光客を奪われると怒った地元では告訴騒ぎまで起こったが、うやむやになってしまった。こうした本は罪悪にならないらしい。

いったいに世紀末というのは人心に動揺を与えるらしく、前世紀末も特に文芸思潮において終末思想が顕著であった。ニーチェの文化否定的厭世観の影響下にヨーロッパ各国でメランコリーと現実逃避の思想が蔓延している。フランスの象徴派群小詩人、イギリスのイエロー・ブックを中心とする一派、その他があった。

現在、世界の文芸思潮にこうした傾向は見られないが、これはノンフィクションに押された結果で、高度経済成長をとげて飽食暖衣に明け暮れする国で刺激を求めたり、こうした国に対する羨望が裏返しになったりして、大変動発生予言が跳梁するらしい。

先日もある方面から聞いた。一九九四年までに世界中が破壊的打撃をこうむる一大天変地異が発生し、世界の人口の四分の三が失われ、中国奥地の人々が多数生き残るという予言者がヨーロッパに出たという。地球は環境汚染、公害、核実験等で破壊されこそすれ保護的な方向には動いていないから、何かの局地的変動はあるだろうが、五年後に三十余億の人間が消滅するとは発言者の頭が大変動を起こしている。

疑心暗鬼を生ずるというが、人間、恐怖心を起こし始めたらブレーキがかからなくなる。特に今世紀はUFO問題、核兵器、地軸シフト等が重なって多種多様な大変動予言が頻出したけれども実現した例は皆無であった。地震の予言で発生年月日まで打ち出したものは一〇〇パーセント的中しないと、ある高名な地震学者が言っている。

危険な地域は科学者が調査研究しているから、その警告に従うべきだとアダムスキーも述べているのだ。

昨年のアルメニア共和国における地震も被災者にとってはこの世のカタストロフィー（大破局）だろう。気の毒なことだ。だが九百年前にもこの付近で大地震が発生して古代都市アイニが崩壊消滅した事実があり、この地域はアラブ・プレートと呼ばれる地震層だという。それならなぜ耐震建築物を普及させないのだろう。古い石造建築よりも新しいビルが崩れたというのだ。前年イタリアで家屋の建築を見ておどろいた。煉瓦を無造作に積み重ねるだけで、地震のときには崩れてくれと言わぬばかりの工法を用いているのだ。

しかし重要なのは大地震にそなえての物理的な耐震設計ばかりでなく、人間が発する想念波動の高次元化である。まだ起こりもしない未来の出来事に人々が不安や恐怖をいだくならば、そのマイナスの想念によって自分自身に不幸を引き寄せることになるだろう。

アダムスキー哲学の真髄は人間からこうした恐怖を除き、逆に明るい希望を持たせて、未来への建設的なイメージを起こさせる点にある。しかもテレパシックな感知力によって地震さえも予知できることは彼の著書『テレパシー開発法』に述べてあるとおりだ。

大変動が発生することを前提とし、それにそなえて宇宙哲学をやるというのは一見もっともらしいが、実は裏に恐怖が潜んでいる。大変動予言類に飛びつきやすい人ほど恐怖心のかたまりとみてよいだろう。一方、万物と万人に希望を持つ人は、危険をのがれて自分自身に良き運命と良き環境をもたらすのである。

われわれがアダムスキー哲学を学ぶのは終末論的ビジョンをいだくためではなく、自己のマインド（心）から不安、恐怖、分裂感情等を除去し、大安心の境地に至ることを第一義とするのである。そのためにはアダムスキーが力説している〝宇宙の意識〟と自分のマインドとを一体化させて清澄透明な精神を持つ必要がある。そのため東京月例会では具体的な方法を説明し、研修を実施して、さらにテレパシー、オーラ透視等の能力開発を指導しているが、成果は確実にあがっている。

断言するが、今世紀末から来世紀にかけて世界の人口の大部分が失われるような天変地異、全面核戦争は絶対に発生しない。局地的小競り合いや地震等はあるかもしれないが、それは地球全体の地理に影響を及ぼすほどのものではないから心配は無用だ。むこう百年間、東京で大地震は発生しないし、日本列島が沈没することもない。

巷に流布するデマ本や虚説に惑乱されることなく、自己の内奥の〝宇宙の意識〟から来る印象に従うようにし、さらに「すべてが良くなる！」という無限の希望に満ちた想念波動を放ち続けるならば、本人は良きカルマ（運命）を形成することになるだろう。（久）

Adamski's Contact in Desert Center is the Truth!

デザートセンター円盤着陸事件

――真実であったアダムスキーのコンタクト――

〈第二次デザートセンター日米合同調査報告〉

今を去る三十七年前の一九五二年十一月二十日、アメリカのUFO研究家ジョージ・アダムスキーは、米カリフォルニア州南部の砂漠地帯デザートセンターで、別な惑星から来た巨大な宇宙船（母船）を目撃、続いて降下した一機のスカウトシップ（円盤）から出てきた異星人とコンタクト（会見）した。六名の同行者もこの模様を目撃して宣誓書を提出。この状況は、一九五三年に出版されたアダムスキーの第一著Flying Saucers Have Landedで報告されて世界のUFO研究界に大センセーションを起こしたのである（日本語訳はアダムスキー全集第1巻『宇宙からの訪問者』の第一部『空飛ぶ円盤は着陸した』に収録）。

わが国最大のUFOと宇宙哲学研究団体・日本GAPは一九七七年以来、海外研修旅行でアメリカのあるグループの案内によりデザートセンターを数度視察してきたが、それは正確なコンタクト地点ではなかった。そこで昨年十一月二十日、八名から成る調査団を編成して現地を探索し、円盤着陸跡と思われる驚くべき曲線が地面に残っているのを発見したが、夕暮れで充分な調査や撮影が不可能なために引き揚げた（本誌104号に記事を掲載）。

その後再度この曲線跡を精査するべく、本年一月二十一日、第二次調査団が現地へ向かった。

❶The Real Contact Spot is Located!
by Hachiro kubota

正確なコンタクト地点を発見！

●久保田八郎〈日本GAP会長〉

昨年十一月に思いがけぬ場所で曲線を地面に発見した詳細は前号の記事で伝えたが、あのときはすでに五時近く、太陽が沈んで暗くなったために、私の持つ6×7判カメラでストロボなしに撮ることは不可能だった。松村君が試しに35ミリカメラでストロボをたいて撮影したけれども、曲線を成している白い石以外の別な石まで反射して光ったため、出来た写真は全く曲線を見せてはおらず、ガタガタの状態になっていた。こうなることは最初からわかっていたので、現地を去るときに再度ここへ来ることを決意し、同夜ロサンゼルスの夕食会でその信念を披瀝したところ、二名の替同者があった。

しかしその内の遠藤昭則君は仕事で都合がつかず、結局、東京本部役員総代の篠芳史、秋田支部会員の坂本貢一・茂子夫妻と私の四名だけとなって勇躍成田空港を出発したのは本年一月二十日である。三メートルばかりのたった一本の謎の曲線を求めてアメリカの大砂漠地帯まで遠征しようというのだから執念は相当なものだ。

一月は年間を通じて海外団体旅行の費用が最低額ですむ。米西部までの四泊六日の往復航空運賃・ホテル代合計十二万三千円。国内旅行なみの格安値段だが、これが夏になると値上がりし、同じコースでも三十五～六万円にはね上がると、今回も旅行をセットした田中正氏（日本GAP東京本部役員・旅行会社部長）が言う。夏と冬では大差がある実状を知って旅行することが肝要だ。

◀ロサンゼルスにて、前列左よりロス夫人、久保田、ロス。後列左より、坂本、坂本夫人、芦田、篠の各氏。

同じ二十日の午前十時すぎにロサンゼルス着。一応団体旅行なので他の日本人青年男女十数名と合流してヨットハーバーへ行くも、以後の観光はことわって、三時すぎにハリウッドのホテルへ入り、少憩後、夕方ロス夫妻と久方ぶりに再会し、六名は日本料理店へ行く。

曲線を発見したという私の書簡を受け取ったロス氏は矢も盾もたまらずサンフランシスコから車を飛ばしてきたのである。十一月にこちらで世話になった在米GAP会員・芦田殉子さんも見えて、計七名で一晩を愉快にすごす。十一月のデザートセンター行きの経験からかんがみて、明朝はなるべく早く出発するほうがよいという私の提案を一同は素直に受けいれた。

ガソリンスタンドから十・一マイル

明くれば二十一日、ワンボックスのレンタカーで七時に出発。曇り。温度は摂氏二十四度、湿度四十パーセント。暖かい。前夜の芦田さんの話によると私たちが来る前日までカリフォルニア州は寒い日が続いたが、二十日から急に気温が上昇したという。全くツイている。

まずロス氏が運転して片側四車線のハイウェーを疾走。七時四十分頃から貢ちゃんが代わって運転する。左ハンドルの右側通行だが、坂本夫妻はむかしアメリカに二年留学して運転の経験があるので腕前は相当なものだ。

トヨタ、ニッサンなどの日本車がやたらと目立つ。アメリカ車ではシボレーが多い。

六名とも四十歳以上、GAP活動促進のためにこの世に出てきたような人間ばかりだから波動がピタリと一致して車内の雰囲気は素晴らしい。同質結集の法則を如実に感じる。カルフォルニアは見なれているので、なるべく空を眺めるようにする。UFOを見つけるためだ。

九時四十分にリゾートとして名高いパームスプリングズの町で停車し、レストランで食事をとった後、十時十分に出発。空に晴れ間がのぞいて幸先よい。

車は次第に砂漠地帯へ入り、広漠たる大平原が展開する。道はカ州南部の内陸部へ東に伸びてアリゾナ州方向へ続いている。ここは米西部のモハーベ大砂漠の一角。砂漠といってもエジプトのサハラ砂漠のような微細な砂の海ではなく、おおむね固い地面に石ころや低い灌木が散在する不毛地帯である。このあたりへ来るたびにアメリカの国土の雄大さを実感する。

十一時頃からDesert Centerという標識が道路の右側に見え始めて十一時二十七分にガソリンスタンド前へ到着。ここで停車して小休止。この辺はむか

◀デザートセンターのガソリンスタンド。

▼ガソリンスタンド前の標識。

しとはずいぶん変わって道路が整備され、ガソリンスタンドも建て替えられている。

ここはアリゾナ州境の町ブライズへ行く道とパーカーダムの方へ行く道の分岐点になるので、コンタクト地点へ行くにはまずこのテキサコ・ガソリンスタンドを目標に行けばよい。

ここへ到着すると、ガソリンスタンド前の道路をへだてた角に標識があるので、それを見て、Parkerと書いて矢印で示してある方向へ行く。つまりガソリンスタンド前を直進すればよいのである。

ここからが重要だ。というのはアダムスキーの『宇宙からの訪問者』によると、一九五二年十一月二十日にアダムスキー一行は、このパーカー街道を約十七キロメートル（約十一マイル）行った地点で停車して降りたと述べてあるので、とかく十一マイルという数字にこだわりがちになるのだが、この位置は一同が最初に母船を目撃した場所であって、アダムスキーはその直後に車に乗り、ルーシー・マクギニスに運転させて約八百メートル（〇・五マイル）引き返し、ここから右折して近道をさらに八百メートル進行したと書いている。したがってガソリンスタンドから起算して十一マイルの所で停車すると、コンタクト地点へ行くには遠すぎるのだ。

結論からいうと、二日間にわたる私たちの調査で判明したのは、十・一マイルの位置で停車し、下三桁が二〇九という数字の付いている電柱の所から砂漠地帯へ入れば最短距離でコンタクト地点へ行けるのである。

▶一九五二年十一月二十日、デザートセンター交差点から十一マイルの地点におけるアダムスキー（右）と助手のルーシー・マクギニス。

崩れていた曲線

しかしこの日私たちは十・三マイル辺の所に車を停めて、曲線の残っている沢を目指して歩き始めた。気温は摂氏二十八度、風はなく、快適な天候だ。時刻は十二時。前方には高い岩山がつらなっている。

まもなくケルンを見つけた。十一月のときと同様に真ん中に角材が突き立ててある。頭に黒い帽子をかぶったような尖った山が目印になっており、その右のふもとの沢へ入って行く。ここは一昨年夏のGAP海外研修旅行でロス氏の案内により訪れた場所で、コンタクト地点に接近したと思われたのに暑さと疲労で引き揚げた所である。

深い川の跡が見えてきたので、一同は右岸の斜面を登って行った。そしてその奥に右側へ登り坂になった急斜面があるので、さらにそれを登ると、途中にケルンが築いてある。川の縁から坂の頂上までを篠さんが巻尺で測ると四十八メートルあった。ケルンは昨年十一月に見たとおりのままだ。

坂を登りつめると曲線は残っていた。だが意外にも崩れている。十一月に見た素晴らしい曲線は跡片もなく消え去り、白い石が不規則に並んでいるだけだ。だれかがいたずらしたのか。

拍子抜けした私のそばにロス氏が浮かぬ顔をして立っている。一同も無言のまま立ちつくすだけだ。

いたずらではあるまい。二カ月間の風雨で自然に崩れたとしか考えられない。とすると十一月二十日に私たちが発見した美しい曲線は、調査団がそこへ行くことを察知したスペース・ピープルが前夜ひそかに円盤で降下し、傾いた状態で回転しながらタッチダウンしてフランジの縁で地面の石（複数）を擦りながらつけたものなのだろう。三十七年前のものではなかったのだ。

ということはスペースピープルが私たちの動向を知って歓迎の意を表してくれたという意味にもとれるので、そうだとすれば失望するにはあたらない。むしろ注目されていることに感謝すべきだろう。

▶山中に残ったくずれた曲線を前にして。

もう一つ気付いた事がある。この坂のふもとの右岸の砂原地帯がコンタクトの現場だと考えて前号の記事で写真を掲載して説明したが（本誌104号二十頁の写真A）、その二点の下の写真、すなわち三十七年前のコンタクトの直後にウィリアムソンがしゃがみ込んで石膏をとっている写真の中で、両側から張り出している黒い斜面と一致する場所がどうしても見つからないのだ。

十一月には夕暮れがせまったため精査する時間がなかったので、ウィリアムソン一行を撮影した人は、たぶん私が撮影した位置よりももっと左後方から撮ったのだろう、そうだとすれば左側の丘の斜面が画面に入ってくるはずだと簡単に考えていたが、今回は時間

が充分にあるので、あちこち歩きまわってウィリアムソンの写真と比較してみるのに、現地の実景はどうも写真と合わない。左方へ後退すれば左側の斜面はファインダーの視野枠に入ってくるが、そのかわりに右側の黒い斜面が右方へ遠ざかって、はるか彼方の山脈のスカイラインが余分に入ってくる。「ここは違うぞ」と私は考え始めた。ロス氏はまだ浮かぬ顔をして歩きまわっている。

ついに発見したコンタクト地点

二時半ごろまでここにいたが、「ここにはどうしても解けない謎がある」とロス氏に語りかけようと思っているうちに、篠さんが私に言った。

「実は家を出発する日の朝、遠藤さんから電話がありまして、十一月に行った場所は違うと思うので、もっと左手の方向を探してみてくれということでした。山を越えて移動しませんか」

遠藤君の超能力は抜群なので、この言葉は的中しているかもしれない。それなら移動してみようと決意し、坂本夫妻、ロス夫妻にも呼びかけて装具をまとめ、深い川の跡をなんとか横断して、右手の小高い山を登り始めた。遠藤君の言う「左手」というのは道路から山脈を見て、向かって左側の意味で、私たちは山中にいてはるか彼方の道路を遠望しているから、右手の方向へ移動することになる。

六十歳なかばの私には楽な行動ではなかったが、仲間の助けで尾根を二つ越えて眼下を見ると、広い砂原地帯が展開した。ここにも幅の狭い浅い川の跡がある。「ここかもしれない」と直感した私は急に元気づいた。

岩石がごろごろしている斜面を降りて、私は川の左岸地帯へ降りて行った。道路側から見れば右岸になる。最初行った場所よりも砂原が広く、キャンプに適したような場所だ。他の人たちは右岸地帯へ散らばっている。

私はウィリアムソンの写真を左手に持って眼前に突き出し、目を皿のようにして現地の地形と写真を交互に見くらべながら前進した。

「あった！　ここだ！」

ウィリアムソンの写真と完全に一致する地形が視野に入ったのだ。しゃがみ込んで前方を凝視すると、アダムスキー一行がそこに出現してくるような錯覚が起こる。

「ヤホーッ」と私が遠くに散っている仲間に大声で呼びかけて地面を指すと、一同がかけ寄ってくる。

「見つけたよう！　ここだここだ！」と写真を突き出して一同に見せると、みな一斉に驚喜の叫び声をあげる。パメラ夫人も「Finally！(とうとう見つけたわね)」と叫ぶ。

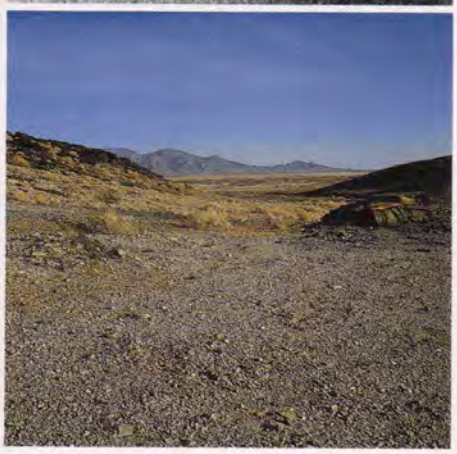
私自身が何かに引っ張られるようにしてここへ来たとしか言いようがないが、これは私だけの手柄ではない。遠藤君の助言、それを忠実に守った篠さん、行動を共にして互いに助け合った坂本夫妻、ロス夫妻等、みんなの手柄だ。もっと大きく言えば私を支持して下さる全GAP会員の手柄でもある。

不思議な粘土質の地面

この砂原地帯の少し奥の斜面から後方の山々を見ると、やはりウィリアムソンの本に出ている写真、すなわちアダムスキーがコンタクト現場に立っている写真の背後の山々のスカイラインと完全に一致することもわかった。

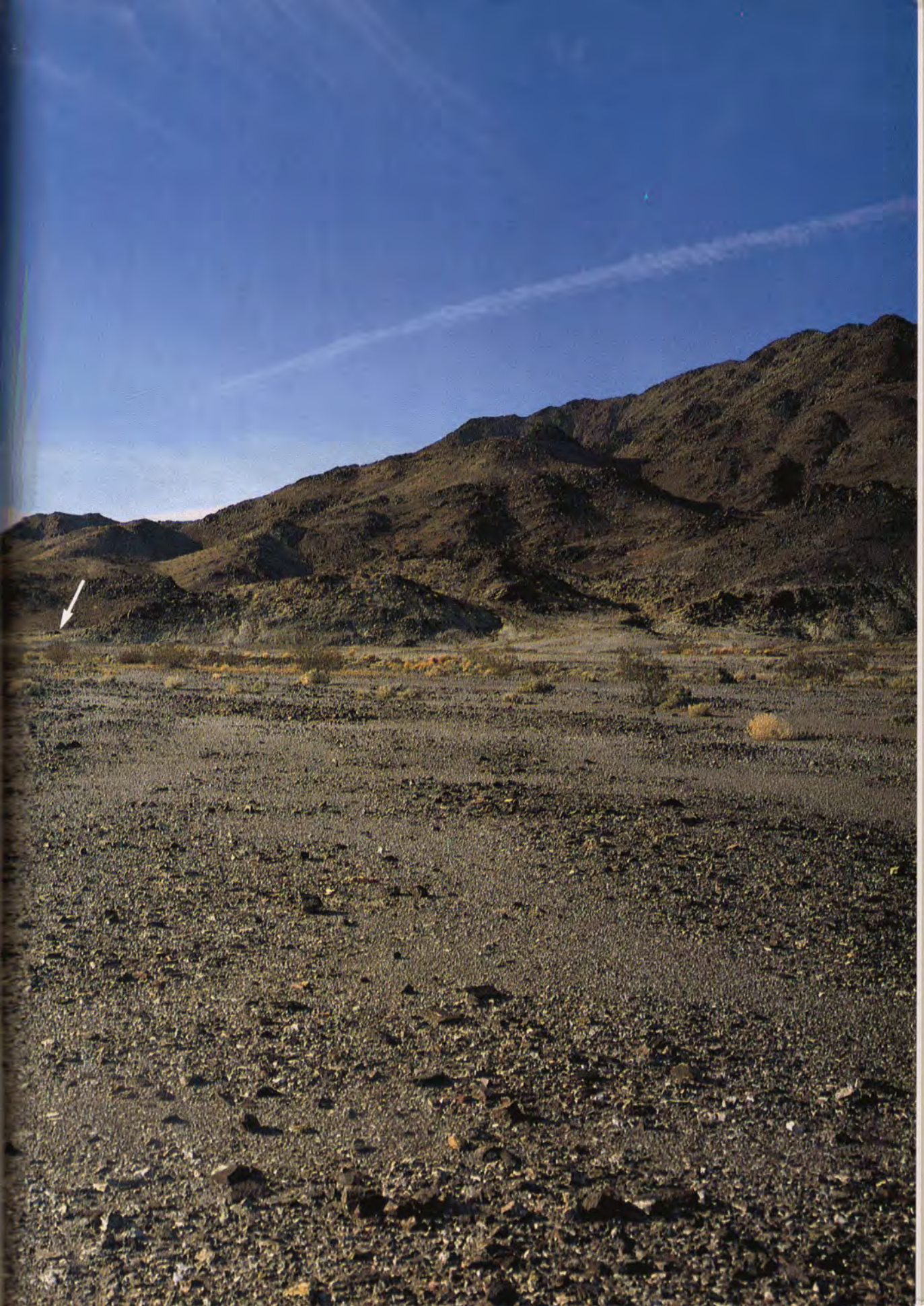
さらに不思議なものを発見した。この砂原は全く水気がなく、靴跡はつくけれども到底石膏がとれるような状態ではない。おそらく三十七年前もそうだったのだろう。

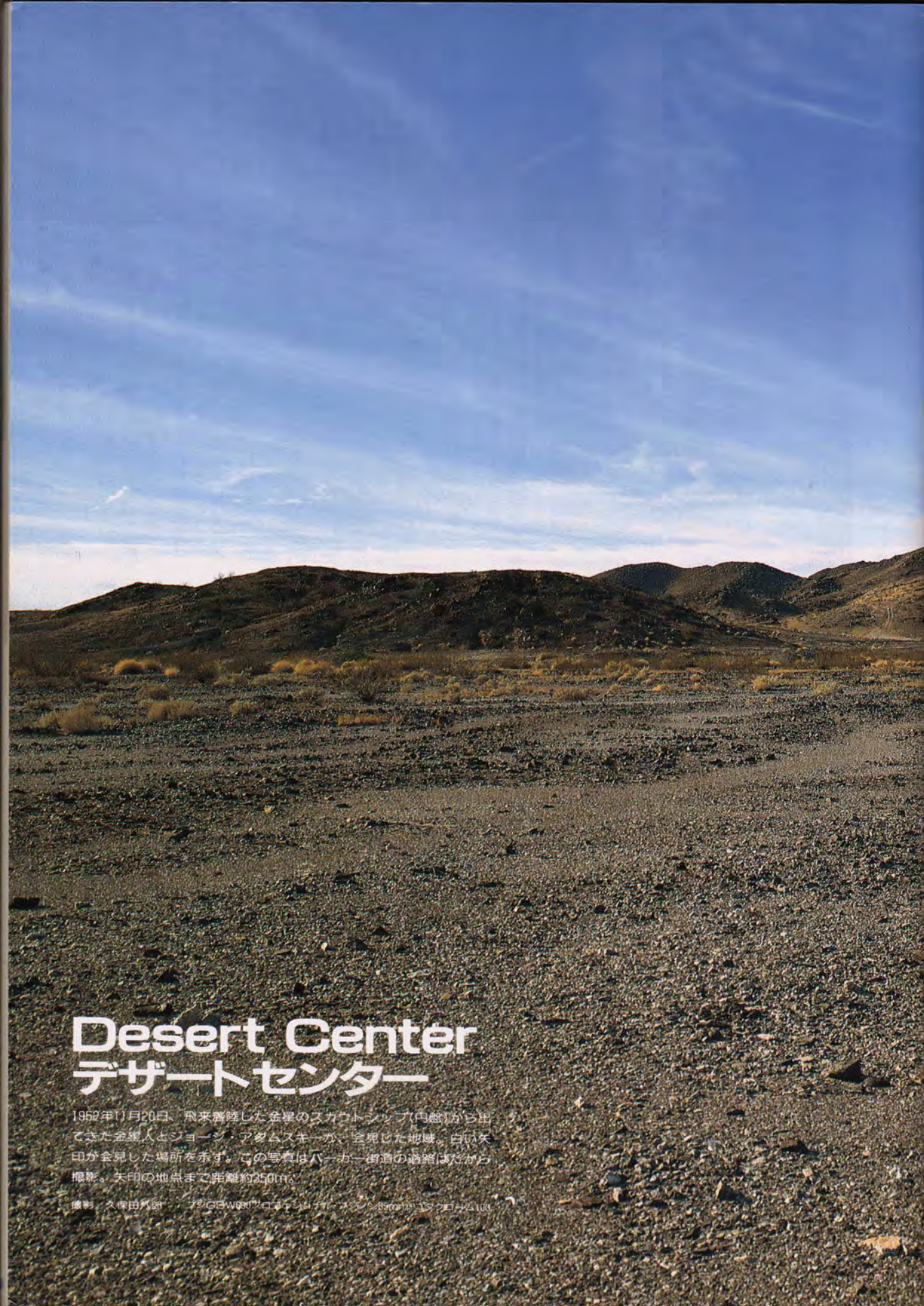
ところが金星人オーソン氏が靴の跡をつけたと思われる位置から少し離れた一メートル四方の場所だけはどうい



◀上は一九五二年十一月二十日、アダムスキーと会見した金星人の足跡の石膏をとるウィリアムソン。下は一九八九年一月二十一日に同じ場所を撮影した写真。周囲の地形と遠方の山脈のスカイラインが完全に一致している。

▼不思議な粘土質の地面。靴底の模様が鮮明に残る。



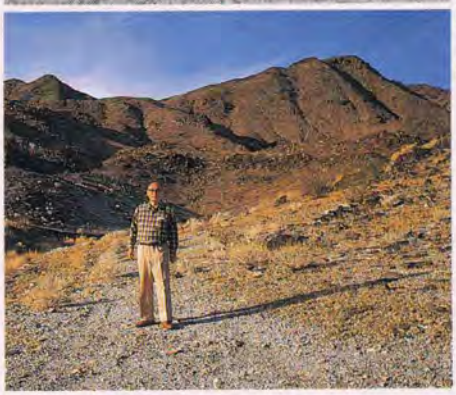


Desert Center
デザートセンター

1952年11月20日、飛来着陸した金星のスカウトシップ(円盤)から出てきた金星人とジョージ・アダムスキーが、会見した地域。白い矢印が会見した場所を示す。この写真はパーカー街道の道路上から撮影。矢印の地点まで距離約350m。

撮影：久保田[illegible]　カメラ：Nikon[illegible]　レンズ：[illegible]　フィルム：[illegible]

▶コンタクト地点にて。



◀上は一九五二年十一月二十日、円盤着陸地点に立つアダムスキー。下はアダムスキーの位置よりも約十メートル前方に立つ筆者。背後の山は一致している。

うわけか水分を含んだ茶色の粘土質の地面で、靴の跡がくっきりと残る。これなら石膏をとるのも容易だろう。

なぜここだけが粘土質なのか。だれかが水をまいたのか。しかし水をまいてもすぐ吸収されて、こんなにネバネバした土にはなるまい。この砂漠一帯は全く水気のない所で、粘土が存在するとは到底考えられない。結局、謎である。

このコンタクト地点を発見したのは三時頃で、まだ時間の余裕は充分にあるから、アダムスキーがコンタクトする前に撮影した、山の馬の鞍状の部分に黒い円盤が斜めに半分ほどのぞいている写真の現場の探索にかかったが、これがなかなか見つからない。

原書の写真説明ではブローニー判カメラで撮ったとあるけれども、写真のボケ具合から見ると、六インチ反射望遠鏡にハギードレスデンの手札判カメラを取り付けて撮ったとしか思えない。そうだとすると、かなり遠方の山々の頂上を撮影したのだろうから、肉眼では確認できないだろう。

そこで双眼鏡で峰々を望見するのに、似たような場所はいくつか見られるが、いまひとつ、これだという決め手がない。

そうこうするうちに三時半頃セスナ機が一機飛来して、私たちの頭上を超低空で旋回し始めた。砂漠を怪しげな人間五～六人がうろついていると、だれかが通報したために偵察にきたのだろう。知らぬ顔をしていると、やがてアリゾナ州方向へ飛び去った。

そういえば道路ばたに停めてある私たちの車の近くに大きなバン型の車がいっとき停車していることに一同は気付いていた。セスナ機はこれと関係があるのかもしれない。大体この辺一帯は連邦政府の調査区域だという意味の掲示板が電柱のそばに立ててあった。

▼上の写真のコンタクト地点に出現した金星人。遠くからアリス・ウェルズ女史が双眼鏡で観察しながら描いたもの。

地球人への知識伝達？

アダムスキーは金星人とコンタクトする前に六インチ反射望遠鏡に手札判カメラを装置し、数枚の写真を撮ったあと、シートフィルムの入ったホルダーを上着のポケットに入れた。

するとコンタクトのときに金星人はそのホルダーの一枚を貸してくれと言い、持ち去って、二十四日後の十二月十三日に今度はアダムスキーの住むパロマー山へ円盤で飛来し、低く降下して窓からそのホルダーを投下したのである。

現像してみると意外にもネガには奇妙な図形と文字のようなものが写っていた（詳細は『宇宙からの訪問者』に述べてある）。

昔アダムスキーはネガから直接にプリントしたその写真を私に送ってくれたが、それを見ると、金星人が彼とコンタクトした主な目的は、この図形と文字のネガを彼に渡し、重要なメッセージを地球人に伝えることにあったのではないかという気がする。このメッ

セージの内容は別な惑星の宇宙船の作動原理を伝えたもので、南アフリカのバンデンバーグがこれを解読して画期的なモーターを開発したけれども後に行方不明になった。某大国に拉致されたという噂があるが真相は不明である。

ウィリアムソンの重要な実証本

翌日はパロマー山へ登る予定だったが、雪でダメだろうというので再度デザートセンターへ午後二時頃に行き、〝馬の鞍〟を探したがやはり見つからなかった。後日の調査を期したい。

しかし三十七年前、アダムスキー一行がここで別な惑星から来た巨大な母船と円盤を目撃し、円盤から出てきた一人の異星人とアダムスキーがコンタクトしたことはまぎれもない事実であることをあらためて認識したのである。

というのはウィリアムソンの書物に出ている写真類がそれを実証しているからだ。

コンタクトが終わったあと、六人の同行目撃者は異星人の足跡の所へ行き、ここでウィリアムソンは靴の跡の紋様を石膏にとった。この状況はウィリアムソン（正しくは文化人類学者のジョージ・ハント・ウィリアムソン）の著書 Other Tounges - Other Flesh に写真入りで説明してある。彼がしゃがみ込んでいる写真こそは、アダムスキーのコンタクトが真実であったことを立証するもので、またこの写真がなければ正確なコンタクト地点を突きとめることは絶対にできないのである。

アダムスキーの最初の書物 Flying Saucers Have Landed（空飛ぶ円盤は着陸した）が刊行されてからデザートセンターは一躍有名になり、連日多数の見物客が現地へ押し寄せて、飲食の屋台店まで出たというが、当時、ウィリアムソンの書物を読まなかった人は正確なコンタクト地点を確認できなかったはずである。

ウィリアムソンと私は昔から文通仲間であった。約十年前、彼は丁重な手紙をよこし、「自分はいま南米奥地の古代の遺跡の研究に没頭している。資料があれば送ってくれ。デザートセンターのアダムスキーのコンタクトのときは書物に書かれていない重要な出来事がいくつかあった。それをあなたに伝えたいから、この次アメリカへ来たらぜひ寄ってくれ。電話番号を書いておくが、これはだれにも絶対に知らせるな」とあった。そしてこれが最後の連絡となった。数年後、彼は他界したのである。

アダムスキーの体験は真実だった！

デザートセンターのコンタクト地点へはだれでも容易に行ける。第二次調査の二日目に私がガソリンスタンドから電柱をかぞえた数字に誤りがなければ、パーカー街道の左側に約百メートルの間隔で立っている電柱の百四十一本目の所で停車すればよい。ガソリンスタンドから十・一マイルである。

各電柱にはナンバープレートが打ちつけてあるが、この電柱は一七五八二〇九となっている。ここから本号六～七頁の大写真を広げて手に持ち、写真中の矢印の位置を目標に三百数十メートルほど砂漠地帯を行くとコンタクト地点まで最短距離で行ける。道路から現地までを貢ちゃんは約三百五十メートルとみている。彼はゴルフに堪能で、歩幅で距離を測ることに慣れているから間違いないだろう。徒歩四～五分。意外に近い。現地は山中ではなく平地であり、道路からも望見できる。だから六人の目撃者もアダムスキーと金星人の会見の実況を見ることができたのだろう。

一昨年夏の日本GAP海外研修旅行でデザートセンターへ行ったときは摂氏五十度あったと旅行記で伝えたが、あれはグループ内に伝わった噂であって、実際はエジプトの夏の暑さと同程度だったから四十二～三度ぐらいだと思う。恐れるほどのことではない。

今年八月の海外研修旅行『アメリカ南米宇宙ロードの旅』でも八月十日にデザートセンターへ案内するから多数参加されたい。書物による知識だけでなしに実地を自分の目で見ればアダムスキー問題に対する確信が一段と深まるだろう。

なおコンタクト地点についてはウィリアムソンの書物の写真を参考にしてすでに発見している人がいるかもしれないが、私たちは他人に教えられたのではなく、日本から行って自力で探索し確認したのであるから、それなりの価値はあろうと思う。

過去三十五年間におよぶ私のアダムスキー研究における膨大な文献、資料、現地調査等を総合すれば、アダムスキーの体験は絶対に真実であったと断言できる。現在はNASA（米航空宇宙局）の宇宙開発隠蔽工作により一般で無視されているアダムスキー問題も、いつか脚光を浴びて、太陽系の惑星群に偉大な文明の存在する事実が全世界の人々の常識となる時代は必ず到来すると確信するものである。

付記　今回の調査行で今更のように痛感したのはグラフィックな記録性から生ずる写真というものの高度な価値である。ウィリアムソンの書物に掲載されている写真類がなかったらコンタクト地点が絶対に見つからないことを考えると、六人の目撃者の一人、ベイリー夫人が6×6判二眼レフで撮ったと思われる写真類は粗悪な印刷ながらも燦然たる光芒を放っている。これらは百万言をついやすよりも重要な証拠物件となっているのだ。（以上までの掲載写真は久保田八郎撮影）

@Impressions of Desert Center
by Yoshifumi Shino

デザートセンターの印象

●篠　芳史〈東京本部役員代表〉

今回のデザートセンター第二次調査に参加できたことは奇跡に近かった。昨年十一月の第一次調査にも参加したが、今回も行くとなれば仕事その他でいろいろと未解決なことがあり、気分がすっきりせず、このまま行くのでは私自身に意義がなく、久保田先生はじめ同行の方々に迷惑をかけるのではないかと心配した。

ところが出発前の一月十九日夜、同僚の力強い理解を受けて一挙に心が晴れた上、出発日の朝には前回参加した遠藤昭則氏から激励の電話があってますます力強くなり、家内の見送りを受けて成田空港へ出発した。

久保田先生は前回に続いて今回の調査にかける意気込み充分という雰囲気である。坂本夫妻には会った瞬間から暖かいものを感じた。

こうして田中正氏の見送りを受けてシンガポール航空のジャンボ機で一月二十日午後六時すぎに離陸、九時間余の飛行後、ロサンゼルスに着いた。ホテルでダニエル・ロス夫妻と合流する。夜は現地在住の芦田殉子さんも加わって愉快に夕食をとった。

雄大なデザートセンター

翌日の朝七時、久保田先生、ロス夫妻、坂本夫妻と私の計六人でデザートセンターを目指して出発。私は昨年十一月に初めてアメリカへ来るまではこの国にあまり興味を示すことはなかったが、この目でアメリカを見た瞬間、すっかりアメリカのとりこになってしまった。国土面積が日本の二十五倍ある国を日本のわずか約二倍の人口で治めていることにアメリカのパワーを感じたのである。

途中パームスプリングズで昼食をとり、デザートセンターの交差点から一七七号線のパーカー街道に入り、目的の場所へ着いたのは昼の十二時だった。

外は暖かい。これから素晴らしい事がありそうだという力強い気分がわき起こってくる。

まず円盤の着地痕跡の曲線へ向かった。十二時三十分頃、その場所へ到着。昨年ここへ来たときは夕陽の落ちる直前であり、暗かったが、真昼の陽光下で見る周囲の景色は前回とは違って見えた。なんと雄大な場所であろう。

奥の斜面には昨年と同じケルンがあった。私は昨年このケルンまでは来たが、その後別行動をとったので、この斜面の上方にある謎の曲線を見ていない。

久保田先生が「ここだ！」と声を上げた。見ると、なるほど多くの石がきれいに削られて曲線を成している。一般の人工的な工法ではこのようにならないことは素人でも分かる。しかし先生の話では、十一月以来二カ月の間に曲線が崩れているという。

コンタクト地点を発見

このあたりには二時間あまりいたが、一九五二年十一月二十日にアダムスキーが金星人とコンタクトした場所とは違うことが分かって、二時半頃に別な方向を探索することになった。

尾根を二つ越えて平らな砂地に出てから一同散らばって歩きまわっていたとき、突然、久保田先生が大きな声で「ここだ！　ここだ！」と叫んだ。

先生はウィリアムソンが一九五二年十一月二十日にコンタクト地点で金星人の靴の跡の石膏をとっている写真と、アダムスキーが斜面に立っている写真の二枚を手にして、両方とも実景と一致することを私達に示した。それは完全に合致する場所である。

いまここに、多年アダムスキー問題の研究に打ち込まれ、みずから歴史的なコンタクト地点を発見した久保田先生が立っている。一月二十一日午後三時五分のことであった。六人全員が間違いないことを確認した。

続いてアダムスキーがコンタクトの前に円盤を発見して写真に撮った馬の鞍状のへこみ部分を探しにかかった。手にした『宇宙からの訪問者』の本文を何度も読み返しながら、写真と照らし合わせて山々を見るのに該当する場所が見当たらない。五時を過ぎて暗くなってきたので、翌日またここへ来ることに決めて帰った。

翌二十二日、現地へ到着したのは午後二時半すぎだった。前日に続いて馬の鞍状のへこみ部分を探した。今度は高い山々を見上げるので目の視点が高くなり、そのため周囲の風景がよく見えるようになった。

コンタクト地点と昨日の円盤着地点は大きな山の一単位の区画の中に包含されている。その大きな一単位の正面の一点がコンタクト地点であり、内部の一点が円盤着地点である。

私達は横のルートから内部に入って円盤着地点の曲線を再発見し、そこから正面のコンタクト地点へ出て来たことになる。正面の山は雄大にそそり立っており、立派な姿である。

付近の小高い丘の上に登って見回すと、素晴らしい光景が視野に入り、高揚したフィーリングがわき起こってく

▲デザートセンターの山脈。矢印１＝パーカー街道。矢印２＝曲線の位置。矢印３＝金星の円盤の着陸地点。矢印４＝アダムスキーのコンタクト地点。

る。この辺一帯はコンタクトの場所として波動が良いのだろう。

▶デザートセンターまで九マイルの標識。

◀砂漠地帯を行く一行。左下はケルン。

馬の鞍状の位置は確認できなかったが、久保田先生がコンタクト地点を一発で発見した意義は偉大である。

重要な『信念の力』

今回の旅はあらゆる意味で意義深い旅行であった。大変愉快で楽しく、調和に満ちて、多くの分野で成果があった。ダニエル・ロス夫妻は一昨年日本GAP総会の際に来日して以来の再会だが、一段と逞しくなった感じがする。私は英語は話せないが坂本夫妻の適切な通訳とフィーリングで充分にロス氏の人柄と想念を感じとることができた。

私はロス氏からビッグなプレゼントを頂いた。一つは二十三日にサンディエゴで氏の案内により古本屋を数軒回ったとき、氏がアダムスキーの原書二冊を見つけてくれたが、なんと Inside the Space Ships のほうにアダムスキーの自筆署名が入っており、それを私に譲ってくれたのである。もう一つは本誌に連載中の『UFO―宇宙からの完全な証拠』の原書をサイン入りでプレゼントされたことである。この三冊は私の宝物としてアダムスキー全集とともに並んでいる。

十一月の渡米の際にお世話になった芦田殉子さんにも再会した。大変ユーモアのある明るい方で、日本人の長所とアメリカ人の長所を持った日本人という感じがする女性である。

久保田先生の率いる旅行にはあらゆる意義があるように思われる。まず第一に宇宙的な目的を有する課題があること。今回は観光ではなく宇宙的、歴史的事実の確認調査であった。第二に社会生活では味わえない調和があること。これは先生がたびたびとなえる同質結集なのだろうか。第三に外国の人種、文化、その他を学ばさせられること。その他がある。

昨年十一月に続き今回と二度もデザートセンター調査旅行に参加できたことは当初私にとって思いもよらない事だった。ここに宇宙哲学でいう〝信念〟の重要さがある。アダムスキーの『生命の科学』に「カラシ種ほどの疑惑をも持ってはならない。逆にカラシ種ほどの信念があれば何事も実現する」とある。私は信念の持つ意味とその応用の仕方を以前よりも理解するようになったと思う。そして実生活のあらゆる面で応用している。だから今回も参加できたのだろうか。また二回に渡るアメリカ旅行には私に関連するあらゆる人の協力があった。そして私もあらゆる人に対する愛と感謝と祝福を感じるようになったのである。今回の旅行では大きな宇宙的意義を得ることができた。久保田先生のもとでアダムスキー哲学を学べる名誉に感謝している。（以上までの写真は篠芳史撮影）

③A Brief but the Most Pleasant Tour
by Koichi Sakamoto

短くも愉悦この上なき旅

●坂本貢一

まずはじめに、この旅行がこのうえなく楽しく幸せな雰囲気に満ちたものであったことをお伝えするとともに、その一員として参加を許されたことに対し、深く感謝したいと思う。

成田空港にて、このツアーにご尽力いただいたワールドセブントラベル株式会社部長・田中正氏と別れを告げ、氏に感謝しつつ搭乗待合室に入るや、四人そろってビールにて祝杯を上げたころから、私の頬はゆるみっぱなしで、それは旅行中はもちろん、現在に至っても続いている。

ハリウッドのホテルでロス夫妻と合流し、旧交を暖めつつ、現地在住の芦田さん案内の日本料理店で再び祝杯を上げ、夕食会の後ホテルに帰るころには、ロス夫妻を含むわれわれすべてが、まるで家族の一員であるかのような雰囲気になっていた。

コンタクト地点を見つけた喜び

さて次の日早朝にホテルをたち、めざすデザートセンター近郊の砂漠に到着し車から降り立つと、私にとってそこが初めての土地であるにもかかわらず、なんとも言えぬ充足感が私を覆った。

お父さん（久保田会長）のバッグ（これがけっこう重い）を肩に掛け、その重みを嬉しく感じつつ荒れ地を進み、前回の調査で発見された二つ目のケルンの見える地点にたどり着くや、兄ちゃん（篠氏）の指示で測量を開始。測量しながら、これも前回の調査で発見された、円盤のフランジ跡と思われる摩滅した岩石群の地点までの急斜面を登りきると、全員の息は上がり気味。パム（ロス夫人）の用意してくれたオレンジのおいしかったことこのうえなし。そこでしばし体を休め、眼下に広がる絶景を眺めつつ、全員さまざまな議論を交わしたあと、各自思い思いの調査に入る。ここで目に付いたのがダン（ロス氏）の健脚。山を越え谷を越え、あっというまに、はるか上方にそびえる峰の頂上に一人立ち、こちらに向かって手を振っているではないか。なんだい、あの男は？

そうこうするうち、三十七年前のコンタクト直後に撮影された、その地点の背景写真二枚のうちの一枚に写った山並みの形が、今そこから実際に見える光景と少し違うことに気付き、それでは別な角度から眺めてみようということになり、一同そろって丘を二つ越えて別の谷間に移動した。実を言うとそこは、兄ちゃんが前日から行ってみたいと主張していた所だったのである。

岩だらけの険しい丘を越えその谷間に降りるや、写真と一致する山並みを求めて、それぞれがまた思い思いに歩き始めた。

しばらくしてモコ（妻）が、「あっお父さんが呼んでる」というのでそちらを振り向くと、中腰で小躍りするようにして手招きするお父さんの姿が目に入った。さらにお父さんは、カメラのファインダーを覗きながら中腰のまま、あたりをいそがしく動き回っている。

全員急いでその地点に着くと、お父さんは両手で地面をたたき、「ここだ！ここだ！」と叫びながら、満面に笑みをたたえている。

そこは確かに、先の二枚の写真に写っている山並みが、どちらも完璧に見渡せた。この地点こそ、三十七年前、オーソンとアダムスキーが初めて会見した場所だったのである。

気の遠くなるほどの長い年月をGAP活動に捧げ、翻訳、著書、講演等を通して無数の人々に、自分の信ずる宇宙の真理を伝え続けて来たお父さんのそのときの笑顔は、純真無垢という言葉を絵に書いたような、それはすてきな笑顔であった。この笑顔を見ただけで、私のこの旅の目的がほぼ果たされたといっても過言ではない。

その夜ホテルに着くや目の前の酒屋でビールとワインを仕入れ、私達の部屋に全員集合、祝杯をあげて遅くまで飲み、語り、笑い、充実した時を過ごした。

いつもプラスの想念のみ

この旅行中、ともするとマイナスの想念を引き起こしがちな出来事も幾つ

▶電柱番号下ニケタ「212」の所から砂漠へ入る。

かあった。第一夜の夕食会に向かうとき手違いから道に迷い、芦田さんとの待ち合わせ場所に行きつくまでほぼ一時間も遅れたり、朝ホテルから出発すると間もなくレンタカーのタイヤがパンクしたり、そしてアダムスキーの写真に見える、円盤の浮かんだ馬の鞍状の峰を特定出来なかったり。

しかしながらそういったときでも、誰一人マイナスの想念を抱くことはなく、それらの出来事を充分に楽しむことのできたことを嬉しく思う。

連日のパーティーで語りあったことであるが、GAP（Get-Acquainted program）とは文字通り、「知らせる運動」であるとともに、その本質は『人々がよくお互いを知り、理解を深め合う』ことにあると思う。この意味において、今回私達六人はみごとにGAP活動を行なったと自負している。

さらにこの旅行には、ダンとパムが案内してくれたサンディエゴの古本屋で、兄ちゃんがアダムスキーの署名入りの原書を手に入れるという超特大のおまけもついた。この兄ちゃんと知り合い、親しく語り合うことが出来たことも、私のこの旅行における最も大きな成果の一つである。

この世に偶然や、むだなことはないという。過去三十年にもおよぶお父さんの献身的なGAP活動、時には意見を異にした人々をも含め、その間彼を支えて来た数限りない人々の意識、過去にコンタクト地点を特定すべく当地に旅した多くの方々の努力などすべてが密接に絡み合い、それぞれが、壮大な『一大宇宙プロジェクト』とでもいうべき大きな流れの一翼を担ってきたと言える。

この壮大な流れの中で、私達一人一人がすべて重要な役割を持ち、現在それを遂行しているのである。ささいな意見の違いなど、この流れにあっては取るに足りない問題のように思われる。

宇宙の真理を追求し、正しい生き方を求める人々は、このGAPのみならず、あらゆる分野に満ちている。私達個々がお互いに理解し合い、その理解の輪を一つ一つ広げて行くことが、人類全体の和合につながる道だと信じるのである。

今地球は変革の時代を迎えているといわれる。全人類の意識が和合を求めて大きく動き出しているものと確信する。

この旅行で私は、歴史的コンタクト地点に立てた感激とともに、人と人とが理解を深め合うことの喜びとその大切さを、あらためて学んだような気がするのである。

お父さん、兄ちゃん、ダン、パム、モコ、そして今回私達に暖かい想念を寄せてくれたすべての意識に感謝したい。

❹Cosmic Family in Wonderland by Shigeko Sakamoto

"不思議な大地"の宇宙家族

●坂本茂子

デザートセンター行きが決まるとすぐに、私の意識の一部は一足先に彼の地に出かけてしまい、もう足元にそこの感触が伝わってくるようでした。次に、残りの意識とこの体をそこに運ぶ準備に取り掛かりました。私も主婦ですから、いろいろあります。

九才の息子（健）は今回残ることになり、担任の先生の理解をいただいて十日間の休暇をもらい、茨城に住む主人の両親のもとに、冬休みから引き続いて滞在。

犬のコロは、私達が旅行の度に面倒を見てもらう友人の息子で高一になる吉川慶君にお願いする。

主人の仕事はいとこの佐々木順一・孝子夫婦と、妹分の鈴木良子が快く引き受けてくれ、私達が旅行から帰ると、佐々木夫妻がパラオにダイビング旅行の予定。

私達夫婦がフットワークも軽くいろいろなところに出掛けられるのもすべてこれらの人々のおかげによるわけで、この旅行記を書くにあたって、まずみんなにお礼を言わなければなりません。

「ありがとう！」

楽しい家族旅行団

そしていよいよこの旅行が始まるわけですが、ここで登場人物を紹介させて下さい。一緒にいる間私達は互いにこう呼び会いました。

お父さん	久保田八郎
兄ちゃん	篠　芳史
ダ　ン	ダニエル・ロス
パ　ム	パメラ・ロス
こうちゃん・コーイチ	坂本貢一
モ　コ	坂本茂子

まさしく、ちょっと頑固なおやじさんのもとに集まった個性的な兄弟達という言い方がぴったりでした。

デザートセンターというのは不思議な場所で、ただひたすら広く、山と砂漠だけで何もないところなのですが、何時間いても飽きないし、また何度でも来たくなるような所です。この感じは、以前に訪れたホピ・インディアンの大地とよく似ています。

前回（一九八七年）のGAP旅行でここに来たときは真夏でもあり、気温が四十三度もあり、快適と言うには程

遠いものでしたが、今回はまさに程よい気候で最高です。

第一の目的であった円盤着陸跡と見られる白い曲線の再調査は、それが半分以上消えていたことで、大きな成果とはなりませんでしたが、ここで特筆すべきは、そのときのみんなの態度でした。

もとはといえば、そのためにここまで来たようなものなのに、それが完全な形で残っていなかったことにたいして、あまりがっかりした様子は見受けられません。

お父さんが多少残念に思うのは無理からぬことで、前回の発見者である彼としては、わざわざ連れて来た私達に完全な形でその跡を見せたかったものと察します。

かなりの急斜面を登って現場につくと、ひとまずゆっくりと腰をおろして一休み。空を仰ぎ、あたりを包む高波動の中に身をおいてオレンジを食べ、いろんな話をします。

▲夫婦で対策を協議。

あたりを見回しながら、

ダン「ここにいると、空がどんなに広くて限りがないかということを思い知らされるね。円盤が来てもきっと、小さな真珠の粒ほどにしか見えないだろうね。この上空に千機ぐらい待機していてもおかしくないと思うよ」

写真が苦手な私は小型のテープレコーダーを持って歩いていましたので、ここから先は随所に実況録音の会話が登場します。

コンタクト場所で大騒ぎ

この後、腰を上げてしばらく付近を歩いた後、別な方向へ行ってみようという線で話がまとまり、全員で元気よく移動。

兄ちゃん「この前のはレッスン・ワンで今日はレッスン・ツーだから、ここからどっか次に行きなさい、ということなんですよ」

モコ「行ってみましょ」

コーイチ「行きましょう」

兄ちゃん「せっかく日本から来たんだから」

お父さん「うん。うん」

モコ「まーだまだ日は暮れません」

この後めげずに歩き回り、程なく、『これぞまさしくオーソンとアダムスキーの会見場所』というものを発見するに至るわけです。

ファインダーを覗きながら中腰で動き回っていたお父さんが、回りの私達に何か叫びながら手招きし、みんなはドドッと彼のもとへ駆け寄ります。

お父さん「ここだ、ここだ！」

モコ「見せて、見せて、どこ？」

コーイチ「ホーント？」

ダン「ほら、ここだ！」

パム「なに、なに、何なの？」

コーイチ「ここ、ここ、パーフェクト！」

モコ「やったー！」

兄ちゃん「やった！」

ダン「スカイラインが見えるだろう？」

パム「オー！　すてき！」

ダン「パーフェクト、パーフェクト（と何度も繰り返す）」

コーイチ「ピッタリでしょう？　裏側の写真も……」

この間、お父さんただ満面の笑み。

これを全員一度にしゃべっている訳です。テープから聞き取るのがもうたいへん。

この後夕暮れまでここにいて、また明日も来ようという話になり、それならば明日はその足でまっすぐサンディエゴに行き、一泊して次の日朝から古本屋めぐりなどして、一日たっぷり楽しんだらどうかとダンが提案。全員一致異義なし。

この帰り道まもなく、夜空に、点滅しながら上下運動を繰り返す光体を発見。ありがとう。

ハリウッドのホテルでは偶然にポール・ホーガンに会いました。

円盤が出現する

翌朝は、出発するやいきなりパンクというハプニングもなんのその、車を乗り換え再度出発。ロサンゼルス市内を抜けてしばらくすると、頂上に雪をいただく山並みが左手に見え始めました。

するとその上空低いところに、一機の円盤が現れ、こちらに合図するかのようにピカピカピカと銀色の機体を光らせたかと思うと、サッと見えなくなったのです。

その前から何度か、現れてはすぐに消える飛行物体を見ていましたが、なにしろ上空を飛ぶ飛行機の数が多いこともあり、はっきり見分けがつかず、「お願い、もう少し分かるように見せて」と、テレパシーを送っていたところでした。

そして二日目のデザートセンターでは、当時円盤が着陸した馬の鞍状の峰

の特定を目標に、それぞれが自由に動きました。

たっぷりした時間の中で、私は会見場所のすぐ横にある小高い丘に登り、好きなだけあたりを見回し、風景を目に焼き付け、空を見上げ、そして瞑想しました。

お父さんは休む間もなく、ただひたすら荒野の中を動き回っています。重い大きなカメラを肩に、アダムスキーの撮った写真を手にして、一人黙々と歩き回るその姿に、私は深い感動を覚えました。一つのことをこれ程までに追いかけながら生きている人がいる。

◀サンディエゴのホテルで祝杯をあげる調査団一行。

なんて幸せな人でしょう。

その姿を眺めているときに感じたフィーリングは、円盤を目撃するときに感じるものに似ていました。それは、自分の内部から静かにわき上がってくるような、幸せで、嬉しくて、暖かいエネルギーの流れです。

やがて太陽が地平線に沈むと、それはみごとな夕焼けとなり、あたり一面が朱色に染まりました。来て本当によかった。

テレパシックな日本人

サンディエゴのホテルで、ダンが過去生でアダムスキーの縁者だったと春川氏が語ったという話題に引き続いて、ダン「僕がほんの子供のころに、自分自身であることをすごく強烈に信じていた記憶、あるいはすでに知っていたという記憶があるんだ。それは宇宙船のことではないんだけど、宇宙哲学というか、宇宙の真理というか、例えば人間の生命は一度では終わらないことや、自然と人間とのかかわりというようなことについて、とてもはっきり分かっていたのを覚えているね」

この地球には、幼いころのダンのように、何らかの形で宇宙の真理に気付いている少年少女がたくさんいます。私達大人は、彼らにそれが間違いでないことを伝え、自分達の生き方を通して将来に対する明るいビジョンを与えなければならないと思います。

ダン「ところで、一九六〇年代の日本GAP活動と現在のそれとを比べて、一番の違いは何だろうか？」

お父さん「それはなんといっても、当時はアダムスキーが生きていたということだ。ところが、NASAが金星の温度を摂氏四百八十度と発表したのがこたえたね。それでみんなアダムスキーを信じなくなったんだ」

ダン「でもGAPに今集まっている人々の数を考えれば、当時よりずっと増えているわけだし、それは素晴らしいことですよ。他の国ではGAP活動は縮小傾向なのに」

パム「なくなった所もあるしね。どうして日本GAPはこんなに強固になったのかしら？」

それは日本人のルーツと深いかかわりがあり、カルマ的なものだろうとお父さんは答えています。

ダンとパムは、日本人はだまっていても、こちらの考えていることをある程度察してくれるが、アメリカでは何から何まで言葉を発してはっきりさせなくてはならないので、すべてセンスマインド優先のアメリカとそうでない日本とでは、アダムスキー哲学を根付かせる上で、その土壌自体に大きな差があると感じているようでした。

何もかもが素晴らしい旅でしたが、秋田に帰ったあとでもう一つおまけが付きました。帰宅して二〜三日たったころです。貢一の母から電話がありました。

母「私も昨日からアダムスキーの本を読み始めたよ」

モコ「エーッ、ほんと？　でも息子と嫁があの写真の場所に立ったと思えば、味わいも格別でしょ？」

母「ほんとにねえ、あんたたちあそこに行ったんだものねえ」

貢一の父は、一年前、夜明け前の空に葉巻型の母船を目撃後、すぐに全集を取りよせ、すでに読んでいたのですが、今度は母もそれを手にとってくれたのです。

まわりの人が私達の生き方を見ているうちに、いつか自然にアダムスキーの本を手に取るようになる。それは私達にとってとても嬉しいことです。一番身近な肉親からのこの報告に接し、しみじみと幸せを感じました。

ここまでやって来たんだもの、これからも真っすぐ歩いて行こうね。みんな一緒です。私達は息子の手を取り、まず身近な人々と手をつないで行きます。あなたも、あなたの身近な人々と手をつないで下さい。あなたと私の手はきっといつかどこかでつながって、世界中に届くでしょう。もうすでに、私達のつないだ手は海の向こうにも届き始めているのです。（この記事の中の写真は篠芳史撮影）

The Only Japanese Man Who Met Adamski
by Yutaka Mukai

アダムスキーに会った唯一の日本人（1）

晩年のアダムスキーと会見した日本人の痛快な物語

向井　裕（ポール大観）

ご挨拶

日本GAP機関誌『UFOコンタクティー』103号を書店で見つけて日本GAPの活躍に驚き、高松支部代表・関高明様に会いました。ご馳走になり、さわやかな好青年との印象を受けて嬉しくなりました。私は六十三歳。関様の言われるように若い人の足を引きずりおろさないように努めます。

久保田会長様からお便りをいただき、アダムスキーに会えた日本人の名誉を皆様にお分けするようにとのことで、ここに拙文をお送りします。

水産庁開洋丸の永延幹男博士からの年賀状には「お互いピュアな好奇心をより深めましょう」とありました。私自身はピュアな好奇心からというよりも単なる野次馬でアダムスキーに会ったことを自覚します。今後とも会長先生はじめ皆様のご指導をいただき、太陽系先住民文明に一歩でも近づきたいと思っております。日本GAPと会員の皆様の千年長寿をお祈り申し上げてご挨拶といたします。

筆者略歴　大正十四年香川県高松市に生まれる。名古屋陸軍幼年学校四十四期。陸軍士官学校五十九期。昭和二十四年京都大学法学部卒。県立高校勤務。昭和六十年退職。

空飛ぶ円盤をテレビで知る

昭和三十九年一月頃、県立高校の夜間部で社会科の教師をしていたので、帰宅は遅かった。妻と子供三人は夕食をすませて眠っている。その日も私一人で白黒テレビを見ながらの晩酌で、いつものとおり夕食をとっていた。

現在のイレブンPMの前身『春夏秋冬』という番組が日本テレビで放映されている。出演者の徳川夢声は個人的に好きだった（編注＝徳川夢声は往年の有名な漫談家。アダムスキーを支持し、編者〈久保田八郎〉とも交友があった）。

テレビで『空飛ぶ円盤』なるものが紹介されている。初めて聞く言葉だった。学校の教科書には出てこない空飛ぶ円盤はSFや漫画の世界のことで別に関係はないと、気にもとめずに聞き流していた。他に見る番組もない。

徳川夢声のいい声はステキだったから音楽でも聴く心地である。

最後に徳川夢声が言った。

「このUFO写真の八割はニセモノですよ」

そして番組は終わった。私は徳川夢声の言葉をオウム返しに繰り返した。

「八割がニセモノ」。これはおかしい。八割がニセモノだということは二割がホントウだということか。空飛ぶ円盤などというものが〇・一パーセントでもホントウだというのならこれは大変なことだ。二割もホントウとは、これはえらいこっちゃ。ビデオがないときだから見直すことは出来ない。夜はもう遅い。

しかしこれは捨てておけない。夜中であろうが背中であろうが徳川夢声に電話しなければならない。そう思った私は一〇五番で徳川夢声の家の電話番号を調べてみた。もう放送局から自宅に帰っている頃だ。高松から東京へ長距離電話をかけた。当時は高価な長距離電話である。

「もしもし徳川夢声さんですか」

「はい、そうですが」

直接あの有名な徳川夢声の声が伝わってきたのだ。私は興奮していて言葉がうまく出ない。

「あのう、いま『春夏秋冬』を見ました」

「それはどうも」

▲右が筆者・向井裕氏。

「あのう、空飛ぶ円盤のテレビを再放映してくれませんか」
「はいはい、いや、私は別に局のディレクターでもないですから、その権限はありませんが、その旨を局へ伝えておきましょう、はい」
長距離電話は高くつくので早く切りたかったが、徳川夢声のいい声が続いていた。
「空飛ぶ円盤を研究している人は、みな真面目な青年たちですよ」

徳川夢声に会う

電話を切った後もこの最後の夢声さんの声が耳にこびりついていた。真面目な青年たちが空飛ぶ円盤を研究しているという。私は研究していない。すると私は不真面目な人間なのか。私は自分で真面目な人間だと思っている。そしたら研究せねばならない。しかし一体全体、研究するとは何をどうすればいいのだろうか。わからない。
私は次の土曜日、夜行列車の人となっていた。東京の徳川夢声に会いに行くためである。生まれて初めて『空飛ぶ円盤』という言葉を知って私は行動を始めたのであった。単細胞の反射作用のように、自然に――。
何の前ぶれも紹介もなしに徳川夢声の自宅を探し当てて戸を叩いた。うす暗い空襲焼け残りの露地の奥まった家であった。豪邸ではない。
「ごめん下さい」
女秘書が玄関に出てきた。
「あの、先日お電話しました高松の……」と来意を告げながら見上げると、この世の人とは思えぬ別嬪さんの秘書。私は体がしびれて言葉がとぎれてしまった。広くない応接間に通されて徳川夢声の声が響く。
「私は円盤を見たことはありませんが、円盤を研究している人たちにはよく会います」
話好きとみえて夢声さんの声がよどみなく流れる。それより私はお茶を出してくれた女秘書の美しい白い指が忘れられない。
結局、円盤の研究団体も研究方法も聞きもらしてしまった。女秘書がまぶしかっただけで、翌日の授業に間に合うようにトンボ返りしただけだった。

アダムスキーの本との出会い

空飛ぶ円盤について徳川夢声から何も聞き出せなかったいらだち、悶々の気持から、翌日の授業には実が入らない。何もしたくない。頭の中は真っ白みたい。第一時限の授業にいやいや教室に入る。
とりあえず出席をとり、教科書を開けと言う。一番前の席の男の子が教科書でない本を一生懸命に読んでいて、こちらを向かない。
「こらっ。何を見てるんや。ちょっと見せ！」
と言って取り上げた本が『空飛ぶ円盤実見記』だった（編注＝アダムスキーの最初の本。現在はアダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』の第一部に改訳を収録）。
「へえ！」と驚いた私は「自習！」と怒鳴っていた。夢中になって読んだ。ドキドキしながら終業のベルも忘れて読んだ。それからというもの、授業は自習が多くなった。
『空飛ぶ円盤同乗記』も読んだ（編注＝これも『宇宙からの訪問者』の第二部に改訳を収録）。桜沢如一（アレキシス・カレルの『人間この未知なるもの』の訳者）の信奉者だった私は、友星人の食物に興味を向けていた。
『空飛ぶ円盤同乗記』の中に、友星人の母船の携行食糧は植物の根だとあるのを発見して、アダムスキーは本物だと単細胞の私は直感できた。『同乗記』など同じ本を三十冊買って人に配っている。

アダムスキーに会う決心をする

高校の生徒たちには「これからの日本人はアメリカを見てこなければ国際人にはなれない」と口ぐせのように言っていた私。
しかし私自身まだ日本から出ていない。渡米したい。桜沢如一の宇宙の秩序、陰陽を研究してポリオの小児マヒを食物で治すことに成功していた私は、その論文をアメリカへ送り、招待状をもらっていた。しかしビザが下りない頃だった。
アダムスキーの訳本を出した久保田会長は、当然、このビザをもらってアダムスキーに何回も会ってきているに違いない、と私は思い込んでいた。渡米が禁止されていたときだけに、アダムスキーに会えた久保田会長はスゴイ人だと思っていた（編注＝実際にはアダムスキーに会っていなかった）。
私もアダムスキーに会えないものかと考えた。だが私にはだいいちお金がない。妻と食べざかりの子供三人の生活は苦しかった。生活の余裕は一銭もない。船乗りになってアダムスキーに会うチャンスをねらおうか。いや、それでは遅すぎる。荷物の中に入って密航しようと船の図面を書いて計画もしてみた。
とりあえずアダムスキーから招待状をもらっておこうと思い、アダムスキーに手紙を書いた。桜沢如一の食物の陰陽でポリオ治療に成功していた喜びで自称プロフェッサー気取りとなっていたから、いつもアメリカ向けの手紙には肩書きにプロフェッサーをつけて出していたので、アダムスキーにもプロフェッサー・ポール大観で手紙を書いた。
思ったよりも早くアダムスキーから招待状が来た。ここで借金しても夏休

みに飛行機で飛ぼうと決心した。

当時、海外渡航の飛行機代とタマゴ代は高いときだった。パスポートを用意した。ビザも知人訪問の短期滞在は許された。あと、お金だけ。

兵隊時代（陸士）の友人に日本航空の課長をしている人がいた。木下春海君。彼は東大法学部出身だから、無料で飛行機に乗せてくれとは京大出身のコンプレックスから頼めない、との見栄が働く。

アダムスキーからの招待状を見せ回っているうちに、飛行機代を出してくれそうなスポンサーが現れた。しかしその人からは借金があって、まだ返していないので信用がない。夏休みになってしまった。イライラする。ねばって拝み倒すしかない。とうとう片道の飛行機代だけ出すと言い出した。往復キップを買えば格安なのに、片道だけだという。まこと、アメリカに着いたことがわかれば帰りのキップは送るという。

片道キップで日本を飛び立つ

一九六四年（昭和三十九年）八月一日、小さなカバンに着替えの半ソデのシャツ三枚入れただけで、朝、宇高連絡船で出発。妻と子供三人が別れのテープの端をにぎっていた。小学二年生の娘がわけも知らずに泣いていた。

家族にはもちろん片道キップで出かけるなどとは言っていない。特攻隊の気分の名残であろう。帰りのキップをスポンサーが送ってくれなかったら、どうなるかなど考えるヒマもなかった。何とかなるさ。そのときがくれば、それから考えればいい。とりあえず生まれて初めての海外渡航、そしてアダムスキーに会うことだけを考えてワクワクはしゃいでいた私だった。

成田空港がまだないときだから羽田空港から飛び立つのである。生まれて初めての飛行機。しかも片道のアメリカ行きである。東京在住の教え子たちが羽田に集まった。海外渡航が珍しいときだけに、教え子たちは出征兵士を送る気持だったに違いない。

日航の木下春海課長は私が片道キップで行くことを知って、帰りは着払いで帰れる方法などを心配してくれていたそうだ。

そんなことも知らずに私はジェット機に乗る。午後十時三十分だった。疲れていたのか、すぐ眠った。目が覚めたとき日付変更線の上だという。雲海の上を飛んでいる。隣の席のアメリカ人に話しかける。円盤の話だけである。すぐとぎれてしまう。スチュワーデスにも珍しさから話しかける。

「私は空飛ぶ円盤を研究しているものですが、機長は円盤を見たことがあるかどうか聞いて下さい」

すると機長の返事をもって来た。

「機長がお会いしたいと言っています。どうぞ操縦室へおこし下さい」

ガラス張りの操縦室。機長はニコニコして話しかけてくる。

「円盤を研究されているのですか。私は話には聞いたことがありますが、実際には見たことがありません。どうぞここにいて思う存分円盤を探して下さい」というわけで、一時間ばかり機長の隣の席に座って空を眺めることにした。何も円盤は見えない。気まずくなってまた客席にもどる。

午前九時二十五分。ロサンゼルス空港に到着。空港には木下春海課長の知り合いの人でも迎えに来てくれているのかと期待したが、誰もいない。ロサンゼルスの空港に一人ぽつねんと立って、さてどうしたものかと考えた。

そのとき昔の軍隊時代の友人、胡田五がS教の幹部であることを思い出し、S教ロサンゼルス支部へ電話をした。

「もしもし、私は胡田五さんの友人ですが、いま空港に着いたところです」

「まあ胡田様のお友達ですか。迎えに行きます。四十分お待ち下さい」

四十分をやけに長く感じる。心細いことおびただしい。しかし友人の力は偉大である。迎えの車が来た。ロサンゼルス支部長は日本女性だった。

支部のアメリカ人信者千人が玄米食を食べているという。これにはびっくりした。私のポケットには炒り玄米が非常食用にしのばせてあった。お金がないので炒り玄米をポリポリかじって空腹をしのぐのであった。私の恩師、桜沢如一が玄米食をこのS教のアメリカ人信者達に普及させていたのである。陰陽バランスのとれた完全食が玄米食である。日本人よりもアメリカ人にそのことが理解されているとは驚きであった。

早速下宿を決めて日本のスポンサーに無事到着を知らせ、そしてアダムスキーに会見の日取りをうかがう手紙を書いた。するとアダムスキーからの返事で八月十八日に会えることが決まった。十日あまり待たなければならない。私は毎日ロサンゼルスの街を歩いた。円盤の話を誰かれとなく投げかけて英語のレッスンをする。

アダムスキーへの質問状を十二カ条用意して、質問の練習を歩きながらする。

下宿の隣の黒人のおじいさんと仲良しになった。彼の英語はゆっくりなのでよくわかる。私の英語の発音は上手だとお世辞を言ってくれるので、うれしくなって円盤の話を続ける。

八月十七日。いよいよ明日がアダムスキーとの会見と思ったとき、急に帰りのキップのことが心配になりだした。スポンサーから帰りのキップを送ってこなければ自分で働いてお金を得るしかない。邦字ロサンゼルス新聞社で働こうと決心したとき、日航から電話があった。キップが着いたという。やれやれ一安心である。これで明日は思い

きってアダムスキーに会える。

待望のアダムスキーとの会見

八月十八日。朝六時起床。朝食のパンをかじりながらグレハンバスの乗り場へ向かう。

「ビスタ行きのバスはどれですか」と大声で叫びながら聞きまわるが、なかなかわからない。なぜか多勢の人がバスに乗るために行列をなしている。ビスタへは一つ途中で乗り替えねばならない。

◀アダムスキーが晩年に住んでいた家。一九七五年(昭和五十年)に久保田八郎撮影。

ようやくバスに乗れた。フリーウェイを突っ走るバスは速い。時速六十マイルである。乗り替え場所で待たされるあいだ、小さなレストランで何か注文しなければならない。お金のない私は一番安いミルクを注文する。十五セントである。

ビスタでバスを降りる。田舎町である。ハイヤーに乗る。運転手に「アダムスキー知っていますか」と言うと、「オー、イエス」と元気な声で返事がある。「日本からアダムスキーに会いに来た」と言うと、ニコニコして「ここの町の人はみんなアダムスキーを尊敬しています」と答える。私の気分はなごんだ。五十セントの料金だった。チップを五十セントはずみ、合計一ドル払う。

アダムスキーの家の前である。少し高台になっていて、白黄色の壁の意外に質素な外観の家である。深呼吸をしてチャイムを鳴らした。

秘書のジャネットが現れる。「日本から来ました」と告げると、ニコニコして玄関に入れてくれる。正面に例のオーソンの絵が目につく。これはキレイ。「おう」と思わず声が出る。

あまり広くない八帖ぐらいの応接間には先客が三人いた。一人はインディアンの男。西部劇の映画から抜け出てきたような扮装にみとれていると、このインディアン、いきなり握手を求めてきた。というよりむりやり手を握りしめてきた。そのものすごい握力。「あいたた、痛い!」と私は日本語で叫んだ。

小柄な白人の男と握手。痛くない。もう一人、十八歳の白人の娘。この娘は四日四晩もバスに揺られて来たという。しばらくこの娘と話をする。ツバキ油の匂いがする。なんの化粧もしていない。黒髪で茶色の目。日本の田舎にいる娘と変わらない。

秘書のジャネットが書斎に招く。八帖くらいの部屋である。アダムスキーが立って迎えてくれる。あれだけ練習してきた英語が一言も出ない。頭の中が真っ白になり、ただ握ったアダムスキーのやわらかい暖かい手のぬくもりだけが伝わってくる。

立ったままでアダムスキーは「はる

▼ジョージ・アダムスキー。

ばる日本からようこそ」と言ったように思えた。私は無言のまま。自己紹介の練習をしていたのに、やっと自分の名前が言えただけで、あとが続かない。ニヤニヤしているが頬が引きつっている。英語が出ないのだ。アダムスキーが早口に何か言っているが、さっぱりわからない。

アダムスキーは「クボタ」と言って本を指している。クボタ！　見れば久保田会長の訳書が二冊積み重ねてある。了解した。日本でもアダムスキーの本が訳されていて、訳者のクボタ会長から日本語の訳本が送られてきている。久保田会長のサインがあるだろうと説明しているので、見ると、あった。

「ベリグー、サンキュー」と私の英語が出たが、また無言に返る。

アダムスキーと私は向かい合って腰かけた。二人ともニコニコ笑っている。私はヤケクソになり、決してしゃべるまいと決心した。練習してきた英語を使わずに、あらかじめ用意してきた英語の質問用紙を無言でアダムスキーに手渡した。受け取ったアダムスキーはいきなり早口でしゃべり始める。すると横の秘書のジャネットが同じ早さでタイプを打ち始める。

驚いたことに、アダムスキーのしゃべる速さとタイプを打つ速度がほぼ同じなのである。ひとしきりアダムスキーがしゃべり、タイプが打ちやんだ。ジャネットはタイプの用紙をはずしてアダムスキーに渡す。アダムスキーがその用紙を私に手渡す。私は無言で読む。読めば少しわかる。だがその場で辞書をひくわけにはゆかない。

全部完全にわかったふりをして大きくうなずき、「アイシー」と言ってアダムスキーにその用紙を返す。ジャネットがタイプにその用紙をかける。これで第一の質疑応答が終わって第二の質問の回答にアダムスキーが移る。ジャネットがタイプを打ち終わる。ときどき砂消しで消して打ち直しをする。アダムスキーに手渡して私が受け取る。「アイシー」と言ってはアダムスキーに返す。これを繰り返すこと十二回。気の長い話である。

アダムスキーは後日、この会見を次のように本の中で紹介している。

「日本からは一教授が訪ねてきました。この人は英語の読み書きはできましたが会話は苦手のようでした。そこで本人は質問を紙に書き、私も書いて答えました。しかしこの方法がうまくいったのには驚きました。彼は与えられた知識に心から感謝していました」

（編注＝右はアダムスキー全集第三巻『UFOとアダムスキー』二二〇頁に出ている）

このことは日本の英語教育の間違いを指摘したともいえるだろう。英語の読み書きはできても英語を聞くことも話すこともできない日本人が多いのである。

タイプで打たれたアダムスキーの回答は大切に持ち帰り、辞書をひいて完全に了解できた。後日、地元の西日本放送テレビでこれを披露したが、なぜか、そのときからこのタイプ回答書を見失っている。どこかへ置き忘れているものと思われる。

アダムスキーとの会食

ちょうどお昼どきになったので、隣の狭いキッチンでアダムスキーと二人きりの食事をとる。食卓には黒パンと白パンの皿が二つ。ニヤニヤしながら無言で私は黒パンを一つ取って食べ始めた。

アダムスキーは白パンを取った。とたんにアダムスキーは猛烈に咳き込んだ。彼の背中をなでてあげようかと思うほど咳が激しい。

「黒パンのほうが咳を止めるにはいいですよ」と私は英語で言った。「アダムスキーさん、あなたは白パンと黒パンのどちらが好きですか」と尋ねた。

「フィフティー、フィフティー」とアダムスキーは咳の合間に答える。先程のタイプ打ちの会談のときにも咳をしていたのだろうが、気にならなかったのに、いまその咳が気になり出した。

この会見後、八カ月たって病没するのであってみれば、アダムスキーはこのとき肉体的に相当無理をしていたに違いない。

咳込みが激しくなったのでアダムスキーは寝室へ引きこもった。ジャネットが代わって私の食事の相手をしてくれる。その後一時間ばかり秘書のジャネットと筆談してアダムスキーの家をあとにした。

記録用小型円盤が着陸！

アダムスキーとの会見後、私はどこを見物することもなく、サンフランシスコ、ハワイ経由で羽田に戻った。

その後は円盤研究に打ち込んだが、ある機会に知ったUFOの着陸場として、三重同心円花壇を教え子四人と共に私の父所有の荒地にスコップで盛り土をして造り始めた。

花を植えないまま一週間たった秋の夕方、四時頃、雨あがりの天候だった。私は一人で盛り土だけの三重同心円に異変はないかと見に出かけた。

「あっ、降りている。円盤だ！」

私は当然のことのように思え、また生まれて初めての崇高な雰囲気の中に我を忘れていた。教え子四人に連絡し、集まった四人と私の五人で、三重同心円の外側の盛り土の外から遠巻きに円盤を見守るだけであった。誰もしゃべらない。写真を撮ろうと言い出す者もいない。

眼前にあるのは直径一メートル程のまさに寸分違わないアダムスキーの言う記録用小型円盤ではないか！　アダ

●アダムスキーの遺品二点

左上はアダムスキーが自分で製作した手作りのバッジ。上部のFCSDはFraternity of Cosmic Sons and Daughters（宇宙の息子と娘たちの友愛会）の略称。約十個作ったものの内、最後の製作品。下はアダムスキーが愛用した35ミリカメラ。米ハネウェル社の発売だが実は日本製。上記二点共昨秋来日したアリス・ポマロイ女史が日本GAP久保田八郎会長に贈ったもの。

ムスキー型のきれいな流線型記録用円盤が着地しているのだ。

三重同心円の真ん中に、ちょっと照れているように、恥ずかしそうに少し右側を傾けて着地している真っ白な丸い偏平な物体――。この物体を何者かが運んできたワダチの跡は全くない。上空から直接舞い降りたとしか考えられない。一九六五年（昭和四十年）十一月、高松市宮脇町一丁目九番地の荒地に着陸した、アダムスキーの言う小型円盤を私はこの目で見た！

流線型のカーブはこの世のものとは思えない。直径約一メートルのこの円盤は、アダムスキーが著書の中で記述しているとおり、窓も突起物もない。真っ白な、きれいな流線型で、上から見ると真ん丸だった。

私は十五センチの距離まで接近してみた。表面はピカピカに光ってはいない。鋳物製のように表面はぶつぶつしている。驚いたことに小さな赤錆のような点が見える。この話を後日、日本テレビの大橋巨泉氏は「赤錆の報告は珍しい」と言って笑っていた。

写真を撮らなかった理由としては、〝神〟に直面したとき、証拠を残しておきたいなどという小ざかしい知恵は出ないものだと私は今も思っている。

翌朝早く私は一人で三重同心円の円盤を見に出かけた。

「いない！　消えている！」

あとにぺこんと土地のへこみだけを残して――。あたりの土地は荒されてはいない。まっすぐ上空に舞い上がったとしか思えない。ぺこんと地面がへこんだ跡を見て、この円盤がかなりの重さで、地球人の大人二人がかりでやっと運べる程の重量があることがわかった。

このとき私は決心した。円盤と宇宙の研究は私一人だけでも続けなければならないと。

（以下次号）

絶賛発売中

異星訪問奇談

久保田八郎編

新書判・約二七〇頁・定価二二〇〇円

想像を絶する進歩をとげた別な惑星を大母船に乗せられて訪問した日本人青年の驚異的実話と、地球人を救うメッセージ！

■2年前、日本GAP発行UFOcontactee誌に連載されて大センセーションをまき起こした「私は別な惑星へ行ってきた／」と題する驚くべき記事をまとめ、さらに証人たちの証言と編者の解説序文を加えて一書にした実録。UFO contactee誌の連載記事掲載各号が品切れ絶版となった現在、本書は貴重な文献である。大超能力者にして愛の精神の権化たるコンタクティー春川正一氏（仮名）は東京で活躍する実在の人物。超絶した諸惑星の実態と偉大な惑星人たちから与えられた感動のメッセージは危険な地球を救う天来の声／UFO研究者、自己改良希求者必読の書。

全国書店で発売中

書店にない場合は直接下記へご注文下さい。（日本GAPでは扱いません）

〒101 東京都千代田区西神田3-5-6

〈発行所〉新典社 振替・東京7-26932 ☎03(265)3781

How To See Man's Past Lives
by Akinori Endo

過去生透視法とその実例 (2)

●遠藤昭則

人間の過去生を透視する秘法とGAP本部役員達の過去生および太陽系各惑星の実態を透視した興味深い講座。

エジプトで自分の過去生の場所を見る

あるとき、ふと見えてきた自分の過去生の記憶は大切に保持しておく必要がある。それは小説を読んでいるときかもしれないし、映画を見ているとき、それとも旅行に出ているときかもしれない。

自分の行きたい国を旅すると、ふと自分の過去生の記憶が蘇ってくるときがある。私はエジプトへ一度でよいから行きたいと思っていた。そして今から十一年前に念願かなって「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」に参加することができた。これは当時、久保田先生がやっておられた出版社主催の海外旅行だった。

旅行もクライマックスを迎えて、エジプトのカイロ市内にあるモハメッド・アリ・モスク（イスラム教の大寺院）に来たときのことである。

その日は快晴で、空気も心地よくて、のんびりした気分だった。しかし体のどこかで「ここは重要だぞ」という感じがしていた。私はその感じがなぜ生じてくるのか分からなかったが、なんとなく気になっていた。

荘厳な建物の中を通って二階へと上がり、みんなで周囲の街並みを見ていたときのことである。

ふと軍事基地の右横にある古くくすんだ家並みが目に入ってきた。すると私の内部の何かが動き出したようで、その街の通路の、どこをどう行けばどの場所へ行けるという確信めいたものが湧き起こってきた。そして昔のエジプトの年配の女性の映像が見えてきたのである。

私はこの旅行に行く前から私自身の過去生においてエジプトに住んでいたことがあり、しかもその年配の女性であったときの映像がよく出てきていたので「あっ、ここに住んでいたのか！」と、なんだか懐かしくなってきて、その古びた街を見たくなったけれども、なす術もなく、たたずんでいた。

過去生のフィーリング

過去生の記憶のなかにはさまざまなものがある。記録されているその〝記憶の書〟が開かれたとき、人は自分の過去生を知り、ただたたずむばかりかもしれない。

過去生の記憶の中には良い体験もあれば、思い出したくない体験もある。しかし思い出したくないような悪い体験をしていても、それについて悩む必要は全くない。

過去生で悪いことをすれば、その償いをしても、それには関係なしに必ずその人の身に良くない事がやってくるという過去生研究家がよくいる。なぜなら宇宙というフィルムにそれが記録されて、その作用が生ずるからだというのだ。

しかし記録は記録でしかない。その記録をもう一度使うかどうかが問題である。本人が悪い体験をした頃と同じフィーリングを今生で放てば、その記録のパターンは生きて実現してくるが、放たないように努力するならば、それは解消されてゆくものなのだ。つまり『今生で』いかに宇宙的に行動してゆくかが問題なのである。

実践法として、まず自分の周囲の環境から自分を切り離して考えてみよう。そして過去生という扉をあけてみよう。

(1)明るいフィーリングが湧き起こってくれば、それは過去生からとても良いフィーリングを持ち越していることになる。自分の内部にそのフィーリングがあることを自覚した上で、本人はもっと行動してよいのだ。

えてして良いフィーリングを持ちながら行動的でなく消極的な人が多い。行動的になれば、そのたびごとに自分の内部にあるこのフィーリングによって内部の意識からもっともっとアドバイスがやってくるようになる。

(2)暗いけれども良いフィーリングを自分の中に感じる人は、自分の感情をきれいにする必要がある。周囲と調和をすることによって周囲から良きパワーを得るようなものである。

周囲の意識と一体になるには自分の心を開いて周囲の中へ入って行かねばならないのだから。特に青い大空に溶け込むようなフィーリングを起こす練習が必要である。「神よ、力をお貸し下さい」と祈るためには、自分から神の中へ入って行かねばならない。

このフィーリングを持つ人は、この練習を行なうことによって暗さが解消し、内部の良きフィーリングが心の表面に現れてくるようになる。

(3)暗い、否定的、批判的なフィーリン

グを持つ人は、過去生でのフィーリングがマイナス面で強く出ている。肉体的にも注意を要する。今生でも再び否定的、批判的なフィーリングを使うならば、肉体的、精神的な病気になる可能性もある。

(4)明るいけれども批判的な人。こんな人は自分の中の暗さに気がつかない人である。マイナス面が常に多く出てくる人のフィーリングを切り替えるには、そのマイナス面がどのような性質のものであるかを知る必要がある。その場合、ただ恨みとか憎しみとかと決めてしまうのではなくて、どのような時にどのような想念が出るのかということに気づかなくてはいけない。一番良い方法は想念観察である。

そしてそれを切り替えるのであるが、良い方法は過去生の様子を知り、「自分は今、そのときとは正反対の良き宇宙的想念を持つ人間になっているのだ」と思い込むことである。「そんなことはとても出来ないよ」と思う人がいるかもしれない。しかし、そう思っているから出来ないのである。勇気を持って積極的に行なうことが大切だ。げんにこの方法で自分の病気を快方に向かわせた例があるそうだ。

スペース・ピープルに励まされた

前号で述べた練習法で過去生に興味を持って、いくぶんなりとも自分の過去生が見えるようになった方々がおられると思う。よく見えてこない方は忍耐強く取り組んで頂きたい。

いくらやっても過去生が見えてこないという人がある。なぜ見えないのだろう。まずリラックスできているだろうか。仕事のことで頭が一杯ではなかろうか。仕事の能率のこと、上司、同僚、部下などとの関係、金銭上のこと等々、しなければならないことが頭の中につまっていないだろうか。

家に帰ってくれば疲れが出て、すぐごろんと横になってしまう。まして過去生透視練習などに頭を切り替えようとしても、「そんなのやっていられないよ」となる。そのうち、しだいに過去生透視、オーラ透視、テレパシーなどに興味を持たない同僚の声が頭の中を占めてくる。「自分にはそんな力はないんだ。そんなことはウソだ」と思うようになる。これではいけない。

そこでちょっと立ち止まって考えてみよう。

各界のさまざまな分野で名を馳せている人々は日々が超多忙である。しかし彼らに共通することは、皆それぞれ人並はずれた好奇心と熱心さがあり、それを行動に移しているということだ。さらに自分の趣味を持ったり研究をしている人が多く、その方面でも活躍している。私たちはこの点についても考えるべきである。

実は私も最近、仕事の忙しさにかまけてオーラを見ようとしていなかった。というよりも、オーラなどを見ていたら同僚から何か言われるのではないかという臆病な考えが起こっていたのである。そこで同僚のように忙しく働かねばいけないと思い込み、忙しく働いているふりをしていた。

これがいけなかった。生来のんびり屋の私であるが、家に帰ってもうまく宇宙的なフィーリングへの切り替えができなくて、「そんなことしなくてもいいよ」という考えが湧き起こり、体がすっきりしなくなってきた。

スペース・ピープルの宇宙船（別な惑星から来る母船や円盤）が近くに飛んで来るときには「あ、いま来ているな」と少し感じるのだが、姿が見えるようにと思念する気持が強く起こってこない。ただし昨年十一月、アメリカのデザートセンターの旅行から帰ってきて約一週間後、自宅の上空を二機のUFOが飛んで行くのを妻と二人で目撃したが、そのときのイメージがときどき蘇ってきて、私の心の支えになっていた。

しかし今年の二月十九日、斉藤庄一氏宅で数名の方々と楽しいひとときを過ごしての帰り道、国道十六号線を車で走っていたときに、一機のUFOが久方ぶりに出現した。運転をしていた私と助手席に乗っていた妻とがほぼ同時に発見し、車を脇に寄せて止まって見ていた。

明るさは一等星ぐらいあり、ゆっくりと動いている。時刻は午後七時七分。「飛行機だったら点滅するはずだね」と話していたら、急に物体は暗くなった。そして少し後に「やはり点滅していないよ」と言うと、また明るくなった。続けて見ていると、しばらくして暗くなり、しだいに消えていった。

やはりスペース・ピープルは見てくれていた。私は突然勇気百倍し、元気が出て、感謝の気持で一杯になった。「よし、大丈夫だ、頑張ろう！」という想念がじわじわと湧き起こってきた。やはり自分から良き行動を起こさないとだめなのだ。

私たちは日常の仕事と過去生を見ることは無関係だと思っている。しかし過去生での体験を知ることによって、自分の能力や、ここに転生してきた目的をあらためて知ることができるし、仕事をとおして社会の一員として人々

火星で人々が集まる巨大な会堂

へのより良き奉仕ができるようになるのである。会社での生活と過去生を知ることは密接な繋がりがあるのだ。

それではいよいよ自分の過去生をさらに見てゆくことにしよう。

過去生透視練習での心がまえ

自分の過去生を見ようとしても見えてこないときには、それを見るための段階的な練習が必要である。たとえば天体望遠鏡で月の表面を見ることを考えてみよう。

私は中学高校時代に天体観測が好きで、ほとんど毎晩のように庭へ出て観測をしていた。中学一年生の頃には父の持っていたドイツ製の対物レンズとハイゲンミッテンズェー式の接眼レンズを、ベニヤ板で作った細長い直方体の筒に取り付けて、それを手製の経緯台と三脚にのせて観測していた。

しかし最初の頃は三脚と経緯台との架台部がしっかりしておらず、少しぐらつくために、月を望遠鏡の視野に入れても映像が揺れて見にくかった（その後、丈夫な木ネジを工夫して悩みも解消したが）。ましてファインダーがなかったために月を探すのにも初めのうちは苦労した。

暗い空を捜索して月の光によって視野の中の空が明るくなってくると、さらに明るい方へと鏡筒を向けてゆく。そうしてやっと月を見つけるという方法をとっていた。その後、ファインダーを付けたり、いろいろ工夫していたが、高校生になってやっと赤道儀式の屈折望遠鏡を手にいれたので、のんびりと観測ができるようになった。

過去生透視法もこれに似ている。過去生は見ようと思えばそこにあるのに心の望遠鏡がうまく組み立てられていないのである。そして頭での理解や肉体のリラックスはできても、どこを探してよいのか、つまりどうすれば見つけることができるのかが分からずに、ただそれらしいと思われる方向に心を向けるが、すぐに散漫になってしまう。これは心の経緯台がまだグラグラしているのだ。

そこでまず第一に必要なことは集中力である。これは極端な長時間に及ぶ精神集中ではなくて、「よし、やってみよう」という気持で、心を今見ようとしている方向に向けて安定させるのである。

次に、望遠鏡の視野の中で空の明るさを頼りにして月を探したように、それらしいと思う映像や印象をまず頼りにしてみる。そしてそれを書きとめておき、それに対する興味を心が失わないようにする。心の中の明るい光を探してゆけば、必ず自分の過去生はその明るさが強くなるにつれて見えてくるはずである。

見えてきたならば、心の経緯台をしっかりと固定しておかねばならない。そのために心は何を見ているのかを、ときどき確認するとよい。そして感情という風で心の経緯台を揺さぶらないことである。

東京本部月例研究会での過去生透視練習

以上のようなことを踏まえて、今年一月に日本ＧＡＰ東京月例研究会の『テレパシー練習』の中で行なった方法を紹介してゆこう。

まず体操を行ない、肩から腕の運動をやってみた。そしてイメージ法で自分の心を広げる練習をした。

それから次のようなことを行なった。

(1)あなたはここに生まれてくる前はどこにいたのでしょうか。それに関してどんな色、またはどんな景色が見えるか、自分の透視映像を見ていて下さい。

(2)焦点が定まらないときは、「私のすぐ前の過去生」という言葉を継り返します。

(3)最初は景色といっても森の一部とかテーブルとか、ほんの一部しか見えてきません。それ以上は期待しないで下さい。気を抜いてのんびりと、しかし見ようという気持は保ち続けて下さい。見えてきたらそれでよいのです。

(4)少し夢を見ているような気持になりましょう。そして自分の過去生のストーリーを見ていて下さい。

(5)〈以下は出席者に対する質問〉

(a)何が見えましたか。

(b)どんな場所ですか。

(c)あなたはそこで何をしていますか。

(d)今生であなたがしたいことは何ですか。大きなことでなくてもよいのです。ほんの小さなことでも。

(e)何を聞いたり見たり、また行なったときに、過去生とのつながりのようなものを感じましたか。

(f)何をしているときが集中できるときですか。料理とかなんとか。

(g)今生でのあなたの性格は怒りっぽいほうですか。他人を批判しやすいほうですか。それとも穏やかですか。

(h)この性格から考えて、あなたの過去生での心の変化を考えてみて下さい。どのようにして今生の性格を持ったのでしょうか。

(i)あなたの今の顔を思って下さい。前生の特徴が現れています。前生はどのような人だったのですか。

(j)今生に持ってきた目的は何だったのでしょう。あなたは過去生で、今生でなすべきこととして何を考えたのでしょうか。

（注意）ここで分かったことが確実なのだと思い込みすぎないようにして下さい。私たちはまだ練習の途上にいるのだという謙虚さが必要です。

以上の方法で約六十名の出席者が過去生透視の練習に取り組んだ。あとで手を上げてもらったところ、自分の過

去生はどうかと思って色の見えた人が約五十名いた。これは驚異的な数字である。リラックスしてただ過去生を見ようとする程度の練習では、これだけの数値は出てこない。そして練習が段階を経るごとに出席者の方々の過去生透視に対する真剣さが増すのを感じた。

(J)までくると、これらが印刷してある用紙に沢山の事柄を書き込んでいる方が多くなってきた。

月を見つけるために月の明るさを求めている。それが今の状態かもしれない。しかしそれでよいのだ。これだけ過去生について考える機会を持つならば、過去生の映像が見えてくるのはもうすぐなのだから。げんに月例会終了後、ある光景が見えてきたという数名の方々にお会いした。みな熱心な人たちである。

先程の各項目を試してみて頂きたい。さほどの時間はかからないと思う。各項目を終了し、ペンをおいてほっとしたとき、本当に自分の意識について考えている自分に気づくだろう。

映像をさらに鮮明に見る方法

この練習を始めるにあたっての心がまえとしては、「私にも過去生が見えるなんて、そんなバカなことがあるはずはない」と絶対に思わないことである。積極的にチャレンジすれば何事も可能になってくる。それが出来ないのは、すぐに悩んで消極的になってしまうからだ。意識は回答を与えてくれているのに、心が弱気になって映像が見えないだけなのだ。

では練習を行なおう。

(1)ゆったりとして心をリラックスさせる。それには「心はリラックスしている」と思うだけでよい。

(2)まじめに行なうほうがよい。昨今の流行の言葉でいえば、「軽すぎ」ても明るすぎてもだめ。

(3)「自分の心は映像がとてもよく見える！」と思い込む。

(4)見えてくる所は頭の中のスクリーンだと決めてかからないで、どこにでも見えてくればそれでよい。空想をしているときに、額の所とかまぶたの裏とか、目を閉じて前方一メートルの所とか思うだろうか。だれも思いはしない。全身で見ればよい。

(5)映像らしき一つの糸口をつかんだら、それを紙に書きとめて次を待つ。そうしてゆくにつれて外界に対する拘(こだわ)りが消えて、現れてくる映像に気を向けてくるようになる。

しかしこれは長時間行なわないほうがよい。そのために最初は二人で行なうとやりやすい。

一人が見ているときはその映像を相手に言い、相手はそれを書きとめる。後に書きとめたことを見ながら、あらためて湧き起こるフィーリングと比べてみる。これは他人の過去生を見るときも同じである。

(6)聞く人はときどき質問をするとよい。答える人は、分からなければ分からないとはっきり告げること。空想でそこを埋めてはならない。「外国が見えてきた。何の時代か、どこの国か分からない」というときは、このようなことをしている時代、このような服を着ている国などと言えばよい。無理をして年代をつけたり国名をつけたりしないほうがよい。同じような景色でも、他の国であったりするから。

(7)映像が見えてきたら、その段階に自分のフィーリングを持っていってみる。するとさらによく見えてくるだろう。

以上のように行なえば、宇宙哲学を応用している人であれば、かなりの所まで見えてくるだろう。ただしこれは心霊的な幻覚や単なる想像によるイメージなどとは全く異なる性質の影像で、テレビ画面のような鮮明な画像である。

過去生透視の実例（二）

これから挙(あ)げてゆく過去生は、本人のすぐ前の過去生とは限らず、今生での目的に影響の濃いものである。また今回は他の惑星での生涯も登場するので、それらの惑星の透視も行なってみた。読者にとって何らかの刺激になればと結ぶ。

(A) 他の惑星の透視

それでは他の惑星について見てゆくことにしよう。また自分が宇宙空間に出て、地球がどのように透視できるかという、ちょっと変わった実験も行なってみた。それが地球の項にある。

水星　物体をそのまま写しとるような結果から原因を現す芸術が発達しているように見える。住民は明るく忍耐強く、論理的な人々。

金星　これはアダムスキー氏の『宇宙からの訪問者』に実際の様子が出ている。植物が繁茂しており、遠くに山々が見える。暖かい。

地球　赤っぽい波動をときどき放つのが見える。論理的すぎるために迷う人が多い。建物は整頓されておらず、高低の差が激しい。低周波の音響振動が充満している。

火星　地球よりもはるかに清潔。週に一回、地区ごとに大きな会堂に集まって偉大な人々の話を聞いているように感じる（23頁の図）。

木星　大自然を地球人以上に慈(いつく)しむ人々の惑星。農耕が盛んであり、自然への祈念を行なっているのが見える。皆で大地に感謝をする。都市群は美しく整備されている。

土星　自然がすごく美しい。高い雲を頂いた荘厳な山々が見える。

天王星　金星のように植物が繁茂しており、湿潤な感じを受ける。健康や肉体の美の探求が盛んである。宇宙船の技術開発も進んでいる。

海王星　山岳地帯が多く見える。

冥王星　人々はハキハキとしている。生命の探求が盛んであり、クリーンな工業も進んでいるように見える。

X星　やや大きい惑星。鉱業が盛んであり、アステロイド帯も利用・調整されているように感じる。

Y星　のんびりとしており、農耕技術が進んでいる。きれいな花畑が見える。

Z星　太陽系の外への探求心が強い。住民は礼儀正しくて常識的な人々。男性的な面の感じを受ける。

Ⓑ GAP会員の過去生透視の実例

（いずれも東京本部役員）

篠　芳史氏　（役員総代、東京月例会司会者）明るさと強い金色のパワーが見える。過去生で金星人であったことがあり、生命と電気、大地と電気などの研究をしていたように感じる。リーダー的な愛の波動を放っている。

斉藤庄一氏　明るい白色の周囲に銀色のパワーが見える。土星にいたようで、各分野の知識・情報を整理するようなことをしていたのが見える。現在の氏から強いパワーを感じるので氏に聞いてみたところ、他にも南十字星の方向にある他の太陽系の惑星の記憶が強く、今でもそれを覚えているという。氏の他人に及ぼす良い意味での感化力は強い。

松村芳之氏　すぐ前の過去生では女性であり、かなりの働き手であった。久保田先生と同じ国にいたことがある。うまく開発すれば念力が強くなる人。

佐藤忠義氏　チベットの僧院が見える。文字の読み書きが充分にできるかなりのインテリだった。国境を越えてやってくる人々の通訳のような仕事をしていた。なぜ僧院に女性がいるのか分からないが、現在の奥さんは過去生のチベット時代に佐藤氏の世話をする女性だった。

田中　正氏　インドネシアで高貴な方であり、名前は発音をそのままあらわすと、Kulumireといった。また別な過去生でドイツにいたことがあり、現在の奥さんとはドイツで一緒に幼稚園で働いていた。久保田先生とは或る所で交流したことがあるようで、そこは水に関係する国であったように感じる。

安藤澄雄氏　他人に対するおもいやりの深い国で活躍していた人であり、潜在的にかなりの感受力を持っているのを感じる。音楽と肉体との調和、その応用としての病気治癒法などについて学んでいた。清潔な低くて広い屋根の建物が見える。

自分から練習をすることが重要

以上、いろいろと述べてきたが、読者は右の人たちに会って「あなたはどこそこにいたのですか」と尋ねることは控えて頂きたい。ここに述べたことを読んだならば、今度は読者が他人の過去生を透視する練習をして頂きたい。多少なりとも見えてきたら、ここに出ている事柄を分析することが大切である。よく私に向かって「どんなふうに見えますか」とたびたび質問してくる人がいるけれども、これではいつまでたっても本人の練習にはならない。自分から積極的に練習をすることが最重要である。自分でやらない限り絶対に透視力は出てこない。

日本GAP本部役員一同のパワー

以上のように本部役員の方々の過去生を透視したのであるが（私も役員の一人だが）、役員の方々の力には目を見張るものがある。能力を向上させようという意志力は何にもまして強い。そして皆さんは明るくて、お互いの良い面をさらけ出しているのでとても仲がよいのだろう。当然のことながら、同じレベル、同じ宇宙的カルマを持つ人たちであるから、同質結集の法則に従っているのである。

以前の月例会では、自分だけが良くなればよいと考えて他人を批判したり他人を諭す人などがよくいた。これでは本人自身が向上しないだろう。私たちは自分自身の体験によって悟るものなのである。そして根本的に重要なのは、他人を批判することではなくて、他人を激励することにある。

本部役員の人たちは、むやみに本に書いてあることの受け売りをしない。自分の考えやフィーリングと照らし合わせ、分析をすることによって自分の意見をまとめている。久保田先生もふだん会員とつきあうときは非常におおらかで、特に飲みながら雑談するときなどは、すごく愉快な雰囲気が充満している。先生は宇宙的な明るさや楽しさを生じさせる方であり、雰囲気を暗くするような説教などは一切されない。むしろユーモラスな話が多い。そして先生のもとで役員が結集すると、とてつもない力を発揮する。これでよいのである。

テレパシー能力の重要性

これまで過去生透視能力について述べてきたが、それはテレパシーの感受能力の一種である。そして正しくは送信力である念力と合わせてテレパシー能力という。

さて、スペース・ピープル（別な惑星の人々）が地球に公然と出現することが可能になったら、どのような人々がコンタクト場面に呼ばれるだろうか。

まず政府要人、経済界のリーダー格が呼ばれるだろう。しかしもう一つのグループが考えられる。それはテレパシー能力のある人々である。世界の終末論を考えている人などはお呼びでないのだ。ましてやチャネラー（霊媒）などは全く関係ない。謙虚で誠実な常識のある、人々の信頼を得ている人たちが重要になるだろう。

アメリカで話題騒然のスピリチュアル音楽ライブラリー ついに日本でも独占販売開始

潜在脳力を開発し、願望実現を早める奇跡の音楽

この音楽を聴きだしてから願望が次々と実現し始めた

アメリカで各界から熱狂的注目を欲びる常識を超えた奇跡の音楽

「スピリチュアル・ミュージック」、「ニューエイジ・ミュージック」と呼ばれる不思議な音楽が遂に日本へも上陸しました。このスピリチュアル音楽に関しては、日本でもニューサイエンス関係の書籍や一般の雑誌・新聞でしばしば紹介されているので既にご存知の方も多いことでしょう。今から十数年前にウエストコースト（米国西海岸）で湧き起こった、意識と物質を同一の次元でとらえようとするニューサイエンス運動、エコロジー思想等のニューエイジ革命の嵐の中から生まれ出たスピリチュアル音楽——。

この音楽の特徴をまとめると、

●作曲家・演奏者達が皆、30代前半から半ばと若く、瞑想愛好家の上、幽体離脱や超常現象を日常的に経験するなど、きわめて霊的意識が高い。

●今までの音楽のように単に曲を聴いて楽しめるという点だけではなく（もちろん音楽的に非常に魅力に富んだ曲が多く充分に楽しめるが）意識を高め、潜在意識を刺激するという、「意識・無意識への作用」という事に重点をおいて曲がつくられている。

●記憶力・集中力・創造力などの潜在能力が曲を聴くことにより自然に開発される。

●一～二年の長期にわたって、これらの曲を愛好していると、超能力者・ヒーラー（心霊治療家）の典型的脳波であるアルファー波とシーター波の同時高レベル波形とよく似た脳波があらわれるようになり、その結果、鋭い直観力——これがさらに高まると未知予知や読心力などの超能力——の持主になる。

●夜、寝る前に聴くと熟睡でき、疲れが翌日にあまり残らず、朝の目ざめがとてもさわやかになる。又、小さな事にクヨクヨしなくなる、包容力がつく、他人に寛容になり対人関係がスムーズにゆくようになる等々の人格向上効果が見られる。

●潜在意識が活性化されることにより、円滑現象（願望がスムーズに実現される、自分の思い通りの方向へ物事が進んでゆく等の現象）が起きるようになる。

これだけでは、まだとても説明しきれないくらいの驚くべき効能を持ったスピリチュアル音楽は、その多様な効能が、早くからアメリカの教育界・医学界・宗教界・実業界など各界から熱い注目を浴び、数々の実験、科学的基礎研究が今日まで行なわれています。

アメリカでは脳力開発に、願望実現にと幅広く活用されている。

アメリカでは、これらのスピリチュアル音楽の科学的研究、神秘主義的側面からの経験データに基づいて、応用面での研究・実験もさかんに行なわれています。現在のところ最も利用が進んでいるのは教育の分野で、サジェストペディア（超高速学習法）のバックミュージックとしてさかんにこのスピリチュアル音楽が利用されています。又、能力開発、霊性開発を目的とした瞑想教室では、スピリチュアル音楽はもう空気同然の必需品で、大脳の潜在脳力をめざめさせるのに著しい効果のあることが何千人の生徒達を使った実験でも実証されています。

又、成功を夢みるビジネス界のエリートの間でもスピリチュアル音楽はたいへんな人気で、脳力開発に、ストレスコントロールに、又、願望の早期実現のためにと、いろいろな使い方をされています。

◇「スピリチュアル・ヒットUSA」ライブラリーの中の1曲ご紹介◇
曲　　名：TEMPLE IN THE FOREST
作曲演奏：DAVID NAEGELE
曲の内容：アコーステイックピアノ、シンセサイザー、エレクトリックピアノ、自然音で潜在意識の波動をあらわす森のリズムが形づくられる中を、"オーム"の神聖なマントラのバイブレーションが限りなく広がってゆく様をみごとに表現している。
瞑想用に、又直観力・創造力開発に最適の曲の1つ。

米国のスピリチュアル音楽ベストヒット48曲・24巻を一堂に集大成

アメリカンライブラリー社では今アメリカで最も人気の高いスピリチュアル音楽のヒット曲、48曲（テープ24巻）の独占販売権を獲得し、「スピリチュアル・ヒットUSA」として日本の皆様に頒布会方式で通信販売いたしております。

「スピリチュアル・ヒットUSA」の頒布システムを説明しますと、初回から12ヶ月にわたって、毎月カセットテープ2巻が届けられ、支払いは毎回五、六〇〇円の送料三〇〇円。初回、二回目以降を問わず、商品到着後5日間の無料試聴期間がありますから、万一、曲が気に入らなければ自由に返品できます。（二巻のうち一巻のみの購入の場合は代金は半額の二、八〇〇円プラス送料）又、途中で購入をストップしたい場合は、所定のハガキ又は電話で通知すれば、その時点で購入を止められます。

商品は、2週間前後で到着します。瞑想ガイダンス、願望実現マニュアル、脳力開発マニュアルがついていますので、それぞれの目的に応じてこれらのマニュアルをご利用下さい。

第一回目の試聴のお申込みは、〒107 東京都港区南青山1-26-4 アメリカンライブラリー社 UF④係 電話 東京03(479)5864 までハガキか電話で、住所・氏名・年令・職業・電話番号を明記の上、「スピリチュアル・ヒットUSA」試聴希望とお申込み下さい。

★想像以上の効果にびっくり!!★

はじめのころは「何かおもしろい音楽だナ」っていう感じで、でも聞いていると心が落ちついてくるし、まあ車の中で聞くとしちゃあ静かでいい曲——くらいの印象しかなかったのですが、しばらくして色んな異常に気づきはじめました。低血圧で朝はニガ手だったのが、すごく寝ざめがよくなって午前中の仕事のノリがよくなったとか、仕事上の判断が正確になり前みたくドジをやらなくなったとか。それにいちばんの異常は、女の子（特に美人）と話をするとどうも変なところで緊張してしまって話が上すべりしたりして、どうも恋下手だったんですが、それが最近じゃ前みたく変な気負いがなくなり、ほんとに気楽にストレートに話ができるようになったことです。おかげで、会社の女の子がみんなボクの恋人に見えちゃうほど。何か会社へ行くのが楽しくなりました。ほんと。もちろん例の音楽は毎日かかさず聞いてます。次のテープが楽しみです。埼玉県　山口浩和

最近、人とのつきあいが信じられないくらいうまくゆきます。
広島県　船越照政

こうなったらいいなあと思っていたことがもう立続けに三度も現実のものになってしまいました。
東京都　高見隆春

Let's Support GAP-Japan
by Tomiyoshi Kawakami

「知らせる運動」参加の意義

川上富喜

知らせる運動とは

ご承知のとおりGAPとは「知らせる運動」という意味の世界的グループ活動です。日本GAPの目的は、UFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明、宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。

知らせる個人活動について

私は昭和五十八年春、日本GAPに入会以来、福岡支部の一員として支部活動に積極的に参加してきました。すなわち支部大会、月例会、UFO写真展、本誌UFO contacteeの書店卸し、アダムスキー全集と本誌の共公施設への寄贈、支部作成のアダムスキー全集「目次一覧表」（写真入り十円）配布等への積極参加です。

昭和六十年春から日本の皆様への「知らせる運動」の輪を広げたいという気持が強くなりました。その手段としてアダムスキー全集の「目次一覧表」を広く配布することにしました。これは手紙式年賀状、郵送する手紙等に同封したり、速読教室で教育資料として配布したり、その他各種会合で知り合った人、交通機関等で知り合った人でUFOに関心のある人へ配布します。

アジア地区へ輪を広げる

昭和六十五年に入り「知らせる運動」の輪をアジア地区住民にも広げたいと思うようにもなりました。その手段として中国の大学へ派遣された日本語講師を通じての「知らせる運動」です。

幸い私の英語会話の先生が六十二年から中国の長沙市の大学に派遣されているのでお願いしてみました。その大学の日本語専攻の学生には日本語Uコンの回覧と、アダムスキー全集「目次一覧表」を配布してもらったところ、みなびっくりしたとのことでした。

大学の英語専攻学生には英文版Uコンを回覧してもらったところ、アメリカ人英語講師数人から喜ばれたとのことでした。

知らせる運動についての将来の夢

宇宙に対する視野の拡大と地球世界への関心が深まるにつれて「知らせる運動」についても変化が起こりました。

日本在住の留学生への「知らせる運動」の一貫として、また国際学術文化交流を深めるため「留学生会館」を九州各県に建設したいという気持が湧き出しました。

また「生命の科学研究所」と付設の「生命の科学学校」の建設についてのイメージがはっきりしてきました。

昭和六十三年十月、福岡支部大会の翌日、市外観光ルートにあった「どんぐり村三瀬ルベール牧場」見学中、鹿児島市在住の薩摩会副代表の曾我部勇人氏から、地球にも「金星村」か「金星モデル村」を……との言葉を聞いたとたん、私もすぐそのイメージがはっきり浮かびました。

日本GAPは久保田会長を中心に世界に向かって活動を開始する時期が到来した今、私たち日本GAP会員は心を一つにして活動し、「知らせる運動」を拡大しようではありませんか。

（筆者は福岡支部会員。元陸上自衛隊二佐）

Adamski's Philosophy Gives Me a Strong Will
by Chiaki Ohkubo

強固な意志で生きることを教えられた私

大久保千秋

会長から頂いたご書簡に恐縮しました。私は以前に頂いたご書簡をときどき拝見しては自分の常識のなさが恥ずかしくなり、暗い穴に一人でジッとしている自分を発見します。それと同時に次のような印象を感じます。

「センスマインド（人間の通常の心）に安易な生き方だけを選ばせている人の言説にまどわされないで、偉大な哲人の真理の言葉だけを読み、雑音に耳をかたむけるな！」という久保田会長の教えが常に脳裡にチラつきます。

この教えを思うとき、泣きたくなるような衝動と「きびしい！」という思いが去来して暗く沈んでしまいます。と同時に私にとってこの教えを基本にして物事を考えるクセをつくったようです。この考え方は次のような言葉に通じるものと思います。

「われわれが最も聞きたくない真理は、知ることによって自分だけが有利になるような真理である」

「生命の探究者がまずなさねばならぬことは、〝原因と結果〟についての絶えまなき知覚力を養うことにあります。そうすれば心は過去に見てきたとおりの形を見るのみならず、形あるものの不可視な支持者について意識は洩らすでしょう」

『生命の科学』（アダムスキー全集第六巻）の第一課をマスターした者は自分の望む住み家（別な惑星）へ転生して行けるようになるというのはウソではないと、強くこの頃思います。

と同時に、会長が言われるように、別な惑星から来られた人々がボランティアーをしている現状を見たり聞いたりすると、ものすごく熱い思いが心中に湧き起こってきます。

会長が言われる「地球人一人一人に対して大宇宙が味方をしている」というのはあまりピンときませんが、実状はそうだと思います。でもこの地球上

に生きている人々は、以前会長が言っていた（書いていた）ように、絶滅する人々であるように思います（編注＝これは大変動で絶滅するという意味ではない）。言いかえるならば「生きたくない」と言わせるほどに真面目な人々の足を引っぱることしか考えない未熟な人や、勝ち負けのゲーム的感覚でしか物事を考えられない人や、与えられた材料でしか物事を考えない現状は、創造性とは呼べない代物（しろもの）です。ですから絶滅することになると思います。

勇気は持つものだと教えられたりしますが、個人的な勇気と国の持つ勇気とはおのずと違ってきますが、そんな事もわからずにひとりよがりの手前ミソの勇気なんて暴走であり、失敗することは目に見えています。ケネディー兄弟さんは偉大な勇気を持った人でしたが、アメリカのタブーに真っ向から挑戦して負けたのだと落合信彦氏が著書『二〇三九年の真実』で述べています。

真実というのは深く堀り下げてゆくと血なまぐさく、執拗にドロドロしていて、簡単に割り切れないものだと思います。特に地球上では――。簡単に割り切ろうという考え方はクローズアップ思想と似ています。問題提起ばかりの視点であり、それならどうすればよいかは誰にもわからないのが現状です。

このことは競馬にもあてはまります。運がない人はどこまでいっても運がないということを認識できぬメンタリティーの甘さにも通じてきます。ここら辺のことが理性とか分別とかの話になってきます。「善良な人より賢明な人が好き！」ということですよね。

この地球上の人間界はＵＦＯ問題だけが悪臭を放っているのではなしに、多くの問題が悪臭を放っています。そして真実に対して見ざる聞かざるという態度をとる人が多いのは、あまりに外圧がひどすぎるからです。さらにお金を得るためにヒューマニティーを利用している人を他の一般人が見抜けないということもあります。それで見抜こうとする側と見抜かれまいとする側の戦いで、今日のような風潮、つまり互いに相手を信じないということがあります。信じてバカをみ、疑ってバカをみるという傾向は年々増大しています。それゆえにＵＦＯ問題はブームにはなるかもしれませんが、文明を救うほどの理解力を人々の身につけさせることが出来るのでしょうか、疑問です。

アダムスキー氏も言っていますが、この地球上の世界で生きてゆく力のない人は進歩した別な惑星でも生きてゆけないと言っているように、私自身、今後この世を生きてゆくために全力を尽くします。私は生きてゆけるだけの技術を持っていませんので、今後それを身につけて生きてゆきます。

私に出来ることはやりますが、出来ないことは出来ないというけじめをはっきりとつけて、強い意志を持って生きてゆきます。アダムスキーも六十歳代で大活躍をやりましたし、久保田会長も六十代なかばで大活躍を続けています。ＧＡＰ活動、頑張って下さい。

Planet Venus is Our Model
by Yoko Uchida

金星を目指して進む

内田洋子

いま地球では世界のあちこちで、いろいろな人が、いろいろな方法で、例えて言えば金星を目指しているような時代だと思います。金星は摂氏四百八十度の焦熱地獄で生物は存在しない世界だといわれていますが、あれは偽りの情報で、実際は素晴らしい文明が発達しているのです。それで地球人も金星を意識しなくても結果的には人間の能力とか精神世界のこととか、その他沢山の物事が金星の方向を向いていると言えるでしょう。あらゆる人の人さし指の彼方に金星が光り輝いている図が浮かびます。

ところが人々の目はせっかく指し示された人さし指の彼方の金星を見ないで、いつのまにか単なる指の先端に終始してしまうような気がします。大切なのは彼方の金星であって、目前の指そのものではないはずなのに、肝心の金星を見ないで、それぞれの指が白いとか黒いとか太いとか細いとか丸いとか四角いとか、そんなことが問題になってしまいがちです。

大切なのは指の彼方の金星のはず。地球的な相対的な指そのものよりも、指が何を指し示しているかの方が重要です。ただひたすらに金星の素晴らしさを心にとどめて、常に金星の方向を向いて進んでいきたいものです。

それに指の彼方の金星に焦点が合っていれば迷い子にもなりませんし、惑わされることもありません。それこそいろんな人さし指が金星の方向を示しているこの時代ですから、いろんな指があって当たり前です。でも彼方の金星を見つめていれば大丈夫だと言えるのではないでしょうか。

そして何よりも嬉しいのは、春川氏の話でこの地球もいつかは金星のようになれるんだということ、私たち地球人もその可能性を充分持っているということです。いま地球はこんな状態だけれども、いつかは地球人も金星人と同じレベルに到達できると思うと喜びと勇気と希望が湧いてきます。心の底から嬉しさがこみ上げてきます。指が白いか黒いかよりも、そのことの方が私にとってどんなに大切か――。

これからも本当に大切な事柄と目標を考えて生きてゆくつもりです。

（筆者は東京芸大卒。フランス留学。版画・彫金家）

Let's Live in Harmony with Others
by Shoichi Saito

輝く星々の彼方へ

斉藤庄一
〈日本GAP本部役員〉

私は昨年春に年願かなって結婚することができました。相手は同じGAP会員で本部役員の一人、小島原竹子です。これも皆様方のご支援のたまものと心から感謝しております。毎日楽しい日々をすごさせて頂いております。

超能力で両親の病気を治す

この頃世間では離婚が多いようです。私が夫婦円満の秘訣として考えておりますことは、何か一つでも問題が発生した場合、夫婦同士でよく話し合うことなんです。どんな小さな事でもいいですから時間があれば二分でも三分でも話し合うことなんです。家庭不和を乗り越えるには互いに話し合うことがまず大切だと思います。

人間はだれしも一長一短があります。表も裏もあります。でも良い部分も悪い部分も含めて相手を愛してあげることが重要だと感じます。問題が起こったときは私と妻の両方で意見を出し合って検討すれば、必ず活路が見い出されます。

先般私の母の胸の所に腫瘍ができましたので、私は妻と相談して交替で超能力治療を行ないました。それも一日に一時間ずつ集中して行なうのです。そうしたら大きなシコリが徐々に小さくなりました。結局は入院して手術しましたが、それ以来健康体です。

父も肝臓をわずらいまして入院したのですが、超能力治療を受けつけない人間なものですから、またも妻と相談してイメージ法を応用しました。まず睡眠をとることが必要ですから、父がいい寝顔で眠り込んでいるイメージを二人で心の中に描いて、体が徐々に動かせるようになる、そして顔の色ツヤがよくなって元気になるという三段階のイメージ法を試みたんです。

そうしましたら入院したときに病状がずいぶん悪化していたのが、ここ一週間くらいで非常に回復が早くなってきたんです。起きて歩けるようになったものですから、医者も「すごい回復力だね」といって驚いていました。

そういうことを私の家庭では妻と二人でやっています。その他にもESPカードを使用してテレパシー練習も行なっています。

超能力開発に必要な基礎

話は変わってここで超能力についてお話ししましょう。

超能力というのは大別して二通りあります。まず一般でいわれるテレパシーが一つ、それからサイコキネシスといわれる念力です。

これをさらに分けますと、念力というのは自分の気持を相手に伝えたいということで、テレパシーは相手の気持を少しでも理解しようということです。人間にはだれでも能動的性格をもつ念力と受身的なテレパシーの能力があります。

こうした潜在能力を使用することはエネルギーを消耗するんです。特に念力というのは物を動かすとかスプーンを曲げたりするのですが、私の場合はこれをやりますと非常に喉が乾くんです。水分を沢山補給する必要のある体質です。人によってはずいぶん食物を食べる方もあります。

それで、そうした能力の開発はどういうふうにやるかということなのですが、最も大切なのは『自分に戻ること』です。それはどういうことかと言いますと、こういうことです。

以前に聞いたのですが、「私はどうしても自分自身が好きになれない」という人がありました。そこで大切なのは自分で自分を愛することです。その意味は人間だれしも自分のなかにプラスとマイナスの部分があります。これは長所と短所です。それで「悪い部分はイヤだ。良い部分もイヤだ」という人があります。

そうでなくて、自分の長所も短所も含めて自分自身を客観的に見るのです。飲んだくれて路上に寝ていようが壁にぶつかって暗く沈んでいる自分だろうが、それはいまの自分の姿なんです。その姿をまずはっきり見ることです。それでも自分を愛することになると思います。

とにかくこの広い大宇宙の中で斉藤庄一という私は一人しかいないのです。そうなるとこの自分を粗末にしてはいけないんです。といって自分を優しくいたわって愛撫してもいけません。優しさとか厳しさとかはいろいろあって、愛のなかの厳しさもあります。こうして自分を見つめ直すことが必要です。

広大な宇宙を一つの輪と考えますと、銀河系はその中の小さな輪で、太陽系、地球はさらに小さな輪となり、その最小の輪は家庭です。ですから家庭内が和合すればそれは大宇宙との和合につながります。私が個人的に思うことですが、もしスペース・ブラザーズが地球に対して危惧していることがあるとすれば、それは家庭の和合の問題であろうと思うんです。各自が自由に好き

なように自分の人生を歩めというのではなくて、和合というものを重視しているのだろうと思います。

この和合を基礎にして能力開発をしてゆくことが必要です。

自分自身と地球を愛する

次に一つの事を長く続けるのです。たとえば毎朝六時に起きるとか、ご飯を食べる前に「いただきます」と言うとか、そういうことでもいいでしょう。こうして自分の中に自信をつけることです。しかし自信が強すぎると『我』になります。こだわりが強すぎてもそうです。そうなるといけません。

人間の中にはプラスとマイナスがありますから、それをいかにうまくバランスをとるかが重要です。一つの物事だけに執着しますと周囲が見えなくなりますから、余裕をもたせるのです。

先程「自分を愛すること」と申しましたが、その次にこの地球を愛するのです。スペースピープルの住む偉大な惑星に近づこうとするのも素晴らしいことですが、それよりも自分の住む地球をまず愛すること、そして絶対にあきらめないことです。

そして常に希望を持って、自分で出来ることを精一杯やることが大切です。

今までアダムスキーの体験がいろいろな方面で取り上げられておりますが、素晴らしい内容だと思います。そしてアダムスキーの『知らせる運動』というのがあります。宇宙の法則、つまり宇宙は一つなのだということをUFOの存在も含めて皆さんに知らせてゆくという運動は、非常に大切なのではないかと思います。

いま日本GAPがUFOと宇宙哲学の研究グループとして世界最大の組織力を誇っております。これから日本GAPの活動は大きく注目されるでしょう。この活動は大切なものではないかと実感します。

本日の私の講演の題目としまして、『輝く星々の彼方へ』としました。これは以前私が所属しておりました組織が小冊子を発行しておりましたが、その題名です。

輝く星々の彼方に何が見えるだろうか？　これが私の一つのテーマでもあります。これは答えというものはないと思うんです。答は人間個々の中にあるんです。いま皆さんがフッと思ったときに感じられることがその人にとっての答だと思います。

私も最近ようやく宇宙というものを感じることができるようになりました。

ある夜の出来事です。なにげなく空に向かって体を開いていますと、宇宙の鼓動というものが感じられるんです。クーンというか何というか、静寂の中での心地よい波動というものを感じることができました。これは今から七年前の話です。

そしていまようやく「宇宙は一つなのだな」ということがわかってきました。ただし完全に理解はしていないと思います。でも毎日がすごく楽しいんです。

夢と希望と可能性を持つ

人間は自分の中に見えない潜在意識というものがあります。小さいときから親や先生から「お前はダメだ」とか「バカだ」とか「こんな事が出来ないのか」などと何度も繰り返し言われますと、それが潜在意識の中に入り込んで、自分の可能性を閉じ込めてしまうわけです。そこで閉じ込められた可能性を一つ一つ解き放つことが大切になってきます。

なぜならば人間には無限の可能性があるので、何もない所から物事を生み出すことが出来るからです。

たとえば大昔の話になりますが、原始人が自然の摂理で火を発見して、いまは原始力という時代になりました。昔、鳥を見て、「飛べたらいいのになあ」と思ったのが、ここ百年間でスペースシャトルで宇宙へ行って帰ってくるという時代になったわけです。

ですから人間の可能性というものを信じて、自分が最善をつくして努力することが大切で、そして自分の内部の意識、すなわち自分自身に問いかけることです。人間はみな転生（生まれかわり）を繰り返してきています。その間に身につけた知識はすべて自分の潜在意識の中に含まれています。

たとえば人間は何かわからない事があると、すぐに人に聞いたり頼ったりしますが、解答はすべて自分の中にあるんです。ですから素晴らしい自分にもっと気づく必要があります。

夢と希望と可能性。これが自分にとっての最大の奥義であるといってよいでしょう。（昨年十一月の日本GAP東京月例研究会における講演の一部）

編者注　筆者・斉藤庄一氏は今を去る十四年前の中学生の頃、東京タワーの上部展望台備え付けの大型双眼鏡より空中を見ていたとき、突如アダムスキー型円盤が視野の中に入り、しかも円盤の丸窓から異星人らしい人が出現して手を上げて合図をする光景を目撃したという驚くべき体験の持主である（この詳細は本誌111号に『円盤の窓から手を振る〝異星人〟』と題する記事で紹介済）。当時日本GAPは規則により中学生の入会を認めなかったが（現在は認めている）同君の熱意により特例として入会を許可した。超能力者・遠藤昭則氏の透視で別な惑星から転生してきたといわれる斉藤氏も超能力者で人格高潔、まさに宇宙的カルマを有する人と思われる。現在は『異星訪問奇談』の主人公・春川正一氏と共に能力開発関係の仕事を専門としている。

A Huge UFO Appearing Over Nagano-Pref.
by Fumiyoshi Hakata

長野県に巨大UFO出現！

●博田文喜（はかたふみよし）（日本GAP長野支部代表）

一昨年長野県喬木村でUFOの大群をビデオカメラで撮影した事件は本誌101号で詳報されたが、今度は筆者の住む地域上空に巨大な母船らしき物体を目撃するという事件が発生した。以下は筆者の取材によるレポート。

(1)目撃者＝前田静夫（青果卸商社々長、五十三歳）、征子（同夫人、四十四歳）、鈴木幸生（運転手、三十四歳、GAPに入会）住所＝長野県塩尻市広丘高出一八六六番地

(2)目撃場所＝松本市郊外の芳川村井付近から塩尻市広丘吉田の中央道長野線の塩尻北インター側道

(3)目撃日時＝昭和六十三年十一月三日、午後八時五分頃から約十分間。

この事件は三人が大町温泉郷でゆっくり休暇を楽しんだ後の帰途発生した。

三日夜八時すぎ、松本市郊外に新しく出来た流通団地を通過しようとした頃、外車なので右側の助手席に乗っていた前田さんが、ふと右側後方を振り返ると、夜の闇に細長い光体が滞空しているのを見た。何だろう？　飛行機にしては形がおかしい。外へ出て見ようと思い、車を停めさせた。

あれ、動かないじゃないか、と運転手の鈴木さんに声をかける。三人でしばらく見ていると、物体は動き始めた。「スーッとこんな具合に上の方を向いて動き出したんですよ」と言って前田さんは手にしたタバコを物体に見たて、少し上の方に向けて動かす。最初は星が十個つらなったように見えた。

そこで車を走らせて松本市と塩尻市の境に近い側道の曲がり角まで来て停車して見上げると、物体は車の横よりやや後方に浮かび、形もはっきり見える。

物体は回転しているらしく、回るたびにレーザー光線のような光をピカーピカーともものすごく強烈に放射したと奥さんが話す。

船体の色は金色に近く、「見た者でなければ分からないような何とも表現できない色でしたね」と鈴木さん。

物体の両端はより強く輝き、いくつかの環があるようにも見え、中央部は透けて見えるようだったが、奥さんはその部分が三つの窓のようだったと言う。

また物体の両端には突起物があり、そこから線香花火のような閃光を発していた。

そこでまた車を走らせて塩尻北インターチェンジの入口の信号の先で停車して空を見ると、物体もパッと停まって、飛行機などでは到底出来ないような動き方をしたので、前田さんは気持が悪くなって「飛ばせ、飛ばせ、逃げろ！」と鈴木さんをせかして車を勢いよく走らせたところ、物体もものすごいスピードで移動した。その速さはわずか一秒ぐらいだと鈴木さんが言う。雷光のようなすごい速さだったと前田さん。

驚いた前田さんは林化工を少し過ぎた位置でまた停車させた。物体も止まって光を照射する。このときの物体の大きさは手を伸ばした位置の約七～八十センチぐらいで、あまりに巨大なのに仰天した。

このときも非常に強烈な光線を発するので、それが車にあたると溶けると思った前田さんは、あわてて車をすぐ下のガードに避難させた。それからおそるおそる空を見上げると物体は視界から消えていた。

その後、物体の正体を知るために天文台、気象庁などへ電話で問い合わせたが、取り合ってくれない。なんとか話を聞いてくれる所はないものかと思っているとき、ふと手にした新聞に日本GAP長野支部主催のUFO写真展の案内が載っている。これだ！というわけで筆者の宅へ電話をかけてきた。会ってみると三人は非常に興奮した口ぶりで話す。よほど驚いたのだろう。

だがそれまでに何人かの人に目撃体験を話したが、だれも相手にしてくれなかったという。

しかし前田さんの次の言葉は印象深いものだった。

「地球上に何十億の人間がいるか知らないが、たとえ人が信じてくれなくても、私ら三人はこんなすごい物を見せてもらったんだから幸せだと思っていますよ」

その後三人は毎晩のように寒い夜空を見上げて物体との再会を期待している。

編者注　この事件が筆者・博田氏の地元で発生したことは意義深い。折から長野支部はUFO写真展開催を準備中で博田氏は多忙だった。これにタイミングを合わせるかのように巨大なUFOが出現したことは看過できないものがある。UFO研究の大家である博田氏がみずから目撃して報告するよりも、未経験の人たちが目撃驚嘆し、それを博田氏を通じて発表させるほうが信憑性（ひょうせい）が強化されると、〝何者〟かが配慮した結果なのだろうか。推測は自由なので各自で推測検討されたい。

▶①三人が最初にUFOを見た流通団地。写真中の黒い物体は描いたもの。

◀③曲り角で二度目に見たときの物体。

▶②松本市と塩尻市の境の側道の曲り角。

◀④塩尻市インターチェンジの入口付近の物体。

撮影／博田文喜

多年にわたって地球を回る宇宙飛行や、特にアポロ月飛行の実施中に、宇宙飛行士たちがUFOを目撃したという話がかなり伝わっている。真実と思われるものからフィクションらしいものまで、さまざまであった。そして月面の宇宙人基地や産業活動に関する多くの記述は、月面の研究に打ち込んできたアマチュア・プロ天体観測家たちの侮蔑の的になってきた。「天文学者でUFOを見た人はいない」と公言する人さえいて、学問が絶対的な真実を保っているかのごとき態度を示すのだが、どっこい、冥王星を発見してノーベル賞をもらったクライド・トンボー博士が米ニューメキシコ州ラスクルーセスでUFOを見たと図面まで描いて堂々と発表しているのだ。

もちろん、こうした未確認飛行物体のすべてが地球外の惑星から来ると速断すべき直接の証拠がいちいち出るわけではない。しかし、少なくともUFOの存在を真っ向うから否定するのは、いささか視野が狭い。この世界の裏面には何が発生しているか、わかったものではないのだ。

ここで驚くべき出来事を紹介しよう。これは現実にアメリカで発生した事件である。

ボブ・デービス（仮名）はもとNASA（米航空宇宙局）の職員であった。テキサス州ヒューストンのジョンソン宇宙センターで保安要員をやっていた。仕事は管制センターの第三十番棟をパトロールすることで、他の要員と一緒に建物内を巡回して、重要な場所の安全と火災防止器の点検を行なうのだ。

ところが、ある日のパトロールで彼は腰を抜かした。

管制室はガラス張りになっており、広い部屋の一方の端に報道官用の電話が二台ある。ニュース用の大きなテレビがあり、オレンジ色の皮張りシートが六列並んでいる。

前方には巨大な世界地図があり、分割されて横に広く並んでいる。地図上には多数の線が引かれており、一定の地点にいる宇宙船の飛行状況や位置をあらわしている。

この幅の広い地図には非常に大きなテレビスクリーンが付属している。アポロ月飛行から使用されているものだ。

宇宙船から来る信号をキャッチすると、それがコンピューターに入力される。続いてコンピューターはテレビスクリーンの後部にある一列のカメラ群へ別な信号を送る。このカメラ群からはすごい高熱が出ている。普通の人は絶対に見ることのできない場所である。

ある日デービスはアポロ宇宙飛行中にこの三十番棟をパトロールする仕事を命じられた。科学者ではないので、どのアポロ飛行なのかはよく覚えていないが、宇宙飛行士が月面のハドレー溪谷へ降下したときだという（これはアポロ15号）。

同僚のマイク・ブラウン（仮名）と二人で管制室の後方にある火災防止器を点検したあと、ひと休みしようと、椅子に座って一服するためにパイプに火をつけた。

二人がその部屋に入って約十分たったとき、突然数名の男たちが走り込んで、興奮した様子で巨大なテレビスクリーンのほうへ近づいた。

なんであんなに興奮しているんだろうと、二人があっけにとられてスクリーンを見ると、月着陸船の前側に装備してあるビデオカメラが、宇宙飛行士たちの立っていると思われる地域の上空に向けられている。

二人はアッと驚いた。スクリーンの中央には強烈に輝く一個の物体が映っているではないか！　黒く光る円形の物体が上空に静止しており、着陸船のカメラがピントを合わせている。

これは、ひょっとすると司令船かもしれない。地上の飛行士たちを観察するためか、または救助活動で降下してきたのだろうとデービスは思った。

しかし物体はスクリーンの右の方へ動き始めたので、着陸船のビデオカメラもそれを追った。最初からカメラはハドレー溪谷の飛行士たちの姿をとらえるためにその方へレンズが向けられていたのだが、なんと「ひとりでに」月面上空にいる一個の物体を追っているのだ！

デービスとブラウンは呆然としてこの場所を見つめた。物体はその地域の上空で完全な円を描いてから、ものすごいスピードで上昇していった。口をあんぐりあけていたデービスが、どもりながら言う。

「あ、あれは、いったい、なんだい？」

デービスのかすれた声を聞きつけた男たちがギョッとして二人を見た。どやどやと一同がやってきて、二人を取り囲む。一人が怒鳴った。

「おい、おまえたちはここで何をやっているんだ？　どうしてここへ入ったのか？」

クラフト博士と思われる人に向かってデービスが答える。

「私たちはずっとここにいました。火災防止器を点検したあとで、ひと休みしていたんです」

デービスが相手に尋ねた。

「いまスクリーンに映ったのは何だったのですか？」

別な男が口をはさんだ。
「あれはこのテレビスクリーンの後ろにあるカメラのレンズについた油の泡だ」
科学者にしては信じられないようなバカげた説明だな、と一種の軽蔑感がデービスの脳裏をかすめる。
デービスは相手の目をのぞき込みながら尋ねた。
「そこのスクリーンの裏側にあるカメラのレンズについた油を、なぜ月の着陸船のビデオカメラが追いかけるのですか？」
相手はデービスのシャツの垂れぶたからぶら下がっている名札を手に取ってすごんだ。
「デービス君、私はあの大きなスクリーンの後ろにあるカメラのレンズについた油のしずくだと言ったんだ。それだけのことだ。バカなことを聞くな。よけいなことをしゃべると明日から職を失うぞ！」
脅かされたデービスとブラウンは震えながらその場を離れて、頑丈にガードされたドアーから外へ出た。

以上は実話である。実在する本人がNASAを退職した後、米マサチューセッツUFO研究会に手紙を出して漏らしたもので、同会は仮名を条件に機関誌に発表し、それを筆者に送ってくれたのである。
アポロ15号は一九七一年七月二十六日に打ち上げられて、月のハドレー溪谷へ着陸した。司令船のパイロットはアル・ゴードン。月面に降り立ったのはデービッド・スコットとジェームズ・アーウィンだった。
この種の事件を月面上のUFO出現秘話として書くのは容易だが、他の話と相違点が一つある。右の研究会の主宰者ローレンス・フォーセット氏によると、氏もこの場面をテレビで見たときに、画面の中に月面上空の暗い空を左から右へゆっくりと移動する小さな輝く物体を約二十秒間見たというのだ。最初は司令船ではないことに気がついた。しかしテレビの解説者はこれについて何も言わなかったという。
まだ不可解なことがある。月面のハドレー溪谷にいたアーウィン宇宙飛行士は、後年来日してテレビに出演し、月面の状況を話した。英語で語るにつれてスクリーンに日本語の字幕が出てくる。筆者は都内江戸川区の自宅で見ていたが、彼は話の途中で「月面でUFOを見た」とはっきり発言したのに、この部分に限って画面に日本語の字幕が出なかった。翻訳者が「UFO」という言葉を知らなかったとは考えられない。意図的に隠したのか。いまだに気になる謎である。

NASAといえばUFO研究界でとかく評判がよくない。これはダニエル・ロス氏が言うように、UFO問題や地球以外の惑星の問題に関して真相を熟知しながら隠蔽工作をやっているとみなされているからだ。
ところが、またも驚くべき〝事実〟が暴露されたのである。アメリカの北オハイオ州UFO研究会のベテラン調査マン、リッキー・ヒルバーグが明かしたところによると、彼は三十歳前後と思われるジェリーという男に会った。ジェリーは電話帳で会の名を知ったのである。多年自分を悩ませ続けた問題を打ち明けたかったと言う。
ジェリーはかねてからUFOに関連のある〝何者〟かがテレパシーで彼に連絡したがっているような印象を受けていたので、バン型の車を買って、それに各種の電子装置を積み込み、UFOが目撃される場所へ行って観測を始めたというのだ。
ヒルバーグは最初自分はからかわれているのだろうと思ったが、相手がNASAのルイス研究センターの技術者であることがわかって急に考え直した。その電子装置はジェリーがNASAからタダ同然で払い下げを受けたものだった。
いろいろ話を続けているうちに、NASAはUFO問題に対して公式にどのような態度をとっているのかとヒルバーグが質問した。
ジェリーはちょっとためらったが、次のように話し始めたのである。
「NASAは長いあいだUFO問題を調査してきました。極秘の問題に接している人でさえも、全体像を把握できないほどの量があります。
でも私はある一つの事を知っています。NASAは少なくとも一機のUFOを所有しているんです。それでUFOに関して多くの事を発見することができたんです！」
驚いたヒルバーグが尋ねた。
「それは絶対に間違いないことかね？」
続いていろいろとジェリーに話し、UFO研究家がそうした話を立証しようとすると、必ずゆきづまってしまう状況を説明した。
「私の言うことに間違いはありません。私はこの問題に関係のあった多くの人と話しあいました」NASAはUFOに関して内容を選びながら大衆に漏らしているという話さえありますし、近い将来UFOに関する何かの声明も出されるという噂もあります」
ヒルバーグは奮いたった。ジェリーの話を立証するような文書はないかと尋ねると、相手は答えた。
「ありませんね。NASAのUFOプロジェクトに関する漏洩のすべては、本来口頭で行なわれるんです。だから文書が流れたことはないんです」

科学 SCIENCE

〈国内有力紙に掲載された科学記事を抜粋紹介。各記事末尾のカッコ内数字は掲載月日を示す〉

新エイズ薬を開発―スウェーデン研究者

エイズ（後天性免疫不全症候群）の進行を遅らせる薬としてアミドチミジンが有名だが、スウェーデンの研究者は八八年十二月十二日、アミドチミジンより四～五倍も効果のある薬の開発に成功したと発表。

国立カロリンスカ研究所と共同研究した民間グループのボ・オベルク博士らによると、この薬はフロロダイオキシチミジン（FLT）といい、人間のエイズウイルスによく似た猿免疫不全ウイルスに感染した猿に投与して実験した結果、アミドチミジン投与に比べて四倍の効果が得られた。またエイズウイルスに感染したヒトの細胞を使った試験管での実験では五倍も効果があったという（12・14毎）。

宇宙の旅1年から帰還

宇宙滞在まる一年の新記録を打ち立てたソ連のウラジーミル・チトフ船長、ムサ・マナロフ飛行技師の両飛行士はモスクワ時間十二月二十一日午後一時、先月末から共同飛行を行なっていたフランスのジャン・クレチアン飛行士とともに地球に帰還した。モスクワ放送が報じたもの。両飛行士は八七年十二月二十一日にソユーズTM4宇宙船で飛び立ち、軌道ステーション「ミール」にドッキング、宇宙生活が始まった。

二人は六月にソ連・ブルガリア、八月末にソ連・アフガニスタン、十一月にソ連・フランスの国際クルーを迎えたほか、十一月十二日にはユーリ・ロマネンコ飛行士の宇宙滞在三百二十六日の記録を破り、連日更新していた（12・22毎）。

体から電気が出る38歳中国女性

中国・黒竜江省に体から放電する電気人間がいたことがわかり、話題になっている。三十八歳の女性だが、地面に足をつけていると蓄電するらしく、人に触れると「パッパッ」という音とともに相手をマヒさせるという。

ハルビン発の中国通信社電によると、この女性は頭を負傷して入院中、同室の患者に放電し、その存在が明らかになった。同病院で調べたところ、地面に足をつけると蓄電するが、歩いた後や地面から離れた時はこの電気がなくなるという。正午から夜の九時ごろの間に電圧は百ボルトを超えるともいう。

彼女は充電しているときは気がふさぐが、放電したらスッキリした気分になるとも。とはいえ、だれかまわず触って放電するわけにもゆかず、今後の対応に困ることになりそう。当地の関係者は、彼女が気功をやっていたことから「気功と帯電が関係あるのでは」などとしているが、その因果関係を証明するものはなく、専門家による研究が続けられているという（12・26毎）。

話せば英語に変わる通訳マシンを開発

松下電器グループは一月十八日、簡単な日本語をマイクで入力すると流ちょうな英語に変換する「日英通訳装置」の開発に成功したと発表した。パソコンを使い、だれでも入力できるのが特徴で、世界で初めての成果という。理解するにはまだかなりの制限があるが、同グループはこの装置を聖書サイズにまで小型化し、四～五年以内に携帯用通訳装置として商品化したいとしている。「頭がさすように痛い」「きのうからめまいがする」「朝から時々くしゃみが出る」など約三千種類の状態を表現でき、これらをすべて英語に変えることができる。同グループは患者用辞書を充実させるほか、観光やショッピング用の辞書も加えることにしている（1・19毎）。

スウェーデン王立医学研究所の日本拠点

医学分野では世界最高規模の研究機関とされ、ノーベル医学・生理学賞の選考機関としても知られるスウェーデン王立カロリンスカ研究所が、アジア地域の拠点研究機関を神奈川県に設置する意向を固め、非公式に同県に打診した結果、県側でも受け入れの姿勢で、立地の候補地として横須賀市と葉山町に六十四年度から着工する「湘南国際村」を挙げている（1・4読）。

コーヒー飲みすぎは妊娠能力低下

赤ちゃんをほしいと願う女性にとってコーヒーなどに含まれるカフェインは有害とする米国立環境健康科学研究所の研究者による調査結果が当地の医学誌「ランセット」に発表された。この調査は米ノースカロライナ州に住む二百二十一人の女性を対象に行なわれた。

この調査結果の中で同研究所のアレン・ウィルコックス教授は「コーヒーやカフェイン入りの飲み物を飲まない女性に比べ、一日に一杯以上のコーヒーを飲む婦人は母親になる割合がほぼ半分」と述べている。また、一カ月に七十杯以上飲むコーヒーの〝ヘビードリンカー〟の妊娠率は、コーヒーを飲まない人の二六％に過ぎなかったとしている。ただしウィルコックス教授は、カフェインを断つことで妊娠能力は容易に回復するとも強調している。教授によれば妊娠はカフェイン以外にもストレスや運動、アルコール飲料、食物などの要因と結びついている可能性があるという（1・5読）。

DNAとらえた初の写真撮影、米で成功

生物の遺伝情報が組み込まれているデオキシリボ核酸（DNA）を走査型トンネル電子顕微鏡を使って百万倍で撮影することにローレンス・リバモア研究所、カリフォルニア大バークレー校で成功した。一月十九日にサンフランシスコで開催中の米科学振興協会年次大会で公表された写真は、DNAの二重らせん構造を見せた（1・21読売）。

全長145兆キロのガス流―ブラックホールの〝証拠〟を発見

米ハーバード・スミソニアン天体物理学センターの研究者ポール・ホー氏は十日、当地で開かれている米天文学会で、われわれの銀河の中心部に向かって流れている全長が百四十五兆キロに達する希薄なガスの流れを発見したと発表した。銀河の中心部にはブラックホールがあるといわれるが、同氏はこのガス流発見がその証拠になるとしている。これは西ドイツの大学、研究所とマサチューセッツ工科大の天文学者が共同で電波望遠鏡を使って行なわれた（1・11読）。

GAP短信 GAP NEWS

★「東都よみうり」に日本GAP紹介記事掲載

読売新聞の姉妹紙「東都よみうり」二月三日付第四〇六号に久保田会長の写真入りで日本GAPの活動状況が大きく掲載されて都内東部一帯に反響を起こした。

★「江戸川タイムス」も大々的に報道

都内東部一帯を地盤とする「江戸川タイムス」紙も三月号の一面トップ記事で日本GAPの活動と久保田会長の業績を紹介し、コニストン円盤と金星人オーソンの写真を大きく掲載した。これは二回にわたる連載記事になっており、次回は四月号に載る。江戸川区内で大反響を巻き起こし、本部へ問い合わせが殺到した。

★山形・仙台合同支部大会

本号49頁に予告された合同支部大会がいよいよ五月四日に山形県天童市ではなばなしく開催される。三連休の中日なので集合に好都合のため大盛況が予想される。詳細は予告頁を。

★大阪支部大会も開催予定

大阪支部も五月二十一日、久方ぶりに吹田市民会館で大会開催に踏みきるただし今回は事情により翌日の観光は中止し、一日だけの大会。熱気溢れる集会が期待される。この詳細予告も本号49頁に出ている。

★今年度GAP海外研修旅行

今年度第十回日本GAP海外研修旅行は本号47頁の広告どおり「アメリカ南米宇宙ロードの旅」を八月九日より二十日まで十二日間実施する。今年は好評で正式参加申込者はすでに十数名に達しているが最終的には二十五～六名になる模様。参加希望者は47頁の広告を参照の上、案内書を申し込まれたい。

★第二次デザートセンター調査

去る一月二十日より六日間、日本GAPは六名から成る第二次デザートセンター調査団を編成して現地を調査した。その結果アダムスキーの真実のコンタクト地点を突きとめて大成功裡に帰国した。詳細な内容は本号トップ記事「デザートセンター円盤着陸事件」で発表。

★栃木支部主催UFO写真展

来たる五月三日から七日までの五日間、日本GAP栃木支部は栃木県宇都宮市の栃木会館二階ギャラリー（栃木県庁前）でUFO写真展を開催する。今回は趣向をかえてアダムスキー関係写真が主体になるも、さらにGAP会員五～六名の撮影になるカラーUFO写真（いずれも本誌に掲載済）も加えて説得力を強化する。期間中三連休が含まれるので盛況が予想される。

★神奈川支部の名称変更、その他

神奈川支部は四月より横浜支部と改称した。これは横浜が国際都市として知名度が高いため支部会員全員の要望によるもの。また四月のみ月例会を第四日曜日に変更する。会場は従来通り。

★静岡支部を廃止

本年三月末で静岡支部を廃止した。

★会員同士のおめでた

横浜支部副代表・元井武士氏（横浜）と会員の深見鮎子さん（横浜）は今年八月上旬にハワイで結婚式を挙行し、そのあとロサンゼルスへ渡り、ハネムーンをかねて日本GAP海外研修旅行団と合流する。

★ユーコン英文版第5号大好評

UFO contactee英文版第5号は発行が大幅に遅れていたが三月末に印刷完了し、全世界のUFO研究団体へ発送された。海外ではユニークなUFOと宇宙哲学の研究情報誌として名声を博し高く評価されている。なお日本語版の本誌も海外各国在住の日本人会員、UFO研究団体等に発送されており、内容デザインとも世界最高のUFO研究誌として絶賛を博している。これに刺激されてかイギリスの有名なUFO研究誌『フライイング・ソーサー・レビュー』誌は数年前より版型を菊版変型より大きなA4判に変えたが、カラー写真は全く掲載していない。内容も単なるUFO目撃事件、ヒューマノイドによる誘拐事件等が主流をなしており、哲学的な記事は全くない。これは欧米のUFO関係機関誌の特徴。

★GAP特製テレホンカード第二弾

好評のGAP特製テレホンカードは斬新なデザインで毎回売り切れているが、三月より三度目の優美なデザインによるカードを出した。詳細は巻末の広告を参照。

★特別推持会員、募集

現在日本GAP本部は本誌と英文版編集を久保田会長が自宅で一人で行ない、事務関係の仕事は松村助手と奥さんが手伝うという体制。これで精一杯という会長の活動を援助するために特別維持会員制度が設けてある。参加希望者はハガキで説明書を申し込まれたい。

★本誌書店卸の枠を拡大しよう。

GAP（知らせる運動）の進展状況を分析した結果、最も効果があるのは「書店卸し」であるという結論に達している。書店こそは生きた図書館であり、その場で入手できるので、ここへ〝展示〟するのが一般人にとって最短情報入手径路となる。アダムスキー問題に対する潜在関心と宇宙的志向性を持ちながらも日本GAPや本誌の存在を知らぬ人たちを発掘する意味で、本誌の書店卸しチームに多数参加されたい。ハガキで申し込めば案内書を送る。

★原稿・資料募集

本誌の記事原稿を募っている。UFO目撃、宇宙哲学研究実践、宇宙科学等の原稿・写真・資料等を歓迎する。原稿書きが苦手な人は会長が出張するか地方支部関係者を派遣して体験談を聴取し原稿に仕上げるので本部宛連絡されたい。ただし心霊的な性質のものは一切お断り。また事前連絡なしの突然の本部来訪も遠慮されたい。

UFO——宇宙からの完全な証拠

UFOs and the Complete Evidence from Space by Daniel Ross

金星、火星、月に関する真相

●ダニエル・ロス／久保田八郎訳

連載第8回

一九六九年末から七一年初頭にかけて月面に降り立った米アポロ宇宙飛行士たちは月に大気と水が存在する事実を知ったけれども、NASAは彼らに黙秘させて月を死の世界にした。豊富な資料と徹底的な研究調査によりNASAの隠蔽策を暴露し続ける気鋭のUFO研究家ダニエル・ロスの筆鋒は冴える。

第7章　アポロ月へ行く（続き）

NASAの欺瞞に踊る正統派科学者

NASA（米航空宇宙局）は月へ行ったのと同じやり方でエジプトへの旅も演出できたはずだ。

エジプトの四分の三は灼熱不毛のサハラ砂漠である。この砂漠のまん中に着陸船を降ろしたとすると、そこはピラミッド群、豊かな水を湛えるナイル河、雑踏のカイロ市から数百マイルも離れているので何も見えないだろう。宇宙飛行士たちはバケツ数杯の砂を持ち帰らされる。こうしてNASAの探査活動の情報だけが流されたとすれば、エジプトはつまらない不毛の土地として忘れられてしまうだろう。この雄大な神秘の大地が、ただ砂漠が広がっているだけの荒地になりさがってしまうのだ。

NASAは月に関するいくつかの矛盾した情報を、ときには不注意で、ときには慎重に発表してきた。正統派学者達は、むかしの望遠鏡による観測記録を無視したのと同じように、愚かにもこの事実を無視したのである。インチキな情報によるイメージから月の真実の姿を割り出すには、多くの骨の折れる細心の調査を必要とした。

ここで世界のトップクラス月理学者ヴァル・A・ファーソフ博士に再登場を願うことにしよう。一九六九年に彼の著書『古い月と新しい月』がタイミングよく出版された。NASAの煙幕は大衆の目を覆うことができたかもしれないが、望遠鏡観測に多年をついやし、しかも望遠鏡による記録の歴史すべてとその科学的評価を知っている一専門家には通じなかった。もしNASAの公表する月の姿がもう少し正確であったなら、われわれはあらゆる望遠鏡を無用の長物として捨ててもよいだろう。

月探査機や月着陸による実際の宇宙発見事を再検討する前に、ファーソフの著書『月という不思議な世界』について以前に述べた事柄で明確にしておきたいことがある。彼の科学論文を読んで、月の生命の存在を当然とみなすのに最も都合のよいその書物から私が証拠を優先的に取り上げる一方、この根拠をあまり支持していない部分を私が見すごしていると考える人がいるかもしれないが、これは次の理由で当たらないのである。

ファーソフの偉大な英知

彼の本を再吟味しているあいだに、私は過去二十五年間に積み上げられた多くの証拠類を知る恩恵に浴した。私は月に関する近年の証明可能な証拠を完全に把握したが、たしかにそれは彼の初期の科学的分析の多くが正しかったことを確証しているのだ。彼の第二著である見事な書物に関しても同様で

ある。

彼の二冊の書物の中には少し疑問点があるけれども、それはただ月の引力と大気の実状が当時まだ明らかになっていなかったからにすぎない。それ以外のあらゆる点でファーソフの分析は正当であったし、月の引力と大気に関するわれわれの最近の知識を加えれば全体像はいちじるしく明確になってくる。この重要な問題についてはあとで述べることにしよう。

しかし少しのあいだ忍耐が必要だ。というのは物事を研究するには論理的な筋道をたどることが大切であるからだ。ほとんどの人は気が短くて、充分な基礎知識を得る前に何かに関する解答を知りたがる。しかし人々が最初から完全な事実を知らされたとしたらどうなるだろう？　人々はそれを信じないだろう。その解答が自分たちの従来の信念や短気な考え方と対立するからである。

こうした習慣は訓練された学習法や考え方とおき代えられる必要がある。

▲1971年7月26日から8月7日まで月を回る軌道に乗ったアポロ15号の司令船エンデバーから宇宙飛行士アル・ウォードンが撮影した月面の光景。高度約80km。

▶一九八九年七月十六日、人類最初の月着陸をめざしてケネディー宇宙センターからアポロ11号とサタン5型ロケットが火を噴いて上昇する歴史的一瞬。

そうすれば人々は知識情報を評価し、与えられていることを理解するのが向上するのである。かりに私が最初から月に関する究極の真相だけを書いて、そのまま放置しておいたら、自分たちの制約された信念と矛盾するという理由で多くの人がそれを否定するだろう。

これが間違いないことを、哲学、歴史、科学、宗教、政治等、あらゆる知識の分野で見い出すことができる。うわべだけの知識しか持たない人が何かに関する真実に直面したとき、本人はそれを正しく評価できず、混乱しながらそれをしりぞけてしまう。人類はこのようにして自分の無知を不朽なものとしているのだ。

ファーソフは第二著の中で的を得た指摘をしている。月面における諸変化や出来事は一流の天文学者連によって絶えず観測されていた。だからファーソフは望遠鏡観測記録を文句なしに否定する天文学者たちは月を写真でしか知らないのだと非難しているのだ。

時折、雲や暗部が現れては消えた。束の間の現象も頻繁に目撃されていた。霧、明るい霞、火山から発する気体、水蒸気雲、不思議な光体群などが目撃され記録されていたのである。

火山活動で形成されたクレーター

望遠鏡という〝目〟によって多くの物事が活発に展開するのが見られたが、NASAの探査機によって九十六キロメートルの高度から撮影された白黒のスティル写真（訳注＝ムービーでない普通のプリント写真）は、ほとんどそれらを見せていなかった。ルナ・オービター五号によるたった一枚の写真だけが、アリスタルコス・クレーター内部の霧を見せていたにすぎない。

月軌道上から撮られた高解像度写真

は、火山活動が月面の地形形成上の主な要素であったことを示唆している。月の火山群は噴火と気体放出を続けていたらしく、その事実はアルフォンス・クレーター地域を観測中のN・A・コズィレフによる分光写真分析の結果、一九五八年十一月に初めて記録され、一九五九年にも再度同じ場所で火山活動が明瞭に確認されたし、一九六三年にはアリスタルコス・クレーター付近でも認められている。

しかしながら正統派天文学者連はこのことを激しく否定し、月面の穴やクレーター群は新旧を問わずすべて流星の衝突によって作られたのだと主張したのである。この説を完全に公式なものとするためにコーネル航空研究所は、一九六四年八月、特に指名した権威者たちによる報告を発表したが、その内容は月面のあらゆる物が衝突で出来たものとみなすというものだった。直径千五百キロメートルもある嵐の太洋も含めてである。

この三年後、アメリカのルナ・オービター（複数）が月の裏側の連鎖クレーター群を撮影したとき、アメリカの地図製作者はNASAの月面裏側地図の作成に際し、連鎖クレーター群を正確に図示することを拒否した。このような連鎖クレーター群は流星衝突理論では説明が不可能だったからだ！　月の歴史上、火山活動が主な要素でない限り、連鎖クレーター群は形成されないはずである。

一方、ソ連が独自の月写真をもとに作成した月面図には、月の裏側に存在する連鎖クレーター群が明確に示されていた。（ほとんどの人にとってこれは文句なしにショックだけれども、いわゆる多くの権威者は自分に都合のよい物しか見たがらないというのが現実なのだ。だが今や人々が目を覚ますべきときである！）

命令に従ったアポロ8号

月理学者たちと正統天文学界のあいだのこの論争においてNASAはどんな役割を果たしたか？

NASAは論争の流星説を支持する側につき、宇宙飛行士たちにこの説にそった姿勢で月の様子を伝えるよう命じたのだ。

アポロ8号が最初の軌道を回って月の裏側から出てきたとき、管制センターが呼びかけた。

「アポロ8号、こちらヒューストン。九十六キロの上空から見た月はどんな様子だ？」

ジェームズ・ラベル船長は答えた。

月は無数のクレーターが散在する灰色の焼石膏のような眺めであり、ほとんどのクレーターは隕石かある種の飛び道具で撃たれて出来たかのように見えると。これが月を見てその様子を述べた最初の言葉であり、世界中のテレビに生中継されたのである。

続いてフランク・ボーマン大佐が遙かな彼方から自分の考えを送信してきた。

「月は広大な無の世界で、太古の気味悪い軽石のような、寂寞とした、人を寄せつけそうもない世界のように見えるよ」

アンダーズ少佐は聖書の一節を朗読した後、月は自分の子供たちがときたま遊んだ砂場のように見える上、グチャグチャで何とも表現のしようがなく、ただ沢山の穴と突起の群れが見えるだけだと付け加えている。

これが月の真の姿を否定する第一段階であった。宇宙飛行士たちは軍の将校であるから、ファーソフが言うように許されてよいだろう。命令は絶対であるからだ。しかし科学者はもっと客観的な見方をする必要がある。

NASAはなぜ火山が月面形成の中心的役割であることを否定したかったのだろう？　それは火山が惑星を取り巻く大気と密接に関連し、そして火山から出る噴煙の約四分の三は水蒸気であるからだ。NASAは月の空気や水の存在のわずかな徴候すらも確証しようとはしないだろう。次に述べるのはもっと直接的な証拠をNASAがいかにごまかそうとしたかの完璧な例である。

宇宙空間に散った小便？

一九七一年のはじめ頃、月面のアポロ12号と14号の着陸地点に残されていた高感度の計測器が、月面の割れ目から噴出する水蒸気を感知した。この両地域に置かれていた地震計が弱い地震の振動を記録したので、その割れ目はちょうど出来たばかりのものだった。しかもこの高感度装置は約百六十キロ離れた両地点を通過した巨大な雲（複数）を数度記録したのである。

ライス大学の物理学者ジョン・フリーマンとH・デント・ヒルズの報告によると、これらの装置が三月七日に二百六十平方キロの範囲を覆う水蒸気雲を感知し、しかもその水蒸気の九十九パーセントは水だったと述べている。この二人はその両アポロ着陸地点の地下には水が存在するという見解を表明したのである。

不意をつかれたNASAの報道官たちは、それらの観測装置は宇宙飛行士がうっかり置き忘れた小便袋が何かの理由で破れたために、その内容物に感応したのだろうと主張して、科学者の報告に反論したのだ。

この途方もない釈明は正統派科学者連を満足させた。NASAは彼らが満足することを知っていたのだ。この件に関しては他の見解が出されることさえなかったようだ。

月には空気がないというのに、この二カ所のアポロ着陸地点間の百六十キロの距離を覆うほどの水蒸気を、一体何が支えていたというのだろう？

他の惑星の生命に対する恐怖

NASAが直接声明を発表することは全くなかったけれども、月写真と探査活動の記録の注意深い研究の結果、月の大気の存在を示す多くの証拠が後に明白になってきたのである。この種の専門的分析により、一九五〇年代の望遠鏡による調査やカラーフィルター写真から予想されていたものが確証されたのだが、それは月には確実に大気が存在するという確証であった。

ファーソフによると、その密度と総量は従来の理論値をはるかに超えるという。彼は、月の空気を見る上での最大の障害は、往々にして人間の潜在意識に横たわる『他の世界に生命が存在するという考え方に対する迷信的な恐怖感であり、それはほとんど憎しみに近く、特に近くの惑星に対してはそれが強くなる』と付け加えている。

この態度は特に一般の科学者のあいだで顕著に見られるもので、そのために未解決の諸発見が遅れるのだが、これは正しい科学的調査や評価を妨げるからである。臆病で迷信深い心の持主が、他の惑星群に生命はあり得ないという数学的な理論におそろしいほど固執しているのである。

月に空気がないという考えは一九二五年にジェームズ・ジーンズ卿がとなえた説に結びつけられている。気体の平均速度は月からの脱出速度の四分の一を超えているので、いかなる大気の層もすぐに消えてしまい、そのため月が一定の大気を保持することは不可能だろうとジーンズは述べたのだ。

しかしこのジーンズ理論は月の引力は地球の六分の一という説にもとづいたものであり、さらにこの理論には他の根拠薄弱な仮説も含まれていることをファーソフは克明に分析している。この批判的な分析内容はあまりにも複雑なため、ここには述べきれないし、本書の範囲を超えているので省略するが、一九二五年のジーンズの理論が多くの理由で間違っており、もはや正統派科学者がその背後に隠れることはできないと言えば充分である。

月の大気をつきとめたアポロ8号

前に述べた月の望遠鏡観測に関する件に少し返ることにしよう。大気効果は月理学者たちによって記録されたのだが、いつも一般天文学界から疑問視されるかまたは無視された。なぜ月理学者たちは月の空気の明白な存在証拠を提示するか、またはその組成を特定できなかったのだろうか？

これは、地球からの分光写真分析では、月に存在する地球型の空気や気体を直接に特定するのは不可能であるからだ。というのは月の吸収スペクトル帯は地球の大気のより強いスペクトル帯によって全く消されてしまうからである。また存在するかもしれないアルゴンと窒素は紫外線の中でのみスペクトルに吸収されるのだが、紫外線は地球の電離層でかなり遮断されるため、発見と測定は不可能だろう。

とにかく地球の大気が測定の妨げになるので、月の大気の組成と密度を測定する唯一の方法は、宇宙空間からのスペクトル観測か、または月面での直接観測に限られてくる。NASAだけがこの情報を持っているが、たしかに彼らは相当量の大気を検出したのである。その正確な組成と密度が公式発表から程遠いものであることは疑いない。それは高度な機密情報とされているのだ。

NASAのカラー写真類を詳しく見ると、月の大気の証拠を示しているものが何枚かある。NASAの公式出版物である『アポロ8号――月のまわりを回った人間』には、濃密な大気の存在を確証する三枚のカラー写真が掲載されている。

アポロ八号の宇宙飛行士たちが宇宙空間から見て撮影したのだが、目で見える月の縁全体にそって明確なリム・ブライトニング（天体の縁が輝いて見える現象）が見られるのである。この現象は月を取り巻く気体の層が存在してこそ可能になるのだ。

（訳注＝アポロ8号は一九六八年十二月二十四日、月面から高度百十キロの周回軌道に乗り、月を十周し、乗っていたフランク・ボーマン大佐、ジェームズ・ラベル大佐、ウィリアム・A・アンダーズ少佐らは交代で旧約聖書の『創世記』の抜粋を朗読して地球の管制センターへ送信した）。

そのアポロ8号小冊子の十二頁に掲載されている宇宙空間から撮影された地球の写真は、地球自体のリム・ブライトニングを映し出している。

同じ小冊子の十四頁には宇宙飛行士が宇宙空間から撮影した月の全体像が載っているが、ここでも縁にそって全く同じリム・ブライトニングを見せている。

ファーソフは指摘している。

「この地球と月の写真はどちらも同じカメラと同じフィルムを用いて撮影されたもので、われわれは地球の回りに大気層があるのを認めているのだから、月の同じリム・ブライトニングの背後にひそむ同様な現実を否定するのは全く非論理的と言えるだろう」と。

月面で風に揺れた旗

オービターとアポロの両探査機とも日の出の直前に月の地平線上に広がる淡い光のモヤや、太陽が月の縁の下に

沈んだ後の柔らかい薄暮の輝きを撮影している。これらの現象は大気を必要とするのだ。次の写真に示した斜めから撮影された写真は、夕方の太陽により月の裏側につくられた柔らかい灰色の影をはっきりと映し出している。

しかし空気のない月を信じる天文学者たちは、月でできる影はすべてまっ黒だと常に主張してきたのである。

『ムーンゲート――米国宇宙計画の隠された発見事』の著者ウィリアム・ブライアンは、アポロ14号の旗が揺れた事件を詳しく紹介している。これは多くの宇宙科学研究家に知られている出来事だ。

アポロ14号の飛行士たちが小さな旗竿を立てた後、現場のテレビカメラが作動していたのだが、そのとき突風が吹いて旗が大きく波打って揺れたのである。

ブライアンはこのアポロ14号フィルムのコピーを手に入れて詳細な分析を行なった。宇宙飛行士たちは旗が揺れ始めたときにそのそばにいなかったけれども、それを見ると二人ともすぐに走り寄って、旗を写していたカメラの視野をさえぎったとブライアンは述べている。一人の宇宙飛行士はレンズの前を片腕で覆う仕草までしているが、これは月面上で大気による風が認められるほどショッキングなものはないからである。

（訳注＝アポロ14号は一九七一年一月三十一日に打ち上げられて、シェパード宇宙飛行士とエドガー・D・ミッチェル中佐がフラマウロ地域に着陸し、月着陸船アンタレスの船外で九時間をすごした。その間、四・五キログラムの岩石を採集し、月面科学実験装置とレーザー反射器を月面に設置した。この模様は日本でもテレビで放映され、一人の宇宙飛行士がテレビカメラの前を手で覆う光景も映し出されたが、これがシェパードとミッチェルのいずれであったかは定かでない）

とにかく大気存在の証拠を見られてはまずいのだ。NASAはあえて何も語らず、この事件全体は好都合にも忘れ去られてしまった。正統派科学者連に「月には大気がない」と唱え続けさせるのが原則なのだ。

▶アポロ14号のシェパード宇宙飛行士が月面に旗を立てた光景。風で旗が揺れる直前に撮影？

これ以後のアポロ月飛行では、常に形が変わらないように糊付けしたようなタイプの旗が使用された。金属製の布のように見えるが、たぶん極細の金属をクモの巣のように編み込んだらしく、〝揺れている〟形に固定されていた。これ以降の中継放送でNASAは真空の世界でも星条旗が揺れて見えるように、この巧妙なデザインが必要だったことを強調している。

月面上のトリック実験

空気のない月の概念を完全に定着させるための別なトリックがアポロ15号のときに演じられた。これは星条旗事件の直後の飛行である。この企みは文句なしに精神制御とでもいうべきもので、この偽りの場面が将来の真実発表の可能性を打ち消した以上、NASAが月の真相を公表する気がないことは明らかだ。

月面が真空または空気のない状態であることを示すために、一人の宇宙飛行士がガリレオの重力実験を行なうように命じられた。それは大衆に印象づけるための比較的簡単な作業だった。

真空中では空気抵抗がないために、あらゆる物体は重さと形にかかわらず同じ速度で落下する。そこでアポロ15号の着陸地点においてハンマーと羽毛が同時に落とされて、それらが予想どおりに同じ速度で落下することを証明しようとしたのである。

実際にそれらが同時に地上に達したからには、その羽毛に何か金属の小塊が仕掛けられていたにちがいない。この演技は月に空気がないという操作された信念を補強するために計画されたのだ。

しかし真の証拠は別にあった。アポロ12号の着陸時に、逆推進ロケットにより舞い上がったホコリが落下するまでにかなりの時間を要したとファーソフが指摘している。もし真空であれば、すべてのホコリがアッというまに落下したはずである。

初期の米ソのロケット探査機が時速数千マイルの速度で月に激突し、巨大なホコリの雲を上空約五キロの高さまで舞い上げた。大気の厚みがないというのに、どうしてこれらの雲がそんな高空まで舞い上がることができたのだろう？

もちろん、どんな科学の教科書を調べてみても、いまだに月の環境はほぼ完全に真空だと書かれているのを発見することができるだろう。最も寛大な試算でも月の大気密度は地球の千分の一から一万分の一程度だとされている。

この数字はけっして変わらないだろう。人間とそのエゴが、自分が唯一の居住可能な世界に住んでいると信じた

いからなのだ。正統派学者連は月の空気も水も〝見る〟ことはできないし、NASAもそれを確認しないだろう。それが月に存在することを認めれば、月の生命の問題を広く展開させることになるからだ。

月の空は暗黒ではない

月面で宇宙飛行士たちが撮った月写真のなかには、目に見える昼の空が写っても当然ではないだろうか。そのとおりだ。しかしNASAはこの大気存在を支持する証拠がおおやけに洩れないようにするために、月面での撮影に関して徹底的に事前準備をしていたのである。

月の空を隠したことは別として、月探査が進むにつれて色彩や現実性を示すという点では徐々に前進が見られる傾向になった。

アポロ11、12、14号の着陸地点は不毛の砂利の穴の群れみたいであり、写真の出来栄えは、まるで薄暗い洞穴の中で白黒写真を撮ったかのようにボケて退屈なものだった。

一方、アポロ15、16、17号は地理的にもっと興味深い位置に着陸しており、そこで撮られた写真は少し明るさを増していた。より自然で現実的な様子を見せ始めたのだ。事実、アポロ17号の写真集の中には地球の色に近いパノラマ的な写真が何枚かある。ただし地平線上の黒い空はそのままになっている。

NASAはいずれの月飛行でも、着陸地点が明暗界線ぎりぎりの夜明側になるように計画した。その結果、宇宙飛行士たちは地平線上約七度という低い角度からの太陽を背に受けて、シャープな浮き彫りの状態で月面の特徴を見ることになった。これは月着陸船をうんと容易に安全に着陸させることにはなるだろう。

しかし読者は記憶しているように、月の一日はその遅い自転速度のために地球のわずか十四分の一の速度で推移する。したがって最初三回のアポロ着陸船が月を離れたときはまだ早朝だった。その結果、彼らの活動状況は薄明かりのなかで撮影されたのである。

しかし後の三回の月着陸は月面でもっと長時間をついやして、早朝と正午の中間頃にまで及んだため、パノラマ的な光景が色彩豊かに輝き出た。これらの着陸中に撮られた数枚の写真の中に月の濃密な大気が示唆されている。早朝と正午の中間頃には相当量の大気が明るい空として姿を現すだろう。そして一枚のアポロ16号の写真の中で朝空が明るく輝いているのだ。ウィリアム・ブライアンは彼の著書『ムーンゲート』の中で、月の空がつくり出す光の拡散を示唆する証拠写真を提供している。

これら少数の写真は例外だ。NASAが公表したほとんどの写真は暗黒の空を見せているが、これも月大気の証拠を隠すための彼らの骨折り仕事の一部なのだ。

月の地平線上の柔らかい青色か青白色の朝空は、もとは宇宙飛行士たちがカメラにフィルターをつけて撮影したのだろう。ラッテンフィルターまたはそれと同等のものが使用されたと思われる。ラッテン12フィルターは空の青色を完全に隠し、さらに光のスペクトルの紫色の部分も消してしまう。他のフィルターと組み合わせて用いると、空のすべての可視スペクトルが排除できるだろう。

たとえ宇宙飛行士たちが持ち帰るもとの写真が不満足な仕上がりでも、現像処理過程で空を黒くすることも可能である。NASAは空気のない月を売り出しているのだから、暗黒の空の写真を作ることは至上命令であった。

(訳注＝アポロ月飛行では6×6判でスエーデン製のハッセルブラッド、35ミリ判で日本製ニコンの特注カメラがおもに使用された。ラッテンフィルターは米コダック社製。ラッテン12はモノクローム用の黄、黄緑フィルター)。

月面から星々を見た宇宙飛行士

すでに提示された月の大気の証拠が与えられたからには、月の日中の空の変わりゆく明るさと色彩の様子を少なくとも想像してよいだろう。

月の早朝の空は、地球の夜明け前の柔らかく光る空と同様、濃い青色か青紫色だと思われる。そうだとすると、月面基地から見る空は地球の北極圏以北の居住地域から見るのと何ら変わらないだろう。そこでは人々が半年ごとの昼・夜周期の中で暮らしている。

北極圏の北約千キロに位置するスピッツバーゲンに住む四千人の住民は、十月末から二月中旬まで太陽を見ることはない。この期間中、空は暗くも明るくもない。むしろ薄暮に近い状態だが、人々はそれを全く自然なものとして受けとめている。おそらく月の空もこれと似ているだろう。

星の光を拡散させる大気がなければ月面から星は見えないだろうというのは、著書『ムーンゲート』の中でウィリアム・ブライアンが述べた主張である。これは地球の場合も全く同様である。巨大なレンズのような働きをして星々をきらめかせる大気がなければ、ごく少数の明るい星を除いて、ほとんどの星は暗すぎたり遠すぎたりして肉眼のままで見ることはできないだろう。

地球の大気は遠方の無数の星々を見せるための巨大なレンズの役目を果たしている。われわれはこの事実を知っている。なぜならば地球の大気圏外の宇宙カプセルから外を見たとき全く星は見えなかったと、以前宇宙飛行士たちが語っていたからだ。

近年になってこの事実は再確認され

た。一九八四年二月のＡＢＣニュース放送でスペースシャトルの活動状況がテレビで放映されたときである。ウィリアム・ブライアンが筆者に知らせたのだが、シャトルの船外活動をする宇宙飛行士たちのニュースを見ていたとき、宇宙飛行士の一人が次のように言うのを聞いたという。

「公式声明。ここからは星が全然見えない」

これも公式だが、右の出来事は『宇宙船の内部』（一九五五年刊）の中でアダムスキーが伝えた初期の宇宙情報をさらに強く支持している。

金星の母船に乗ってアダムスキーが初めて宇宙空間に旅したとき、彼は丸窓から外を見て「宇宙の背景が完全に暗黒であるのを見て驚いた」と述べている。ＮＡＳＡが言うとおり、もし月に大気がないとすれば、月面にいる宇宙飛行士たちに星々は見えないはずである。

しかしこれは月に対してあてはまらないのだ。私は一九八四年五月六日、カリフォルニア州ウォルナットクリークで、アポロ十五号の宇宙飛行士ジェームズ・アーウィンの講演会に出席したが、そのとき自分の月旅行の短篇映画を解説中、彼は「月面に立っていたとき、とてもはっきりと星々を見ることができた」と述べたのである。

わがＮＡＳＡの宇宙飛行士たちは、地球の大気圏外の宇宙カプセルからは星が見えないと語った。それなのに月面から見えるということは、月にはレンズの役割を果たす大気があるにちがいないのだ。きらめき続ける星々を見せる夜明け直後の空は、アーウィンにとって忘れがたい印象を残すための美しい眺めだったにちがいない。

表側の月面に関しては、寂寞（せきばく）とした環境や、時折襲うきびしい気候があることを私たちは認めざるを得ない。したがって、こちら側の月面基地は理想的な環境とは言えないだろう。

しかしそれがどうしたというのだ。北極圏以北に住む人々もけっして理想的な居住地域にいるわけではないが、一度彼らが自然環境に順応してしまえば実際に困難を感じることなしに人々がそこで幸せに暮らしていることを私たちは知っている。事実、彼らはそこがとても気にいっているのだ。つまり、ものはすべて考えようなのである。現実に月の環境を考えて、スモッグ、人口過密、交通量、犯罪などを抱えた地球の大都市群の条件と右の人々の条件を比較すると、月面の基地はむしろ理想的とみなされるかもしれない！

月には水も存在する

大気があるのに水が存在しないというのは非論理的だ。この宇宙の中で最も豊富に存在する元素は水素で、続く二番目の活性元素は酸素であることから、水は最も一般的な化合物であるはずだとファーソフは指摘している。

月で水の証拠を見い出すことを当然のこととして期待すべきだと述べて彼は、その不在を説明するのは、むしろその存在を説明するよりもむつかしいだろうとつけ加えている。

しかし正統派たちはこうした考え方を恐怖の幻影と見る。水のゆきつく所に生命があるからだ。

月のこちら側に過去に水が存在したことを示す多くの証拠がある。月写真により約二十五の干上（ひ）がった河床が確認された。シュローターの谷は幅一・六キロ以上もあり、長さ二百四十キロ、流さは六十メートルにも及んでいる。この深さまで刻まれるには何世紀もかかったことだろう。

ハドレー渓谷はあちこちが深さ三百メートルを超えている。アポロ15号と16号の飛行士たちは、着陸地点付近の山々のふもとを取り巻く大昔の水位の跡を見たと言っている。

月アルプスの斜面を走る無数の深い溝（みぞ）が、以前の激しい水の流れの跡を示している。直径数百メートルしかない小さなクレーター群が多数存在しているが、それらはきちんとした球型の完全なお椀（わん）型で、「あたかも旋盤を使って作られたかのように」見えるのだ。

ファーソフはこの描写をＧ・Ｐ・クーパーの言葉であるとし、これらの小クレーター群は月面下の浸潤層の水が噴出して形成されたのだと絶対的に確信している。

そして事実、大昔にはかなり大きな湖が多数存在していた。何枚かのオービター写真群の中で、その地質学的証拠が明確に示されたのである。それらの写真群のなかにはリチオリ・クレーターと裏側の南半球各地を撮影したものが含まれていた。

月の裏側で最も特徴的で重要な姿を見せているのが、時折『湖』と呼ばれているツィオルコフスキー・クレーターである＝**写真**。そこは特異な地域で月面探査期間中に広く写真に撮影された。ファーソフはその写真資料を徹底的に分析し、このクレーターの西側にそって突き出た二つの地域上にある縦方向の縞（しま）模様や溝（みぞ）の群れは、太古の氷河によって形成されたのだと結論づけた。今は干上（ひ）がってしまったリチオリ湖付近の地域でも、過去の氷河活動を示す特徴的な模様群が見られる。

月には強い引力と濃密な大気がある

月面の気候がさまざまの変化をしてきたのは明らかだ。表側の広大な砂漠地帯を形成してきた地質学的な原動力が一体何だったのかはだれにも分からない。

それは極端な磁極転換や地軸傾斜の変化とともに形成されたかもしれないし、あるいはいつも地球に同じ側だけ

を見せる現在の軌道に至る過程での、月の自転速度の段階的な減速とともに形成されたとも考えられる。

実際には、月が地球のまわりを回っているように見えるのは目の錯覚なのだ。この二つの惑星は一緒に太陽のまわりを進行しているけれども、引力によって互いの進路を修正し続けているのである。月が軽い天体であるためにその軌道は地球よりも大きく軌道が動かされ、そのために地球のまわりを回っているように見えるのだ。

しかし実際にはこの二つの惑星の軌道はどちらも常に太陽を中心とした楕円軌道である。つまり月と地球は一年周期で太陽のまわりを公転しているけれども、月の回転のスピードのために常に同じ側だけを地球に向けているのである。

干上がった湖や河床などの証拠写真から、過去の氷河時代やクレーター群の壁や山々の斜面にそった大昔の水位など、多くのことが推測できる。次に述べることを注意深く読まれたい。

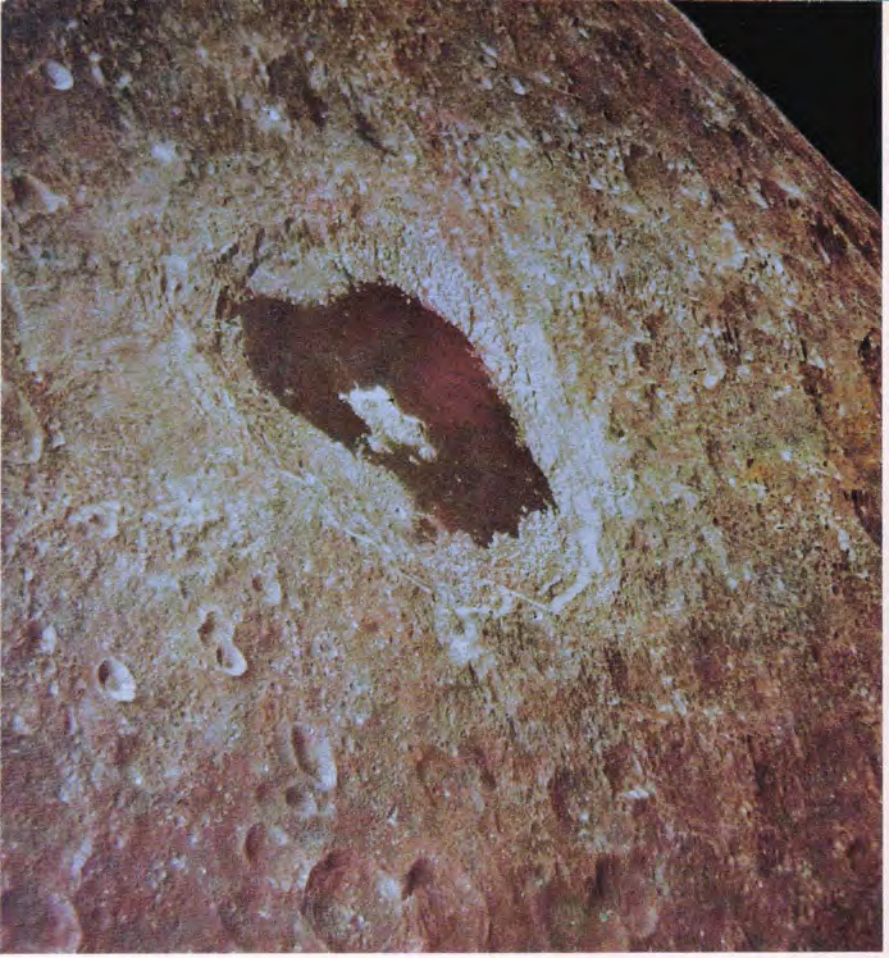
月の表面にかつて水が存在したということは、その水を液体の状態に保つための充分な密度と圧力を持つ大気がなければならなかったはずである。

ウィリアム・ブライアンはさらに推論を進めている。月がこの大気を保持するためには強い引力を持つ必要があったはずで、しかも過去に強い引力があったとすれば現在もまだあるはずだと。月は今なお強い引力を持つので（彼の著書『ムーンゲート』の中でNASAの資料を基に証明されている）そこにはまだ濃密な大気が存在するはずである。

気候的変化の長い歴史の中で、地質学的作用が水を徐々に新しい場所へ移し、月の裏側の各地にゆっくりと、より自然な環境を出現させた。一方、表側では水はおもに山岳地帯の地下にたくわえられるようになった。

しかし、こちら側に薄い雲を形成し、まばらな植物群を支え得るほどの水分が月の大気中に存在するのだ。こうした現象は先の望遠鏡による研究の項で徹底的に取り上げた。

理解すべき重要な事実は、月の過去の歴史のなかでそこに水があったということは、激しく異なった現在の月の環境のなかでも依然として水が存在するということである。砂漠地帯にはその形跡だけが見られるにすぎないけれども、おびただしい量の水が表面に多くの水を保持できる環境の温暖な地域のほうへ遠く移動したのである。両極に近い所では雪や氷が見られるかもしれない。このことはわれわれの確立された大気存在の証拠と全く密接に結びつくのである。（第七章完。以下次号）



◀月の裏側のツィオルコフスキー・クレーター。しばしば『湖』と呼ばれる。これは月の地平線に対して南東を見た光景で、アポロ13号から撮影した。アポロ13号は酸素タンクの謎の爆発により、月の周回軌道に乗っただけで着陸をあきらめて地球へ帰還した。月面でテストするための核爆弾を積んでいたといわれている。

Letters ユーコン広場

投稿歓迎 字数を問わず。匿名発表可なるも住所氏名明記のこと。

素晴らしい東京月例会

東京　山木益巳

東京月例会は毎月素晴らしい月例会で心から感謝しております。三月は清水南さんの「必要なものは与えられる」と題する講演と久保田先生による「宇宙哲学」講義の中の「あなたは宇宙のあらゆるものと関係がある……樹木に茂る葉、小鳥のさえずり、カエルの鳴き声、密蜂のうなる音……すべてがあなたに語りかけるのであり……」という個所を解説されたときに、山野忠彦氏の「樹木の病気を治すことによって樹木が自分を元気にしてくれる」という体験談を引用されましたが、まことに素晴らしいことであり、大自然の大いなる力をあらためて実感いたしました。実は私はあのとき G・マーラーの自然の交響曲と呼ばれた第三シンフォニーを想い出しながら講演を聴かせて頂きました。

そして遠藤さんのテレパシー練習では色のイメージによる好結果の導きなど、とても参考になりました。実は私は今まで万年筆に黒インクを使用しておりましたが、昨年の十二月頃に考えるところあってロイヤルブルーに変えました。正式文書は黒が原則ですので、今は黒インクを入れた万年筆と青インクを入れた万年筆の二本を常時所持しております。ですから「色によるイメージ」という遠藤氏の体験談が実に興味深く感じられました。毎月の東京月例会がとても楽しみで、待ち遠しく感じられてなりません。

また本日（三月十六日）はJR小岩駅の区報のコーナーに「宇宙からの訪問者」と題する久保田先生のインタビュー記事が一面に大きく載っているのを見て大変驚きました。オーソン氏の肖像画、コニストン円盤、そして久保田先生が自宅の事務所で金星の大母船をさし示している写真などが大々的に掲載された「江戸川タイムス」を見たとき、ついにここまできたかという充足感を感じた次第です。とても素晴らしいことだと思います。スペース・ブラザーズもきっと喜んでいらっしゃるでしょう。ますますのご活躍を。

真の幸福は和合にあり

福島県　中島一郎

春川正一氏と久保田教授からの御助言、まことに有難うございました。春川氏の助言の意味がようやくわかりました。もし地球人の各家庭の家族の各人が平和と和合と幸福に満ち、楽しい人間関係が形成されれば、おのずから宇宙問題が解決してしまいます。その逆に反感、分裂、闘争などの悪い種子を心の中にまけば悪い実（核戦争など）が生じます。久保田教授が「良きカルマを形成して豊かな人生をおすごしになるようにと祈ります」と私のような人間を励まして下さったことに感謝します。

私、心の中に良き種子をまきます。自分の家庭を金星のようにすることは容易ではありませんが、頑張ります。春川氏にお会いになりましたら中島という者が感謝していたとお伝え下さいませ。久保田教授の「UFO研究は人間研究」という持論、よく身にしみてわかります。

地球人各人がもっと物質的精神的に恵まれ、幸福になれば、UFO問題が表面化すると思います。その意味では地球人すべてに対して不平不満を起こし、地上的なことのみに関心を持つ時代から、平和や感謝や天上的なものに興味を持つ時代に移行するようお祈り申し上げます。

追伸

春川氏の助言は私がGAP会員をやめるほうがよいという意味ではないと思います。もっと家庭のことを考えて下さい、もっと足もとを見なさい、もっと現実を考えてそれを良い方向に変えて下さい、家族と和合しなさいという意味だと思います。

それとは別に、十二月の東京月例会で久保田教授がスペース・ピープルからのアドバイスとして（編注＝これは編者が春川氏から聞いたもの）「何かの壁にぶつかったとき、その壁をぶちこわすのではなく、壁を乗り越えるならば、素晴らしい世界が見えてくる」という意味のことを話されました。これは私の場合にも一つのヒントになります。いままで私は地面にはいつくばっていたウジ虫でした。鷲のように空高く飛べば二次元世界の迷路もなんら問題にな

▲日本GAP東京月例研究会（平成元年1月14日。東京上野公園内、東京文化会館にて）

りません。昔の人たちはよく鳥瞰図を引き合いに出しました。マーフィー博士も「いかなる問題にも必ず答がある」と言っています。私もいつか驚のようになれると確信しています。どうも有難うございます。

職場で啓蒙活動を展開

東京　伊東芳和

昨年十月の月例会以後、月例会には出席できず、先生には大変申し訳なく、日ごと断腸の思いにかられております。そのため今年一月の月例会にはどうしても出席しようという強いイメージを描いておりました。しかし職場の責任者である関係から部下を働かせて私だけが休むわけにはゆかず、結局、遅れて月例会に出席した次第でございます。それでも帰るべき館にやっと着いたという安堵感で胸が一杯になり、改めて先生の懐のぬくもりを感じさせて頂いた次第でございます。それはいつも感じる優しさのフィーリングであり、学ぶことの険しさの象徴である厳しさの威光でもありました。そして会員の方々の高い波動と相まって、そこに心の故郷を見る思いが致しました。

私の職場（ホテル）で働いて何よりも嬉しいことは、UFO、古代遺跡、宇宙哲学、超能力等について比較的オープンに話せるということでございます。興味の度合、あるいは理解度の差こそあれ、年齢に関係なく耳を傾けて頂き、私が先生から学び教わった数々を職場で多くの人たちに話すことができるのはこの上ない喜びでございます。これまでの既成概念という鉄柵を取り除くのは簡単ではありませんが、その扉がわずかでも開かれて、一人でも宇宙的な生き方に目覚めて頂ければと思っております。宇宙哲学を目で学ぶだけでなく職場を通して実践するというのは非常に重要だということも体を通して分かりました。

私の場合、よく働くという行動のなかから、楽をして肉体を必要以上に休ませるのは自分が負けている証拠であり、精神が肉体の要求に左右されすぎるのは精神の停滞をきたすものであるという形で話しております。また人間は常に高い精神性を追求するため存在するので、それによって高度な文明に移行できるということも話したりしています。

私自身は土・日に限って超多忙になるような仕事ですが、仕事に追われるから「宇宙哲学」に疎遠になるかというと、それは全く逆で、少ない時間を見てはアダムスキー全集を少しずつページをめくりたいという欲求にかられております。万物に現れる全ての物事を探求したいという理念は止まることを知りません。これは年を取るに従って強くなり、肉体にも好影響を及ぼしているような気がします。毎日十時間余の労働が何十日続いても、休むことなく仕事を続けることができます。

私の職場の社員のある若い女性は田舎（山形県米沢市）にいた頃、中学一年のときに家族と一緒にアダムスキー型円盤を家の近くで見たという話をしていましたし、ホテルのコックさんは一～二年前、ホテルのすぐ上空を横切ったUFOを目撃したと言っていました。こんな話を聞きますと間近の変化を感じないわけにはゆきません。

しばらくは先生をはじめ会員の方々とお会いできませんが、より一層の宇宙哲学の探究と実践を第一にやってゆきます。そして今年八月のGAPの海外研修旅行に楽しく有意義に参加したいと思っています。

もう三月です。春はすぐそこまでやって来ていますが、寒さはまだ続くと思います。風邪と腰痛にお気をつけて、私たちを変わらずに御指導下さいますようお願い申し上げます。七月下旬の旅行説明会でお目にかかりたいと考えております。お元気で御活躍下さい。

（49頁に続く）

☆☆日本GAP企画第11回海外研修旅行☆☆

アメリカ南米 宇宙ロードの旅

昭和64年8月9日→8月20日（12日間）
参加費用　¥595,000/30名まで/分割払い可

●昭和64年度の日本GAP海外研修旅行はアメリカ西海岸と南米ペルーに決定しました。アダムスキー問題に関心のある方は一度ならず何度でも行きたくなるアメリカのアダムスキーゆかりの土地、南米ペルーのプレインカとインカ帝国の遺跡、謎のナスカの地上絵等、宇宙につながる特殊な場所をあこがれ訪う大旅行の素晴らしさを満喫して下さい。日程は下記のとおりです。

日　程　表

8月9日(水)夕方成田発、約10時間の飛行後、同日朝ロサンゼルス着。ただちに市内を見学、ファーマーズマーケット、オリベラ街、ハリウッドその他を視察。同夜ロサンゼルス泊。
10日(木)はバスで南下、モハーベ砂漠の一角、デザートセンターへ行き、1952年11月20日、アダムスキーが金星人と会見したコンタクト地点を見学。同夜ロサンゼルス泊。
11日(金)バスでパロマー山へ登り、アダムスキーが一族と共に住んだパロマー・ガーデンズの住居跡、山頂の大天文台を見学。バスでロサンゼルスへ帰り、深夜ロサンゼルス空港から空路ペルーの首都リマへ。
12日(土)朝リマ着後、市内を周遊、インカ時代の遺物を展示する国立人類学博物館、黄金博物館、その他史跡を見学。同夜リマ泊。
13日(日)朝リマより空路クスコへ。高地に栄えた太陽の帝国インカのかつての首都クスコのエキゾチックな街を散策後、午後はバスでサクサワマンに残る15世紀石垣城塞大遺跡、ケンコー遺跡、タンボマチャイ遺跡を視察。同夜クスコ泊。
14日(月)早朝クスコから列車で出発、アンデスの雄大な風景を眺めながら謎の空中石造都市マチュピチュへ。標高2500mの断崖絶壁上の都市遺跡へバスで登る。同夜はクスコ泊。
15日(火)朝、高原列車で出発。大アンデス山脈のまっただ中を10時間の列車の旅。雄大な山並みと大平原の牧歌的な素晴らしい風景を楽しみながら夕方チチカカ湖畔の町プノ着。同夜プノ泊。
16日(水)午前中は標高3800mの名高いチチカカ湖へ行き、トトラ葦を編んで作った浮き島で原始的な生活を営むウロス族を観察。湖畔を周遊。午後は円柱石塔墳シュスタニの遺跡その他を見学。同夜プノ泊。
17日(木)朝、空路プノ発リマへ帰り、さらに空路ナスカへ行き、ここで世界最大の謎のひとつとして有名な地上絵をセスナ機で観察（これは希望者のみ。要別途料金）。同夜リマ泊。
18日(金)夕方まで自由行動。各自リマ市内を散策。夕方空路ロサンゼルスへ飛び、夜、着。同夜ロサンゼルス泊。
19日(土)午前中、自由行動。午後ロサンゼルス発、空路日本へ。
20日(日)夕方、成田着。

※諸種の事情により日程等に多少変更がある場合もあります。

詳細については下記宛ハガキに「64年度GAP旅行案内書送れ」と記してご請求下さい。お問合せも下記へ。
〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F
ワールドセブントラベル社　田中 正（宛）
☎03(499)2461/夜間は0474-77-4728(田中宅)へ。

本誌バックナンバー掲載記事目録

※印は絶版。在庫なし。お申し込みの際は郵便振替にて日本GAP宛ご送金下さい。バックナンバーに限り送料は不要です。

No.104　平成元年1月25日発行　¥900

UFO問題と世界の運命――久保田八郎
アダムスキーの宇宙的カルマと異星人の援助――アリス・ポマロイ
デザートセンターで円盤着陸痕跡発見!――安藤澄雄/久保田八郎
過去世透視法とその実例――遠藤昭則
UFO-宇宙からの完全な証拠⑦――ダニエル・ロス
GAP活動の原理――ダニエル・ロス

No.103　昭和63年10月25日発行　¥900

アダムスキーの体験は真実だった!――アリス・ポマロイ
我らの惑星に愛と希望を――久保田八郎
カイロ上空に輝くUFOが出現――伊東芳和
私のUFOコンタクトと宇宙的目覚め――富岡設子
UFO-宇宙からの完全な証拠⑥――ダニエル・ロス

No.102　昭和63年7月25日発行　¥900

UFO目撃で驚嘆、大変化した私――後藤泰二
仙台市上空にUFO長時間出現――遠藤昭則
富士山周辺でテレパシーに応えるUFO群――長沼宏志
ミラクルワードとイメージ法で奇跡を起こす――田中　正
良い想念であなたの環境は良くなる――
UFO-宇宙からの完全な証拠⑤――ダニエル・ロス

No.101　昭和63年4月25日発行　¥900

宇宙的家族のUFO目撃の日々――坂本茂子
精神的指導者に対する警告――G.アダムスキー
円盤の窓から手を振る"異星人"――齊藤庄一
長野県に出現したUFOの大群――博田文喜
頻繁なUFO目撃と超能力体験――佐々木八郎
UFO-宇宙からの完全な証拠④――ダニエル・ロス

No.100　昭和63年1月25日発行　¥900

UFO問題とアダムスキー――久保田八郎
富士山二合目から目撃したUFO――遠藤昭則
私はこうして超能力を開発した――坂本正廣
アメリカの不思議な土地――水野和彦
UFO-宇宙からの完全な証拠③――ダニエル・ロス

No.99　昭和62年10月25日発行　¥700

UFO-宇宙からの完全な証拠②――ダニエル・ロス
山中湖畔で空中を飛んだ自動車!――清水　南
富士山にUFOが大挙出現――清水敏恵
〈写真〉大分市上空のUFO――
アダムスキーの大地とマヤの国へ――久保田八郎

No.98　昭和62年7月20日発行　¥700

木星の衛星イオに古代都市跡を発見!――
UFO-宇宙からの完全な証拠①――ダニエル・ロス
静岡市上空にUFO頻繁に出現――遠藤昭則
太陽系惑星にまだ仲間がいる?――
連夜のテレパシー送信に応じて出現した円盤――片岡　豊
万物の実体と想念の重要性――知念清邦
私は別な惑星へ行ってきた!(最終回)――春川正一

※No.97　昭和62年4月20日発行　¥700

驚異の『生命の科学』と円盤大接近――伊藤達夫
八王子市でUFOを撮影――降籏和彦
別な惑星の偉大な人類と文明――G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた!④――春川正一

※No.96　昭和62年1月20日発行　¥700

私のオーラ透視とテレパシー現象――清水　南
京都市上空にUFO5回出現――久保田八郎
想念放射、透視、UFO目撃――遠藤昭則
UFOと心霊は無関係――G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた!③――春川正一

※No.95　昭和61年10月20日発行　¥700

茨城県千代田村のUFO――日本GAP茨城支部
アダムスキー問題に対する考察――内田格男
私のUFO目撃と不思議な体験――中嶋順子
ジャンボジェットに並行して飛んだ円盤――久保田八郎
私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性――春川正一

※No.94　昭和61年7月20日発行　¥700

テレパシーで飛来した真っ黒い円盤――堀江健一
八丈富士山麓でUFOを撮影――谷口美雄
地球を救う愛の想念放射運動――山崎清美
母船の周囲には人工大気層がある――G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた!②――春川正一

※No.93　昭和61年4月20日発行　¥700

月面にいた2機のUFO!――
超低空に出現した大型円盤と黒い人影!――笠原弘可
私も光体を見た――伊藤達夫
多くの館――G.アダムスキー
質疑応答――G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた!①――春川正一

※No.92　昭和61年1月20日発行　¥700

偉大な惑星から来た兄弟たち――野口敏治
サン・ピエトロ大寺院の異星人――久保田八郎
米トップ科学者、UFO墜落の事実を認める――ゴードン・クレイトン
質疑応答――G.アダムスキー
地球の哲学と宇宙哲学の相違(完)――松原眞弓

※No.91　昭和60年10月20日発行　¥700

円盤に乗った日本人少年――伊藤達夫
ブラジル人教授の円盤搭乗事件――
質疑応答――G.アダムスキー
太陽系の惑星に知的生物が存在!?――
地球の哲学と宇宙哲学の相違②――松原眞弓

※No.90　昭和60年7月20日発行　¥700

朝霧高原の不思議な"月"――伊藤達夫
旭川にも月擬装UFO出現――石川晴道
尾道市に出現したアダムスキー型円盤と母船――
ムーンゲート第14章(完)――ウィリアム・L・ブライアン
アダムスキー問題の真実性と宇宙哲学実践法――久保田八郎

※No.89　昭和60年4月20日発行　¥700

八ヶ岳に出現した円盤――秋山京子
富士山麓にUFO頻出――高梨和明
金星文字解読研究――遠藤昭則
ノアの箱舟とアブラハム――久保田八郎
アステロイド帯と月のクレーター――ウィリアム・L・ブライアン

※No.88　昭和60年1月20日発行　¥700

驚異の高松市円盤降下事件!――伊藤達夫
人工衛星による写真と地球上の異様な発見物――ウィリアム・L・ブライアン
米政府はUFO問題の真相を公開せよ――ダニエル・ロス
太田市上空に頻出するUFO――久保寺信一
不思議な予知夢の実現――内藤重雄
テレパシー開発基礎トレーニング――久保田八郎

※No.87　昭和59年10月20日発行　¥700

月と地球は空洞のコアをもつ天体か――ウィリアム・L・ブライアン
宇宙から来る訪問者たちは地球人を指導しようとする――ジェニー・アベ
絶対に真実であったアダムスキーの体験――遠藤昭則
丸窓の並んだ母船が出現!――後藤澄子
二十一世紀の地球――松原眞弓
異星人イエスの足跡を訪ねて――久保田八郎

私の自己訓練法

東京　和田英次

日常生活の精神的な面での改善を必要と考えている人が多いと思います。アダムスキー氏はそれを具体的に「自己訓練法＝想念チェック」という形で提案していますが、本来そこまでやるべきなのですが、私達は日常生活が多忙なので実施することが困難です。しかし、だからといって何もしないわけにいきませんし、自分がきわめて意識的になっているつもりでもまだ不充分です。

それで私が行なっている良いと思われる方法がありますので、それを紹介します。それは「表」を作成し、縦軸に短気・利己的・非難・差別・悪習慣などという欄を作り、横軸に日付の欄を作ります。一日の終わりに自分の精神状態のすべてを詳しく思い出して、良い精神ならば○をつけ、引け目を感じたら△、悪ければ×を記入します。ただし慎重にして自分を罰する気持で判断しなければなりません。作った「表」はコピーしておくと良いでしょう。

編者付記　日本ＧＡＰは以前に「想念観察手帖」というのを作製して頒布していました。これはポケット判、一カ月分が記入できるようにした手帖で、左右に開いて左頁を宇宙的な想念の記入欄にし、「宇宙の創造主との一体感。自分と全生命との宇宙的な一体性を感じさせるような想念」「他人に対する積極的な親切・愛・奉仕感」「平静な楽しい感情。仕事に対する積極的な活動感。感謝の心。現象の因果関係を考える」の三つの欄を設け、右頁は利己的な想念を記入する頁として、マイナスの想念を記入する三つの欄が設けてありました。これは今考えても世界に比類のない素晴らしい手帖であったと自負します。しかし資金難のために絶版となり現在に至っています。

ところがこれを使用した人のなかには「想念観察をすれば気違いになる」とか「全く心が落ち着かない」という人が少数ありました。これは地球人が数千年にわたって自己想念観察を行なう習慣を失ってしまったために一種のロボットと化してしまい、感情に支配される動物になったものですから、自分で自分の想念を観察することが困難になり、それを強行しようとするとかえって混乱する状態を意味しています。

しかし編者はむかしからアダムスキーの「宇宙哲学」の教えに従い、自分で想念観察手帖を作って自己観察を実行していました。郷里で高校教員であった頃、「毎十分想念観察法」と名づけた方法を実行したこともあります。これは時計を見ながら十分間ごとに自分の想念を観察してそれを手帖に記入する方法で、これを三カ月続けたら神のような心境に達したものですから、これで良しと思ってやめたら、またあともどりしてしまいました。その他、ズボンのベルトの左右に数取り器を取り付けて、宇宙的想念が起これば左側のボタンを押し、非宇宙的想念や分裂感情が起これば右側のボタンを押して、一日の終わりに数を集計するという方法も行なったことがあります。これも素晴らしい効果がありました。そしてかなりテレパシックな感覚が高まったことを覚えています。

人間には熱意や性質等の個人差がありますから、そんな事をやったって何もなりはしないとか、常に明るい方向を見るようにしていればそれでよいのだと言う人もありますが、編者などはおよそ自分の想念を観察しないで生きることは到底できません。自分の想念を知ることは一ミリでも大宇宙の魂に近づくことであると考えています。

〈予告〉平成元年度地方支部大会〈その2〉

	第10回　山形 仙台合同支部大会	平成元年度　大阪支部大会
日時	5月4日（祝日。3連休の中日） 午後1:00→5:00	5月21日（日曜日） 午後1:00→5:00
会場と交通	「天童市中央公民館」 3F第1実習室 ☎0236(54)1511 山形県天童市老野森1丁目1－1 ※天童駅から徒歩10分、タクシー約3分。	「吹田市民会館」 5F第5会議室 ☎06(388)7351 大阪府吹田市出口町4丁目 ※ＪＲまたは阪急電車千里線「吹田駅」から徒歩10分。
会費	¥2,000（希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。カラーグランドキャビネ判。送料共）	¥300（希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。カラーグランドキャビネ判。送料共）
プログラム	司会　柴田文子 1:00　支部代表挨拶　柴田光明　笠原弘可 1:15　講演「ＵＦＯ問題と宇宙的カルマ」日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生 2:30　全員記念撮影・休憩 3:00　全員自己紹介・意見発表・質疑応答 5:00　閉会 ※支部会員一同大変張り切って、大自然に囲まれた清新な雰囲気の中で高次元な大会を開催致します。先生の秘話が出るようですし、質疑応答では本部役員の超能力者・遠藤昭則氏も先生と一緒に質問に答えられますから、多数ご来場下さい。	司会　斎藤康美 1:00　支部代表挨拶　平塚和義 1:10　講演「宇宙哲学と奇跡を発生させる方法」日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生 2:30　全員記念撮影・休憩 3:00　全員自己紹介・意見発表・質疑応答 5:00　閉会 ※シンプルで中味の濃い大会にしたいと全員張り切っています。また、久保田先生も久しぶりの来阪で日頃めったに聞けない秘話をたっぷり話して下さいますので多数ご出席下さい。
夕食会	大会終了後6:00から8:00ごろまで下記の場所で開催します。 会費¥5,000程度 会場＝「滝の湯ホテル」 1F「藤の間」 天童市山元1445 ☎0236(54)2211 ※中央公民館前の川を渡りまっすぐ歩くと温泉街に出ます。徒歩5～10分。 ※2次会＝滝の湯ホテルから歩いて2～3分の「水車気そば」で¥2,000程度の会費で開きます。	大会終了後6:00から8:00まで下記の場所で開催します。 会費＝¥4,000　牛肉飲み食べ放題 会場＝「あじびる北別館」 大阪市北区堂山町3-13 （阪急東通り商店街） ☎06(313)4147
宿舎	「パーソナルホテル紀の川」（夕食会場のすぐ近く）を斡旋します。 天童市大字山元中5－7 ☎0236(53)4475 シングル　¥4,400（税サ込）25室 ツイン　¥8,000（　〃　）2室	「新阪急ホテル」（阪急電車とＪＲ大阪駅の隣）を斡旋します。 大阪市北区芝田1丁目1-35 ☎06(372)5101 シングル　¥11,660（新税サ込） ツイン　¥16,428（　〃　）
申込	大会、夕食会、宿舎、観光の申込はハガキにいずれかを記して4月末日までに下記へお申し込み下さい（電話でも可）。 〒999-51山形県新庄市大字萩野82 柴田光明 ☎0233(25)3261	夕食会、宿舎の申込はハガキにいずれかを記して5月10日までに下記へお申し込み下さい（電話でも可）。 〒661　兵庫県尼崎市水堂町3-16-8 平塚和義 ☎06(436)3478
観光	大会翌日は希望者で山寺、または有名な鳴子峡の見学を予定しています。 参加費¥2,000程度（昼食代別）	今年度はいたしません。
備考	5月は支部大会のため山形支部月例会は中止。仙台支部は月例会を開催。	5月の月例会は支部大会に変えさせていただきます。 6月から平常通り毎月第3日曜日に月例会を開催。

ジョージ・アダムスキー全集

久保田八郎訳　全8巻　B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必読の名著です。

1 宇宙からの訪問者　三三八頁　二五〇〇円

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。一九五二年十一月二十日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第I部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第II部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2 UFO問題の真相　二六二頁　二五〇〇円

第1巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第II部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの妨害が克明に描写されている。

3 UFOとアダムスキー　三五〇頁　二五〇〇円

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第I部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を収録して第II部とした。

4 宇宙哲学　一四八頁　一三〇〇円

人間のセンス・マインド(肉体の心)と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5 テレパシー開発法　一九〇頁　一八〇〇円

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の四官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシックな印象を感受する方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6 生命の科学　二〇五頁　一八〇〇円

アダムスキーが他界する数年前に出した Science of Life と題する十二分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7 アダムスキー論説集　三七〇頁　二五〇〇円

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第II部にはアダムスキー研究家として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

8 質疑応答集　二一六頁　二〇〇〇円

アダムスキーは一九五八年に質疑応答集を自費出版で頒布した。五分冊から成る小冊子で、全部で百問の質問と回答が収録してある。内容は現在の混迷した世界のUFO研究界に的確な解答と示唆を与えるものとして驚くほど新鮮である。これで本全集はア氏の重要な文献すべてを網羅した。

発行所宛直接注文の場合に限り、左記のように定価・送料をサービスいたします。(郵便振替または現金・書留でご注文下さい)

☆一冊注文――送料無料。書籍代のみご送金下さい。
☆第一巻より第四巻まで一括注文(正価八八〇〇円)――特別セット価格八〇〇〇円(送料共)
☆第五巻より第八巻まで一括注文(正価八一〇〇円)――特別セット価格七三〇〇円(送料共)
☆第一巻より第八巻まで一括注文(正価一六九〇〇円)――全巻セット価格一四七〇〇円(送料共)

■申込先▶文久書林　〒113 東京都文京区西方1-19-10 西方ハウス2F　☎(03)813-9561　振替/東京4-2521　日本GAPでは取り扱いません

英文版UFOcontactee No.5

B5・12頁・コート紙使用
¥500(送料¥175・3冊まで¥250)

久保田会長が心血を注ぎ編集した英文版Uコンは世界各国のUFO研究団体間で絶賛を博しています。春川正一氏の宇宙的体験談(第3回)、アダムスキーの質疑応答集を掲載し、昭和63年度日本GAP総会を写真入りで報じた国際的文献。英語学習にも好適。注文は振替または切手で日本GAP宛にどうぞ。　No.1、2、4、は在庫若干。No.3なし。

編集後記

●デザートセンター特集の本号はコンタクト地点を中心とする見開きのカラー大写真によって迫力満点と自負します。調査行参加者四名による報告記事も圧巻です。過去生からのカルマによる同質結集の法則をこの旅行時ほど痛感したことはありません。

●「アダムスキーに会った唯一の日本人」も痛快な実話で、筆者・向井氏の飾らない態度に好感がもてます。また日本の英語教育のあり方に対する大きな示唆を与えているともいえるでしょう。それにしてもアダムスキーの忍耐強い親切な人柄が鮮明に描写されており、貴重なドキュメントです。

●先号の「過去生透視法とその実例」が好評で、ぜひ続篇をの声もあって今号も続きを執筆されました。人間の波瀾に富んだ転生を考えれば現在の一生涯にのみ執着することのむなしさを感じます。

●その他、今号では数氏の記事を掲載しました。いずれも考えさせる内容です。

●ダニエル・ロス氏が連載記事で主張するNASAの隠蔽工作も、編者の「月面上空を飛んだUFO」で首肯できるでしょう。世界各国のUFO研究団体から殺到する資料を見ますと、この世界の裏面に隠された事実というものを感じないわけにゆきません。

●UFO目撃報告、UFO写真、超能力開発体験、宇宙哲学研究、宇宙科学等の原稿を募集しています(心霊的なものはご遠慮下さい)。採用分には薄謝を呈します。

●本誌は約百十名のボランティアにより全国の主要書店に卸されています。この協力チームに参加ご希望の方はハガキでお申し込み下さい。説明書をお送りします。(K)

日本GAP機関誌・季刊　夏季号
UFO contactee　105号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
☎03-651-0958
振替 東京4-35912
平成元年四月二十五日発行
定価九〇〇円・送料210円

※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

平成元年度

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第2土曜日　午後1:30→6:00	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。 ☎03-828-2111。ＪＲ「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本GAP本部　☎03-651-0958	会場費 ¥500 セミナー受講料 ¥1000 計¥1500	1:30→2:10 会員による体験講演。 2:15→3:30 久保田会長による「宇宙哲学」「アダムスキー論説集」講義。 テレパシー練習、近況報告、自己紹介、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。ＪＲまたは阪急電車「吹田駅」下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	長岡市今朝白1丁目「けさじろ荘」 ☎0258-33-7400。長岡駅東口より徒歩5分。無料駐車場あり。 連絡先＝星 富治夫　☎02579-2-5562	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	福岡市天神町5丁目1-23「福岡市民会館」3Ｆ国際会議控室 連絡先＝喜多正宜　☎092-863-5438	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日　午後1:00→4:30 **※5月のみ第3日曜日(21日)に変更。会場、時間は同じ。**	名古屋市中区金山1丁目5番1号「名古屋市民会館」特別会議室。☎052-331-2141㈹。 ＪＲ東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩5分。 連絡先＝林　国宜　☎0586-45-6468	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・テレパシー練習・座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日　午後1:10→4:20	仙台市青葉区1番町4丁目「141ビル(イチヨンイチ)内5Fエル・パーク仙台セミナー室」 ☎022-268-8300。仙台駅よりバスで県庁市役所前下車、三越デパート隣。 連絡先＝笠原弘可　☎022-295-0725	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
山形支部	毎月第1日曜日　午後1:00→5:00	山形市小白川町「社会福祉センター」 ☎0236-42-5181。山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。 連絡先＝柴田光明　☎0233-25-3261	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日　午後1:00→4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821 連絡先＝高野省志　☎011-822-8260	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
旭川支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2Ｆ小会議室。 ☎0166-26-1304。 連絡先＝川上三秀　☎0166-61-0044	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・質疑応答・テレパシー練習。
群馬支部	毎月第2日曜日　午後1:00→5:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」3Ｆ。 連絡先＝久保寺信一　店：☎0276-25-5958 自宅：☎0276-45-3544	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。座談会。
青森支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室。 ☎0177-34-0163。 連絡先＝田村嘉彦　☎0177-38-0416	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表等。
沖縄支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	那覇市寄宮1-2-1「那覇市民会館」1Ｆ　Ａ会議室。 ☎0988-55-5081。与儀公園の隣。 連絡先＝比嘉政広　☎09893-2-2889	¥1000 (積立金共)	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・想念観察とテレパシーの研究報告・自己紹介・座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日　午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
横浜支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00 **※4月のみ第4日曜日に変更。**	横浜市中区万代町2-4-7「横浜市技能文化会館」7Ｆ、703号室。☎045-681-6551。ＪＲ関内駅、地下鉄・伊勢崎長者町駅より徒歩3分。 連絡先＝清水　正　☎0488-66-7048	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・座談会等。
茨城支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	水戸市梅香1-2「三の丸公民館」小集会室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長野支部	毎月第4日曜日　午後1:00→4:30	塩尻市大門7番町「塩尻総合文化センター」第1会議室。 ☎0263-54-1253。 連絡先＝博田文喜　☎0263-58-8510	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
紀南会	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00 **※5月のみ大阪支部大会出席のため第4日曜日(28日)に変更。**	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」1Ｆ相談室。☎0735-21-2760。ＪＲ西日本新宮駅下車、徒歩5分。 連絡先＝松口幸之助　☎0735-34-0605(呼・田中)	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」と「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
栃木支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	鹿沼市(市役所裏)「御殿山会館」1Ｆ小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5km。東武新鹿沼駅から北へ1.5km。市内行きのバスに乗り天神町下車、徒歩5分。 連絡先＝渡辺克明　☎0289-62-3319	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長崎支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	長崎市魚の町5番1号「長崎市民会館」 ☎0958-25-1400。公会堂電停前。 連絡先＝元木和雄　☎0958-22-5521	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
薩摩会	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	鹿児島市与次郎2丁目3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111 連絡先＝鶴田清則　☎09932-5-4398	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
高松支部	毎月第1日曜日　午後1:00→5:00	高松市玉藻町9番10号「香川県民ホール」5F第1会議室 ☎0878-23-3131。ＪＲ高松駅より徒歩7分。 連絡先＝関　高明　☎0878-88-1334	¥400	テキストとして「宇宙哲学」「論説集」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。

A

あなたも超能力者になれる！

テレパシー能力開発用ESPカード

テレパシー、透視力開発用のＥＳＰカードはアメリカのデューク大学で科学的に開発されたゼナーカードが主体になっています。色カードは目を閉じたまま各カードの上に手をかざして色の発する波動を感知しながら色を言いあてる練習に使用するものです。堅牢なプラスチック製。

50枚１セットケース入り　使用説明書付き
¥4,800　送料¥360（2～5個¥670）

B

①オーソン肖像写真　②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ペッツが描いた名画の写真。（キャビネ判・カラー写真）　上半身写真もあり。定価¥600
②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド（心）の発達状態をあらわしている。（サービス判・カラー写真）
上記２点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。

①¥600　送料¥120
②¥300　送料¥62
一括注文の場合送料¥120

C

●●●●●●●●●● 大いなる信念と勇気を与えるGAP能力開発テープ ●●●●●●●●●●

毎月行なわれている日本ＧＡＰ東京本部月例研究会のなかから、日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生が宇宙的フィーリングをもってアダムスキーの名著を解説した講義などが収められたテープ。ドライブ中や、通勤・通学電車内で、あるいは就寝前に聞いたりすれば絶大な信念と勇気がわき起こります。

■日本GAP東京本部月例研究会録音テープ①

内容＝「宇宙哲学」・「アダムスキー論説集」解説講義／近況報告／質疑応答（一部）
テープ１本（120分）　¥1300　送料¥200
※このテープは日本GAPでは取り扱いません

■日本GAP東京本部月例研究会録音テープ②

内容＝「宇宙哲学」・「アダムスキー論説集」解説講義／テレパシー実践講義／テレパシー練習（テキスト付）／近況報告／質疑応答（全部）
テープ２本（90分×２本）　¥1900　送料¥250

◆申込先◆　〒133 東京都江戸川区本一色1-24-3-202 松村芳之 ☎03-653-9387 振替・東京0-162644

会員募集

日本ＧＡＰはＵＦＯ研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のＵＦＯと宇宙哲学の研究大集団！多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！
入会案内書をハガキで日本ＧＡＰへ申し込もう！

――日本GAP――

D

GAP特製 テレホンカード

第２弾テレホンカードは大好評裡に品切れ。ここにデザイン一新の上ＧＡＰが放つ第３弾！　アダムスキー撮影の名高いスカウトシップの写真を黄金色であしらった優美なカードは見るだけでも宇宙的高次元なフィーリングを起こさせて心がなごみます。

1枚¥1500 送料10枚まで¥62

E

会員バッジ

実物大

ジョージ・アダムスキーが金星人から与えられた唯一のバッジと形、色共全く同様に複製した径18㎜の丸い優美なバッジです。薄青色地に金色のシンボルマークが浮彫りされており、縁も金色です。表面には透明樹脂がかけてありますからキズがつかず、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏側が心棒ネジどめ式、女性用は裏側が安全ピン式です。ぜひお求め下さい。ご注文のさいは男性用・女性用の別を明記して下さい。
（無断複製を禁じます）

1個¥2000　送料４個まで¥120

F

――幸せを呼ぶ――

GAPシール

シールを製作しました。WITH COSMIC CONSCIOUSNESS（宇宙の意識と共に）の文字がシンボルマークを取り囲む優雅なデザイン。径6cm、5cm、4cm、3cm、2cmの５枚１セット。青と赤の２種類あります。自動車の窓、運転台、カバン、書籍・ノートの表紙、その他の持ち物に貼っておけばいつも宇宙的フィーリングに満ちて気分さわやか。良き想念が良い物事を招きよせます。表面光沢。防水加工。裏面のり付。ご注文の際は青、赤の区別をお忘れなく。

1セット¥900　送料５セットまで¥62

©を除く商品の申込先・申込方法

住所・氏名・電話番号・商品名・種類・色・個数等を明記の上右記へ郵便振替または現金書留でお申し込み下さい。

〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511　日本GAP
振替／東京4-35912　☎03-651-0958

●「セドナ・リサーチ・プロジェクト」参加者募集中●

この不思議なエネルギーで あなたには何が起こるか？

▲アリゾナ州セドナのエネルギースポットのある岩山

▲セドナの町の遠景

セドナ・エネルギー・ストーンの小片とエネルギーを調整する金箔がカプセル内に入っています ヘッド部分はセドナを聖山と仰ぐ有名なホピ・インディアンの胸像（銀製） 専用チェーン・専用ケース付

今、アメリカのアリゾナ州の観光地グランド・キャニオンに近い、セドナという小さな町が不思議なエネルギースポットとして熱い注目を浴びています。4次元的な不思議なエネルギーを放出しているそのセドナのエネルギースポットの地下深くから、超能力者の協力によって掘り出された〝エネルギーストーン〟――これを部屋に置いたり、身につけたアメリカの人々が種々の心理的変化や超常現象を体験しています。

セドナの不思議なエネルギーを研究しているアメリカのRIAと協力して、日本ニューエイジセンターでは、ペンダント化したセドナのエネルギーストーンを多くの人に身につけてもらい、その体験報告を統計学的に分析して、この不思議なエネルギーの性質を探る「セドナ・リサーチ・プロジェクト」を企画し、参加者を募集しています。「参加のご案内」をご覧の上、積極的にこのエキサイティングなプロジェクトにご参加下さい。

セドナ・エネルギー・ストーンにふれた150名のアメリカ人の体験データの一部

- ●「気力」が非常に満ちあふれてくる
- ●自分自身に対する自信のようなものが出てくる
- ●意識が高まり気分が高揚してくる
- ●他人へのやさしさ、人類愛のような次元の高い〝愛〟の感情が自然に出てくる
- ●深い瞑想状態に非常に入りやすくなる
- ●呼吸が自然に深くなる
- ●体がホカホカ暖かく心地よくなる
- ●夜よく眠れるようになる
- ●ケガや病気の回復が早くなる
- ●歯痛や頭痛がやわらぐ
- ●肩コリがなくなる
- ●疲れにくくなる
- ●長年の持病が直ってしまった
- ●集中力が増す
- ●創造的意欲・芸術的感性が磨かれる
- ●直観力が非常に強くなる

男女の別、年令層等によってバラつきはあるが、以上のような心理的変化・肉体的変化を報告した人が90%を超えた。又、次のような神秘的体験を報告した人も多かった。

- ●顔や手足から金粉が吹き出した
- ●幽体離脱を初めて体験した
- ●正夢や予知夢をたびたび見るようになった
- ●自分の前世と思われる記憶・ビジョンが潜在意識の奥深くから湧き上がってきた
- ●オーラが見えるようになった
- ●ヒーリング（病気治療）能力が身についた
- ●サイキックな体験をしばしばするようになった
- ●目に見えない「実体」（エンティティー）からインスピレーションやアドバイスを受けるようになった

超能力者の透視による情報

何名かの超能力者の透視によると

- ●通常の電磁気とは次元の違う〝電磁気的エネルギー〟が渦巻き状に出ている
- ●石の表面に幾何学的な模様がマンダラ状に並んで見える
- ●金色やエメラルドグリーンの美しいオーラが多量に出ている
- ●この石のエネルギーは、人間の意識を目覚めさせたり、マインドパワーや肉体の活力を高めたりする非常にレベルの高いバイブレーションを持っている

「セドナ・リサーチ・プロジェクト」参加のご案内

「電気的エネルギー（男性的エネルギー）の強いアメリカとは対称的な磁気的エネルギー（女性的エネルギー）が非常に強い日本列島の土地に長く住む日本人には、この不思議なエネルギーがどのように作用するか？」を調査するため、「セドナ・リサーチ・プロジェクト」が企画されました。

現在、日本全国から参加者を募集しています。応募資格は、16才以上の男女で、一定期間ペンダントを着用し心理的変化・肉体的変化を体験報告として提出していただける、感受性豊かな方であれば、どなたでも応募できます。

参加者にはペンダント代金7、500円の支払い（ペンダント到着後7日以内に同封の払込用紙にて送金）と体験報告提出が義務づけられ、又、「セドナ・エネルギー・ストーン情報」と「今回のプロジェクトの結果報告」を無料で受け取れる特典があります。（ペンダント到着後7日以内にペンダントを返品すれば参加はキャンセルできます。）

〈申込み方法〉

住所・氏名・年令（生年月日）・電話番号・職業・血液型そして「現在の健康状態」「超常体験（幽体離脱・金粉現象・ESP能力等）の有無」「現在やっている（あるいは過去数年以内にやっていた）能力開発法の有無と具体的内容（ヨガ・瞑想・各種の行・ヒランヤやピラミッドの利用、等々）を明記の上、ハガキ・電話で「セドナ・リサーチ・プロジェクト参加希望（ペンダントA・Bの別を必ずご記入下さい）」と今すぐお申込み下さい。

■ご注意■

◇セドナ地区は環境保護地域のため、今回お届けするエネルギー・ストーンは特別採掘許可を受けて掘り出された極く少量の限られたものです。日本に送られてきた分がなくなり次第、申込を締切らせていただきます。（申込多数の場合は先着順となります。）（今後セドナのエネルギーストーンが大量に市販されることは物理的に有り得ません）

〒107 東京都港区赤坂9-6-27
日本ニューエイジセンターUFO④係
電話 東京03（479）6576
受付時間AM10～PM20

UFO contactee 105号 平成元年4月25日発行 発行所 日本GAP 〒133東京都江戸川区本一色1-12-1-511 振替 東京4-35912 定価九〇〇円・送料210円

サブリミナルテープ
潜在脳刺激法であなたの人生が変わる！

今なら各シリーズを無料試聴できます。

マインドパワー・潜在能力を開発

「マインドパワーの開発」「充実した人生」―これらを簡単に現実のものにしてくれる驚くべきテープがアメリカからやってきました。アメリカの著名な心理学者S・ハルパーン博士の開発した"サブリミナル・プログラム"がそれ。なにせ美しいBGM音楽を聴き流しているだけで確実な効果があるというのですから、これを利用しない手はありません。

あのハルパーン博士があなたのために制作！

「マインドパワーの開発"充実した人生"……これらを現実の物にしたい」――これは、どんな人でも多かれ少なかれ持っている共通の願望でしょう。ところが、この夢をいとも簡単に実現してしまうテープがアメリカからやってきたのです。それがアメリカでは知らない人はいないほど有名な心理学博士スティーヴン・ハルパーン氏の開発したサブリミナルテープです。博士の手になるサブリミナルテープは、米国で昨年一年間だけで五十数万本という驚異的ベストセラーを続け、その確かな効果が実証されています。

BGMとして聴くだけで効果が!!

このサブリミナルテープ、耳に聴こえるのは、うっとりするような美しいメロディーの心がゆったりとくつろいでくる静かな音楽だけです。（日本の曲でいえば"喜多郎"の音楽にイメージが似ている。この音楽だけでもストレスを解消し、気分をさわやかにするすぐれた効果がある）しかし、実はこの音楽に、ハルパーン博士が開発した他に真似のできない高度な音響テクノロジーを駆使して、ある心理学的な言葉のメッセージが耳に聴こえない周波数に変換されて入っているのです。（潜在脳に独特の刺激を与える音楽の波長が、耳に聴こえないメッセージの波長を潜在脳へ運び、植えつけてしまう。）

この音楽に交って入っている"耳に聴こえない心理学的メッセージ"が、ただテープの音楽を聴いているだけで、潜在能力が開発される。"充実した人生へ歩み始める"という現象を引き起こす秘密なのです。

"本を読んだり趣味に熱中している時に、BGM音楽として聴き流しているだけで、夢がかなってしまう"――このアメリカの苦労いらずの科学的プログラムが、ついに日本の皆様にもご利用いただけるようになったのです。

商品お申込み案内書請求の方に試聴用テープを無料進呈！

① マインドパワー・潜在能力を開発 マインドパワーシリーズ〈MDシリーズ〉

あなたの心と体をゆったりともみほぐし、不安・緊張や心と体の疲れを取り除いてくれる宇宙的感覚のα波BGM音楽に、あなたの意識を拡大し、精神力（マインドパワー）や秘められた潜在的能力を自然に開発するサブリミナル・メッセージを同調させたのが、このMDシリーズです。

会社から帰ってその日の疲れを癒したい時、日常生活のわずらわしさから解放されたい時、静かなBGM音楽を流して気分転換をしたい時―そんな時にMDシリーズをBGM音楽としてお楽しみ下さい。各種の瞑想法で得られる"意識の拡大"「α波レベルの脳波の強化」「心の安らぎ」「秘められた潜在能力の開発」「精神力の強化」「人間性・人格の向上」等の効果が得られ、より大きな人間に成長してゆく自分と今まで以上に拡大していく人生を手に入れることができます。

MDシリーズのお届けするテーマの内容は、●完全なる安らぎ●意識の拡大●大いなる自分との出逢い●無限大の心●宇宙意識の目覚め●人間性・人格の向上●愛と慈悲のエネルギー●精神力の強化●偉大な潜在能力の開発●第六感の開発●自由自在な思考力●無限の知恵の獲得

（このシリーズのサブリミナルテープのベース音楽には、ハルパーン博士の友人である"ヤソス"の宇宙音楽をはじめ素晴しい瞑想音楽が使われています。）

② 現状を打破し充実した人生を 充実人生シリーズ〈HLシリーズ〉

「今のままではいけない！」「もっと充実した人生を送るために何かをしなければ……」――そう心の中では感じているんだけれど、現状を打破する第一歩を踏み出すキッカケをつかめずに毎日を惰性に引きずられて何となく過ごしてしまっている、という方にお勧めするのがHLシリーズです。

現状から抜け出し新しい人生に向けて第一歩を踏み出す動機づけと、毎日がワクワクするような胸のときめきを覚える充実した人生を送るために必要な能力や行動力を自然に身につけられるよう、魂にひびきわたる美しい音楽にまきれたサブリミナル・メッセージが、あなたの潜在意識にやさしく語りかけます。

就寝前や、「ちょっとBGM音楽でも流そうかナ」と思った時にこのHLシリーズを軽いBGM音楽としてお楽しみ下さい。

HLシリーズのお届けするテーマの内容は、●現状を打破する●目標・計画つくりの習慣●惰性からの脱却●最高の人生を考える●自分の可能性を試す●すぐ実行する習慣●必要な読書・勉強の実行●毎日ベストを尽くす●プロフェッショナルをめざす●向上意欲の強化●充実した人生を生きる●大いなる未来へはばたく

（このシリーズにはビノシス・プログラムは付いていません。各テープともA面B面を通してオートリバースでお使いになれます。）

※このHLシリーズには、充実人生計画シート、充実人生コンセプトシートが付いています。

●スティーヴン・ハルパーン博士のプロフィール●

音楽・音・言葉の潜在意識への作用の研究で世界的にその名を知られる心理学博士。学者であると同時に、"瞑想音楽の神様"としても米国はもちろんヨーロッパ各国にその名を知られ、世界的なファンを数多く持っている。博士の音楽は鑑賞用の音楽としても高く評価されているが、博士の長年の研究のエッセンスが凝縮した"音楽の薬"としての効能も医学・心理・教育関係者の間で高い評価を受け、いろいろな分野で博士の音楽を取り入れている。カイザー・パーマネント病院をはじめ全米の一流の医療機関では、博士の音楽を薬品の代わりとして患者に与え著しい効果を上げている。

今、お申込みの方・案内書請求の方に（先着500名）サブリミナルテープ1本を無料プレゼント中!!

今、お申込みの方・案内書請求の方先着500名に、ハルパーン博士制作の心身をくつろがせ、大脳の活性化にもとてもよい、アメリカで人気のサブリミナルテープをプレゼントしています。

今なら無料試聴でき特別価格で購入できます

●MDシリーズ　●HLシリーズは一年間の会員制の頒布会方式でお届けします。お申込後、毎月各テーマ別のテープを一巻ずつ（テーマによっては二巻）お届けしていきます。お支払いは毎月テープ到着後に4,800円（送料300円）。第一回目およびそれ以降もテープ到着後5日間の無料試聴期間を設けていますので、気に入らない場合は自由に返品できます。又、途中退会も自由です。

■今回ご紹介したシリーズ以外にも、「高速学習セット」「魅力的性格シリーズ」等のシリーズがございます。詳しい案内書をご希望の方は、お電話あるいはおハガキで「案内書希望」とお申込み下さい。

〈ご注意〉●このサブリミナルテープは通常は一巻7,800円で販売されており、今回の価格は頒布会員にのみ有効な特別価格です。●サブリミナルテープは聴いた人に確実に影響を与える強力なものです。内容を告げずに第三者に無制限に聞かせるのは絶対にお避け下さい。

〈お申込みは、官製ハガキ・電話で今すぐ!!〉

住所・氏名・年令・職業・電話番号を明記の上、「□□シリーズ試聴希望」又は「案内書希望」と在記までお申込み下さい。

〒101 東京都港区南青山1-26-4 アメリカンライブラリー社UFO④係

電話 東京 03(479)5864

（受付AM8～PM24 日・祭日も受付中）